
仮面ライダーW 追われるS

日吉舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーW 追われるS

【Nコード】

N2747T

【作者名】

日吉舞

【あらすじ】

ミュージアムを滅ぼすべく、最後の戦いに挑んだ仮面ライダーW。かの秘密結社壊滅と同時に消滅した存在であるフィリップは、姉・若菜の力により一年後に翔太郎のもとへと戻り、「二人で一人の探偵」の戦いは続いていく。

桜散る春のある日、鳴海探偵事務所の一同はドーパントがとりついた暴走車から若い娘が乱暴に外へ放り出されたところへ出くわす。ドーパントに追われ、ガイアメモリを渡すよう執拗に迫られる謎の女・未来。強大な力を秘めた「七つの大罪」ガイアメモリの秘密と

は？

作者オリジナル小説とのコラボ二次創作ですが、Wテレビシリーズ終了後の1エピソードとして書いております。テレビシリーズの雰囲気を実にノベライズすることが目標です。

春眠曉を覚えず。

岸辺で花開かせた桜が己の美しさを誇るように舞い散り、川面を薄っすらと儚げな色で覆う春の昼下がりは、まさに言葉そのものの空間をもたらししている。

しかし、あまり雅な雰囲気は自分に似合わない。

癖のついた髪にのせた黒い中折れ帽にふわりと下りた桜の花びらを指先で払いながら、彼はそう考えていた。

何故なら自分は、常に乾いた風と人の様々な想いを身に纏う探偵なのだから。

ぬるま湯のような日常に浸り切り墮落した毎日を送っているようでは、今もこの街のどこかに巢食い、人々を泣かせる黒い影を吹き払うことなどではしないのだから――

自称ハードボイルド、他者の印象はハーフボイルドである左翔太郎が目を伏せ、目の前の水面を物憂げに見やったときである。

「何、寝とるねん！」

すぐ後ろから若い女の甲高い声が上がり、軽快な衝撃音が重なった。

クリーンヒットした緑色のスリッパが帽子を弾き飛ばさなかったのは、ツッコミの主である鳴海亜樹子のせめてもの配慮であると思われるべきなのであるうか。

「あたっ！何すんだ、寝てねえよ！」

「今、引いてたのに！翔太郎くんがさっさと釣り上げないから、逃げられちゃってるじゃないのよ！」

振り向いて反射的に亜樹子へ抗議した翔太郎であったが、切り返して慌ててまた正面に向き直った。

彼が座っている岸辺から数メートル先の水面を漂っていた蛍光色の丸い浮きは、ぴくりとも動かない。そっと右手に握った釣り竿を

持ち上げてみても、やはり手応えは皆無だ。目一杯まで竿を引き上げてみると、先端から垂れたテグスの先には釣り針だけが空しくぶら下がっているのが見えた。

「餌だけ取られたか……」

翔太郎が軽く息をついて釣り竿を振り、手元に針を戻す。

「そんなんじや、今日の食費を稼ぐ前に日が暮れちゃうわよ。ほら、さっさと餌つけて続けた、続けた！」

スリッパを振る亜樹子に急かされた翔太郎は、足元に置いてあった練り餌を丸めて針の先に刺したが、その手がたと止まる。

平日の午後は、普通なら鳴海探偵事務所のデスクで依頼人からの相談を受けたり、事務処理をするのに忙しい。こんなところで引退後の暮らしを楽しむ老人よろしく、釣りなどしている場合ではないはずだった。

なのに自分は、一体何をしているというのか。

「あー、もう止めだ止め！ だいたい、何で探偵の俺が近所の川で釣りなんかしなきゃならねんだよ！」

「仕方ないでしょ。結婚資金貯めるのに、節約しなきゃならないんだから。竜くんにはばかり苦労かけてられないのよ」

釣竿を放り投げて折りたたみ椅子から立ち上がった翔太郎に、亜樹子が勢い込んでかかっていく。眉を吊り上げながら張りのある声で翔太郎と喧嘩する亜樹子は、童顔が手伝って翔太郎の妹のようにも見えるが、実際は立派に成人した女性だ。

鳴海探偵事務所創設者の娘であり現所長である亜樹子は、風都警察署の刑事である照井竜と婚約中の身であり、結婚式を数カ月後に控えていた。

照井はその若さに見合わず警視という地位にいるものの、亜樹子はその依存することなく彼を助け、共に人生を歩んでいこうという意思に今から溢れている。

その志は立派だ。

立派だとは思えるが、貯金になし崩し的に付き合いされる身にも

なつて欲しい、と翔太郎はここ数日特に感じるが多かった。

「そんなけなげな花嫁にい、翔太郎くんは協力しようと思わないの？」

「そりゃ、まあ……」

しかし一転して甘えた声を出す亜樹子を前にすると、翔太郎は頬を掻いてごまかすしかない。何と言つても亜樹子は鳴海壮吉の忘れ形見であり、言ってみれば恩人の娘なのだ。どうして拒むことができるだろう。

「だったら、今日の夕食の分を稼ぐの！最近ただでさえ依頼が減つてて厳しいんだから」

「じゃあ、亜樹子も手伝えよ。竿はそこにまだあんだろ」

だからと言つて、彼女の言われるままになるのも癪に障る。

傍らに残っている一振りの竿を指差してささやかな反撃を試みた翔太郎であつたが、亜樹子は胸を張つて見せた。

「私は料理担当だから、今は休憩よ」

彼女が料理担当と威張つて言つたところで、事務所の食事メニューは大体お好み焼き、たこ焼き、焼きそばのローテーションだ。多分今日は、釣れた魚の身を具の一部として使うつもりでいるのだろう。

そろそろ大阪ゆかりのメニュー以外のものも練習した方がいいのではないか。

溜息を漏らして折りたたみ椅子に座り直した翔太郎だが、この場にもう一人いるはずのメンバーがやけに静かなことに、今になつて気がついた。

「おいフィリップ！お前も、俺にばかりやらせんなよ……」つて、何してんだ？」

翔太郎は隣で同じように座っている少年に声をかけたが、返事が返つてこない。

日差しが眩しいのか、少年は丈が長いノースリーブのパーカーのフードを目深に被っている。しかしその視線が向いているのは水面

でなく、足元の地面であつた。

よく見ると、彼は全く日焼けのない白い手に小さな石を握って、しきりに地面を掘り返している。

「おい、フィリップ？」

不審に思つた翔太郎がもう一度声をかけると、フードの影に隠れた顔がこちらを向いた。

癖のある黒髪をいくつも撥ねさせて、視界を遮る前髪の一部を文房具のクリップで留めた特徴のあるヘアスタイル。その下にある繊細な顔に、子どものように純粋な好奇心に溢れた瞳が輝いていた。

これはまずい。

この少年、翔太郎の相棒たるフィリップが何か一つのことに熱中し出し、周囲が見えなくなる兆候だ。

「翔太郎、君は知ってるか？ 鯉という魚は雑食で、およそ何でも食べるらしい。こんな練り餌なんかよりも、生きている餌の方がよっぽど食いつきがいいかも知れないじゃないか。だから僕は、これを餌にして釣ってみることにしようと思う」

「ぎゃあ！」

熱っぽく語るフィリップを落ち着かせようと口を開きかけた翔太郎だったが、眼前に丸々と肥えたミミズが突き出され、情けない叫び声を上げることになってしまった。

「どうしたんだ、翔太郎？ ミミズは別に害を及ぼす生き物じゃないだろう。それどころか意外と栄養が豊富で、貴重な食料源としているところだって……」

高さの低い折りたたみ椅子ごとひっくり返つた翔太郎に次いで、フィリップは亜樹子にも土中からつまみ上げたばかりで鈍く光っている大ミミズを見せる。

「ぎゃー！ こっち向けるなー！」

フィリップの説明は、当然ながら亜樹子の派手な悲鳴にかき消された。

「君までどうしたんだ、あきちゃん？」

彼が怪訝そうにして暴れるミミズを手にしたまま立ち上がると、亜樹子に続いて尻餅をついた状態になっていた翔太郎までもが慌てて逃げ出した。その様子を見てやっと悟ったらしく、フィリップが首を傾げる。

「……二人とも、ひょっとしてミミズは苦手なのか？」

「見りゃわかんだろ！」

あくまで翔太郎を盾にする亜樹子を背に、フィリップから数歩離れた場所で構えた翔太郎が吼えた。

「そうなのか。害虫でもないのに……」

「時々、お前の感覚にはついていけないよ」

天才が感じることは、やはり凡人に理解できないところが多々ある。

まだ納得できず疑問を拭いかねているフィリップの表情を見ながら、翔太郎がやれやれと首を振ったときだった。

賑やかにして平和な騒ぎの渦中にあつた皆の耳に、雰囲気にとぐわなない騒音が飛び込んできた。

砂利道の小石を荒々しく擦り、タイヤを高く軋ませて疾走する車の音。誰かが乱暴に運転していることを思わせる大きな音は、一同がいる川辺よりも一段高い土手の方から上がってきている。土煙を上げてこちらに疾走してくるのは、白いボディに青い文字で会社名が書かれている営業車らしい小型の乗用車だった。

「ちよつと、あれ見て！」

亜樹子がただならぬ様子で叫び、車を指差した。

翔太郎が目凝らしてみると、白いボンネットの上に灰色をした何かが貼りついているように見える。

いや。

貼りついているのではなく、取りついているのだ。

猛スピードで土手を走ってくる白い車には灰色の人影が、ただし「人」ではないものがしがみついていた。人間に近い形をした頭と手足を持ちながらも、その肌はこつこつした岩に覆われたようで、

身の丈は明らかに人間よりも遙かに大きい。

風都にはびこるガイアメモリを使用し、おぞましい姿に変わり果てた元人間の怪人――ドールパントに間違いない。

そう気づいた翔太郎とフィリップの顔に、緊張が走る。

二人が視線を交わして頷き合った時、車の前輪が土手から外れ、車体の前半分が一瞬宙に浮いた状態になった。タイヤが空回りする間もなく、白い車体が速度を落とさずに川辺へと滑る。

が、車を運転しているドライバーはボンネットの異物を何とかしようと躍起になっていいるらしい。傾いた車体の後ろ半分が突然大きなブレーキ音と共に振られ、車はスピンするかに見えた。しかしそううまくはいかず、土手の凹凸にタイヤが取られて車体が跳ね上がったのがわかる。

そのような状態にあるにもかかわらず、ボンネットに取りついているドールパントがフロントガラスに岩のような拳を叩きつけた。甲高い音が上がり、フロントガラスに蜘蛛の巣状の亀裂が走る。

「きゃあっ！」

亜樹子のものでない女性の悲鳴が車内からかすかに漏れたのを、翔太郎は確かに聞いた。あの車を運転しているのは、若い女なのだ。反射的に彼が駆け出そうとした時、ついに車が横転した。

運転席のドアがその弾みで開き、小さな人影が土手の草むらへと放り出される。

小型の営業車は破壊音を撒き散らしながらあと二度転がったところで止まったが、ルーフを下にして川原まで滑り落ちた車体のガラスは全て割れ、ドアは歪み、無残な姿となっていた。

「いったあ……もう、一体何だったの……」

腰をさすりながら、運転席から車外に振り落とされた若い女が呟いて立ち上がる。

大きな怪我はないようだったが、グレーのジャケットから出た腕とデニムの下にある膝に擦り傷と打ち身があるようだった。車の損害に比例した衝撃が身体に及ばなかったのは、幸運だったと言える

だろう。立ち上げはしたものの、未だ頭がふらついているようだ。

『おい、女！』

その彼女の眼前に先の怪人が立ち塞がり、片手を差し出した。女が幼さの残る瞳を見開き、驚きで息を飲む。

『お前が持っているガイアメモリを渡せ。そうすれば、殺しはしない』

「う……し、喋った？」

ドーパントを生まれて初めて目にしたと見える女は立ち竦み、すっかり動転して相手の要求など耳に届いていないらしい。焦れたドーパントは手を振り、彼女に再び要求した。

『早く渡せ！』

「し……知らない。何、メモリって！」

ポニーテールに結った長い髪を振り乱し、怯えた様子で首を振る女の声は悲鳴に近かった。

『とばけるな！嘘をつくなら、お前を殺しても渡してもらう』

灰色のドーパントが、女に向かってじりじりと距離を詰めていく。彼女は成す術なく、後ろに下がるばかりだ。

「やばいな。行け、フィリップ！」

「ああ」

女の下に向かいかけていた翔太郎が足を止めると、フィリップが頷いた。彼が握りしめていた緑色のメモリを掲げ、翔太郎がダブルドライバーとメモリを取り出す。ダブルドライバーが輝き、翔太郎の腰に装着されたタイミングで、メモリを振り翳す二人の声が重なった。

「変身！」

フィリップがメモリの起動スイッチを指で弾く。

サイクロン

『CYCLONE！』

ガイアウィスパーが空気を震わせ、フィリップの腰に現れたダブルドライバーにメモリが差し込まれた。光を放ったメモリは、次の瞬間には翔太郎のドライバーに転送される。

『JOKER!』
ジョーカー

今度は翔太郎が掴んだ漆黒のメモリの起動スイッチを叩き、ドライバーのスロットに滑り込ませた。これから始まる戦いに昂ぶる興奮を抑えつつも、力強くドライバーを開く。

『CYCLONE!』
サイクロン
『JOKER!』
ジョーカー

再び上がったガイアウィスパーが、突如として巻き起こった激しい旋風と共に翔太郎を包み込んだ。しかし風は翔太郎自身を吹き飛ばすことなく、彼の身体に地球が蓄えたエネルギーを実体へと換え、幾重にも纏わせる。

指先から腕へ、肩へ、爪先から腿へ、胸へ、全身に力が行き渡るのを感じられる。もう何度も経験した、無形の力と融合し一つとなる短い時間だ。それがおさまると大地に一人の、いや、二人が一人となった戦士が降り立つのだ。

翔太郎が視界を開くと、いつものように左手が黒、右手が緑に輝いているのが見えた。

「よし、行くぜ!」

今一度言葉に出して確認すると、意識の隅でフィリップが無言で頷いたのがわかった。

仮面ライダーWに変身した翔太郎とフィリップは、名も知らぬ女をドーパントから守るために地面を蹴った。

意識がWへと移り、抜け殻となったフィリップの身体を重そうに引きずる亜樹子を尻目に、二人は灰色のドーパントへと意識を集中させる。

「止める！」

翔太郎の叫びと共に、Wが右の拳を突き出した。辺りに重い音が響き、力に乗せた攻撃がドーパントの上半身に叩き込まれる。

『何だ、貴様は？』

目の前の女を捕らえようとしていた灰色のドーパントは、男とも女ともつかぬ機械的な声で呟くと、うるさそうに振り返った。先の一撃はさほど効いていない様子が、その態度からもわかる。

「俺は……俺たちはこの風都の番人、仮面ライダーだ。街を泣かせる奴に容赦はしねえ！」

構え直しながら名乗った翔太郎に、冷静なもう一人の声が話しかけてきた。

「翔太郎、今の攻撃はあまり効いていない。こいつの岩石みたいな肌は、恐ろしく硬いようだ。このまま打撃が通用しないようなら、早めにフォームを変えた方がいいかも知れない」

フィリップがドーパントの外見から分析を始めるが、自らに絶対の自信を持っているらしいドーパントからは嘲笑が漏れていた。

『ほほう？貴様がミュージアムを壊滅に追いやったという、あの仮面ライダーとやらか。面白い、私が作り上げたこのメモリにどこまで対抗できるのか、興味深いデータを提供してもらうことにしよう』

「俺たちのことを知っているのか？」

敵の言葉に驚いたのは、翔太郎とフィリップである。

自分たち仮面ライダーは風都の伝説に近く、街を牛耳っていた秘密結社であるミュージアムを滅ぼしたという具体的な情報までは世間に知られていない筈なのだ。

「こいつがミュージアムの生き残りなら、僕たちのことを知っていても不思議じゃない。と言う連中は、まだ街中に大勢いるんだろう」
「なら、こいつを倒してまだこそそと隠れてる連中のことを吐かせるまでだ！」

フィリップの推測に応えて言うが早いか、Wはドーパントに向かっていく。翔太郎は勢いに任せ、渾身の力を込めた回し蹴りを放った。

「痛っ！」

だがしかし、全身が岩のように見えるドーパントは、輝く緑色の半身が繰り出した攻撃をややすと片手で弾き返した。それどころか、ダメージを与える筈の右足は鋼鉄の塊にでも打ちつけた時のような鈍い衝撃を受け、痛みで声を上げる羽目になったのは翔太郎の方だ。

痛みは戦えなくなるほどではないため、彼は構わずに拳と蹴りによるラッシュを浴びせていく。が、敵は敢えてそれを避けようという素振りさえ見せていない。余程防御力に自信があるのだろうか。

やはり目に見えるほどのダメージは与えられていないことは、翔太郎とフィリップにも数秒と経たないうちに感じられた。

ドーパントの表情は――人間の顔に相当する部分は見分け難いが、確かに上半身に簡素な目鼻らしき形は見受けられた――動きを見せないだけに何を考えているのかわからず、それが不気味さを煽っている。

『どうした？その程度で本当にミュージアムを倒したのか』

「くそっ、こいつ……！」

痛くも痒くもないと見えるドーパントの嘲笑に、翔太郎は呻いた。ここまで硬い身体を持つドーパントを相手にしたのはフィリップが一度この世から消え去った1年以上前、ジュエルドーパントと戦って以来だ。あの時も苦戦して窮地に追い込まれたことが思い出されるが、ここで攻撃の手を緩めるわけにはいかなかった。

「翔太郎！硬い相手には武器による打撃と高熱が有効だ」

「ああ、わかつてる！」

相棒フィリップの的確なアドバイスに頷き、翔太郎はドライバーのメモリを2本とも抜き放った。代わりに、このドーパントに対し高い攻撃力を誇るであろうメモリを滑り込ませる。

「^{ヒット}HEAT！」

「^{メタル}METAL！」

刹那、ガイアウイスパーの源を異にする二つの力がWを包み、内と外に流れ込む。真紅と銀色の光に包まれた風都の戦士は、強力な打撃武器であるメタルシャフトを携えた姿に変貌した。

「お前が余裕こいてられるのも、今のうちだけだぜ！」

硬さと重さを備えた棍であるメタルシャフトを振り翳し、今一度Wはドーパントへと挑みかかっていく。

メタルメモリを使ったフォームは、メタルシャフトの長さがある分だけ攻撃、防御の範囲が広くなるという利点がある。Wが動いているうちは、背後に庇っている女が安全になることは大きかった。

「大丈夫ですか？後は仮面ライダーに任せて、早くこっちへ！」

呆然と立ち尽くしてWとドーパントの戦いを見つめている女性の後ろに、こっそりと亜樹子が近寄っていた。汚れたジャケットの袖を引いて声をかけると、女は少しだけ我に返ったようだった。

「仮面……ライダー？貴女はあれ、あの人を知ってるの？」

まだ混乱している様子で、女は亜樹子を見返してくる。女の方が亜樹子よりも背が高いため、彼女が亜樹子の顔を覗き込むような格好になっていた。

女の歳は二十代前半くらいだろうか、少なくとも翔太郎より上には見えない。大きな黒い瞳が生き生きとしている顔にはまだ可愛らしさが残っているが、目には聡明そうな光が閃いており、この異常事態にあっても最低限の落ち着きを保っていることが、彼女の冷静さを物語っている。

「仮面ライダーは、この風都を守ってくれてるの。貴女を襲ってきたのは、人間がガイアメモリを使って変身したドーパントっていう

怪物よ」

「人間？あの怪物も、元は人間だって言うの？」

何とか状況を理解して自分を納得させようとしている女に、立場ではWの上司に当たる亜樹子が頷いて見せた。

「そう。あ、でも、ドーパントを退治するのは、仮面ライダーじゃないのよ？ちなみにい、私の彼……ううん、もうすぐ夫になる……きや、夫って響きって恥ずかしい！って、照井竜って刑事がいる風都の警察でも、ドーパントを……」

ドーパント犯罪は警察でも取り締まられていることを解説しようとした亜樹子は一人、数ヶ月後に控えている新婚生活の妄想を花開かせてはしゃいでいたが、そこではたと止まった。

ドーパント動きを目で追っていた女は既に落ち着きを取り戻しているようだったが、亜樹子の説明は殆ど聞いていないらしかった。それどころか、おもむろに足下の一抱えはある大きな石を片手で掴み上げ、戦い続けているWとドーパントを睨みつけている。

「ちよ、ちよっとお姉さん？」

彼女が石を振りかぶったところでようやく慌て始めた亜樹子だが、もう遅かった。女が投げつけた石はかなり重そうであるにもかかわらず鋭く風を切って飛んでいき、見事にドーパントの頭に命中して砕け、無数の欠片を空中に散らしたのだ。

『何をする！』

Wが繰り出すメタルシャフトの突きをかわしたところの横合いから思いもよらぬ攻撃を喰らわされたドーパントが、身体ごと女の方を振り返った。五キロ以上はあるだろう石を片手で軽々と叩きつけ、あまつさえ砕くなど、どうやら女はとんでもない馬鹿力の持ち主のようだ。

「それはこっちの台詞だよ。会社の車をスクラップにしてくれて、どうしてくれんのさ！」

早くも投擲用に新しい石を拾い上げている彼女の口調は、怒りに満ちている。

「あ？」

そして勇ましい行動に驚いて動きを止めているのは、格闘を中断されたWもまた同じであった。メタルシャフトの構えを解いたヒー・ト・メタルフォームのWが、大きな赤い複眼の顔を離れた場所にいる亜樹子たちの方へと向ける。

「元が人間なら、別に怖いことなんてないからね。あんたを元の姿に戻して、意地でも弁償させてやるよ」

「き、気持ちはわかるけど、危ないから！」

亜樹子が必死に宥めにかかっているのを、草むらの上で仁王立ちになっている女はやはり聞こうともしていない。相当頭にきているのだろうが、それにしても無謀な言い種であることは間違いなかった。

「何だ、あの女？さっきまで、あんなにビビってたくせに」

「自分の目で確かめた現実しか信じない人間というのがいる。そういう者は、一度状況を受け入れてしまえばあまり動揺することもない。彼女もその類のようだ」

翔太郎が半ば呆れたように首を傾げると、その裏でフィリップが感心したように漏らす。

その正面にいるWのことなどすっかり眼中から外したらしいドーパントは、不敵な態度の女に岩で包まれてずんぐりとした指を突きつけて言い放った。

『ただの人間風情が、ドーパントの私に勝てるとも思っているのか。いい度胸だ。ならば仮面ライダーより先にお前を先に料理して、メモリを返してもらおう』

「あ、おいこら！待て！」

本来の相手であるWを放り出したドーパントが女の方へ突進したところで、翔太郎は遅時きながらに反応した。

「だから、メモリってのは知らないってば！でも、喧嘩は上等！」
カットソーの上にグレーのジャケットを羽織り、細い脚をインディゴのデニムで包んだアクティブなスタイルの女は、正面から受け

て立つつもりらしい。未だに説得を試みていた亜樹子がたまらず脇へと逃れるが、女は殴りかかってきたドーパントの拳を半身になつて避けて背後へ抜けると、無防備な敵の背中に回し蹴りを見舞った。がん、と金属の塊に何かがぶつかった際に上がる鈍い音が大きく響き渡り、ドーパントが蹴りの衝撃に負けて前につんのめる。衝突音の激しさからして、全力を込めて蹴ったらしいことがWの二人にもわかった。

「……く！」

しかし女が高く振り上げた脚を素早く引き、顔をしかめた。

「おい、無茶するな！」

格闘を始めた二人に近づきながら、Wの中の翔太郎が警告する。あのドーパントの身体が鋼の如き頑丈さを持つことを、女は知らないはずだ。下手に攻撃を加えたりすれば、並の人間の手足の骨など簡単にへし折れてしまつたろう。

が、彼女の足に走つた痛みは攻撃を阻むほどのものではなかったらしい。細い身体が俊敏に動いて拳を突き出し、蹴りを喰らわせ、打撃の雨を淀むことなくドーパントの全身に降らせている。

「おいおい、マジかよ。あれが普通の人間の動きなのか？」

そしてその動きは、翔太郎が呆然と呟くほどに凄まじい勢いがあった。彼とWの身体を共有するフィリップも同じ印象のようで、やはり驚きを隠せない口調となっている。

「いや。あれは明らかに戦い方を知っている、訓練された者の動きだ。それに……信じられない。彼女のパワーは、サイクロン・ジョーカーに匹敵するかも知れない」

正確な分析力を誇るフィリップまでもがそう考える攻撃をドーパントが浴びせられて、流石に全く効かないということはないらしい。岩の身体を持つドーパントは一度大きく後退すると、体勢を立て直す構えを見せた。

『ふん。な、なかなかやるようだな。しかしそんな攻撃では、いつまで経っても私のことを……』

「あつそう。じゃあこれ」

焦りが隠し切れていないドーパントの台詞を途中で切り捨てると、女はジャケットの内側に素早く右手を滑り込ませ、再び伸ばした。

その場にいた一同がそう思ったところで乾いた炸裂音が空を叩き、耳障りな金属音がドーパントから上がった。

『ぎゃあっ！』

濁った悲鳴がドーパントから上がり、暗い色の巨体がよろめく。

彼女の小さな手には、黒光りする小型の拳銃が握られている。腋の下に下げていたらしいホルスターから銃を抜き放ち、撃つまでの動きに全く淀みがない流麗さで、あまりにも自然に見えていたのだ。

「え……」

この平和な日本でさも当然のように銃を取り出して発砲した女に、亜樹子とWも息を飲んだ。

『く、くそ！銃を使うとは卑怯な手を！』

上半身に弾丸を命中させられたらしく、ドーパントの声は明らかに裏返っていた。弾は肌の表面に当たって跳ね返っただけのようだが、流石に素手と弾丸とはダメージが段違いなのだろう。

「ばっかじゃない？審判のいない戦いに卑怯もクソもあるかつての！」

異形の者らしからぬ罵り文句を浴びせられると、女の全く悪びれない態度が却って際立つことになる。いくらドーパント相手とは言え、拳銃の扱いに相当慣れている者でなければ、こうも躊躇せず咄嗟に撃つことなどできない筈だ。

それに第一、警官にも見えない若い女が銃を携帯しているなど、どういうことなのか。翔太郎は、メタルシャフトの先を地面に突き立てたまま再び首を捻った。

「あの女、一体何者なんだ？だんだんわからなくなってきた……」

「それより、今はドーパントを何とかしなければ。翔太郎、ぼやぼやするな」

「おっと、そうだったな」

フィリップに促されて我に返り、翔太郎はメタルシャフトを持ち上げて構え直した。彼女が何者なのかを問いただすのは、あのドーパントを退散させてからの話だ。

翔太郎は氣勢を上げ、銃を構え続けている女の後ろからドーパントに躍りかかった。両手で剛を誇る棍を捌き、攻撃範囲内に堅固な鎧で守られた敵を捉えようとする。

『ちいっ!』

その時、ドーパントの中から舌打ちらしき音が漏れると共に、巖の身体が弾みをつけて後方へと跳びすさった。女とWから軽く数メートルの距離が、一瞬にして開く。

「あつ、おい待てこら!」

敵は体勢を立て直しただけかと思いきや、二対一では分が悪いと踏んだのであろう。ドーパントは腕と同じく短く見える脚をたわめると、思い切り川面へと跳んだ。

あの硬くて重量感たつぷりの身体だ。泳いで逃げられたとしても、すぐに追いつける。

誰もが考えるのと同じように考えた翔太郎とフィリップは追いかけた足を一旦止めたが、その予測は即座に覆されることとなった。ドーパントの足先が深さがある筈の川面をやすやすと蹴り、今一度高く遠くへと跳躍したのだ。

「何っ!」

まるでドーパントが足先をつけた川の一部分だけが瞬間的に凍ったように硬化した事実、Wが驚愕の声を上げる。女や亜樹子も一様に目を丸くするのを尻目に、ドーパントは同じ要領で水面を足場としながら跳び続け、瞬く間に向こう岸へと逃げ去っていった。

「あのドーパント、物質の硬度を自在に操るのが特殊能力なのかも知れない」

「どうもそのようだな。まんまと逃げられちゃった」

フィリップが興味深そうに呟いたところで、翔太郎が吐き捨てる。敵を逃した悔しさからなのか、Wの黒い左手が腰のドライバーを

勢いをつけて閉じた。次の瞬間、それまで体表を覆っていた鎧のよ
うに硬質で輝く肌が霧散してつむじ風に舞う。その後、翔太郎の
立ち姿が出現した。

改めて悲鳴に近い小さな声を上げたのは、Wの隣に立っていた女
である。

「えつと……貴方がさっきの、仮面ライダー？なんだよね？」

普通に生きていたのではまず遭遇しない状況が立て続けに発生し
たということを、彼女はやっと実感したに違いない。今まで知って
いた世界とあまりに違う事実に向面した興奮が収まりつつある今、
にわかに自分の身に起こったことが現実かどうか、自信が持てなく
なっているのだ。

それが証拠に、ドーパントに嵐の如き攻撃を叩きつけ、鉛弾まで
撃ち込んだ勇敢さは女から影を潜めてしまっている。翔太郎におそ
るおそる声をかける様子も、まるで別人だ。

「え……えー、まあ、いやその。何だ」

驚きと不審さをない交ぜにした目でまじまじと女に見られている
翔太郎は、しどろもどろになりながら視線を逸らし、無意識のしぐ
さで乱れたベストの襟元を調べ、トレードマークであるソフト帽の
位置を直した。

彼が改めて女を見るにつけ、彼女はかなり人を惹きつける容姿の
持ち主であることを認めざるを得なかった。

亜樹子より背丈があって細身の身体は、ラフなスタイルでも均衡
が取れていることがわかり、健康的で澀刺とした女らしさを漂わせ
ている。一方で声はやや低く落ち着いた印象があり、だからと言っ
てそれを鼻にかけそうな傲慢な雰囲気はない。翔太郎をじっと見つ
めてくる大きな黒い瞳からは素直さが伝わってきて、大人の女性と
可憐な少女とを内面に同居させている儚さと危うさが窺えるようだ
った。

この女の子と言ってもいいくらいの愛らしい女性が、つい数分前
にドーパントを相手に大立ち回りを演じたなど、風都の男たちには

わかに信じられないに違いない。

魅力的な娘を前にし、翔太郎は身体と心に染みついた癖をつい覗かせることになってしまった。帽子の縁に片手を置き、横顔を見せ、囁くようにお気に入り台詞を口にする。

「このことは、お嬢さんの心の中だけにしまっておいてくれればいい。この風都を守るハードボイルド探偵の、本当の姿を……」

「何、ハーボイルドがかっこつけてんねん！」

スリッパが翔太郎の頭を叩く軽快な音と亜樹子の関西弁とが、一瞬で彼の自己満足空間を破壊した。

翔太郎がいつものように格好をつければいつものように亜樹子が突っ込みを入れ、雰囲気をぶち壊しにする。それが半熟探偵の悲しい性であった。

「そんなことより、大丈夫でした？あつ、血が出てるじゃない！」

それでも騒動に巻き込んでしまった他者にまできちんと気を配るのが、亜樹子のプロ意識が高いところである。女子中学生にしか見えない探偵事務所所長は、翔太郎が抗議の口を開く前に女の右腕にできた擦り傷を見つけていたのだ。

「あ、ああ。これくらいなら大丈夫。放っておけば、じきに血も止まるだろうから」

さして気にした様子も見せない女は、強引に腕を取ってきた亜樹子の手をそつと離そうとする。

「いやいや！女の子なんだから、お肌に傷が残ったりしたら大変よ。うちの事務所はすぐそこだから、手当てした方がいいって！それに、さっきのドーパントがまた襲ってくるかも知れないし」

激しく首を振った亜樹子は大げさに言っただけ、女の腕をそのまま強引に引こうとしていた。

「けど、会社の車が……」

「あー、大丈夫大丈夫！私の彼に連絡して来てもらうから。ねっ！」
明子は困惑する女を明るく励ますついでに、婚約者の照井のことまで引き合いに出している。大阪のお節介なおばちゃんよろしく、

依頼人となりそんな女をあくまで離すつもりがないらしい。

いつもながらに亜樹子の押しの強さには関心と呆れとが半々の印象をいだく翔太郎だったが、女がドーパントに狙われる訳ありの身であることには間違いない。

が、その本人にはどうやら全く心当たりがなさそうなのも引つかかる。

先のドーパントは、確かにガイアメモリを渡せと言っていた。この女がドーパントの求めるガイアメモリを持っているのでなければ、あるいはそう信じ込ませる事実がないのであれば、少なくともわざわざ人目がある真昼間に襲おうとはしない筈だ。

ここは亜樹子に調子を合わせて、詳しい話を聞き出しておくのが正解だろう。

「まあとにかく、少し休んだ方がいい。俺のコーヒーが口に合えば……」

「だから、かつこつけんなって言ってんねん！」
どさくさに紛れて女の腕と一緒に取ろうとした翔太郎の頭に、亜樹子のスリッパが飛ぶ。

「……彼女は、普通の人間じゃないのか？」

三人の若い男女が賑やかに歩いていく背中をじつと見つめ、フィリップは一人呟いていた。

女が持っていた銃はグロックー七でアメリカのような銃社会ではごく一般的な種類だが、この国では所持するのに特別な許可が必要だ。

加えて訓練された身のこなしと、あの細い身体をしているのが信じ難いほどの筋力。

どう考えても常軌を逸している女の存在に天才少年はいたく興味を覚えると同時に、胸にさざ波が立つような不安を感じていた。

「さ、これでもう大丈夫よ」

白い長袖のカットソーを捲り上げた女の腕についた擦り傷を消毒し、絆創膏を貼った亜樹子が満足そうに頷いた。

「すいません、手当てまでしてもらっちゃって」

「困ってる誰かがいたら手を差し伸べるのが、俺たちの役目です。あまり気にしないでください」

先の戦闘で見せた威勢の良さを雲隠れさせた女は、すっかり恐縮して亜樹子に頭まで下げている。翔太郎が淹れた暖かいコーヒーを受け取る手つきも、どこかおっかなびつくりだ。

鳴海探偵事務所の一同は、あの後に女を連れて事務所に戻っていた。今は古いビルの一室にあるレトロな雰囲気漂う部屋の入口近くにある応接スペースで、傷の手当てを終えたところである。

「……ところで、どうしてドーパントなんかに襲われてたの？」

亜樹子が薬箱の蓋を閉めながらソファアの隣に座る女に問いかけると、女はコーヒーを一口すすってから、化粧つ気のない顔に浮かんでいた落ち着かなげな表情を曇らせた。

「ドーパント……ああ、あの怪物のことだね。それが、何でなんだか私にもさっぱりで」

「しかし、奴は確かにガイアメモリを渡せと貴女に言っていた。ガイアメモリを持ってるんじゃないのか？」

翔太郎がコーヒーターブルを挟んで向かいのソファアに腰掛け、疑惑を込めた視線を女に送る。

「だから、そのガイアメモリって何なのか知らないんだってば。見たこともないし、今日初めて聞いた名前なんだから」

女はやはり否定の言葉しか口にしなかった。彼女が子どもっぽく口を尖らせて反論してくる様を見ても、何か隠し事をしているようには思えない。

「さつきも説明したと思うけど、ガイアメモリは地球の記憶を封じ込んだメモリなの。それを人間に使うことで、ドーパントって言う怪人に変身させる力を持つてるのよ」

「こんな感じの奴だ。本当に知らないのか？」

ガイアメモリの実物を確認させるため、翔太郎はベストの内側からジョーカーメモリを抜き取って女に手渡した。

「これが本当に、人間をあんな怪物に変えるってわけ？ちょっと信じられないよ」

「けど、貴女もさつき実際にドーパントを見たでしょ？夢みたいに思うかも知れないけど、本当のことなのよ」

亜樹子の言葉を受けても実感を掴みかねているらしい女は、翔太郎から受け取った黒いメモリを物珍しそうにしげしげと眺め回していたが、やがて溜息をついてジョーカーメモリを彼に返した。

「やつぱり覚えはないよ。普通にパソコンで使うメモリだったら持つてるけどさ。何であんな怪物に、こんなものを持つてると思われてるんだろ」

「そう言えば貴女、仮面ライダーのことも知らなかったみたいだけど……もしかして、風都の人じゃないの？」

「たまたま仕事の途中で、この街に来たこと自体が初めてなの。まあ、危ない目に遭う仕事だって自覚はしてたけど、あんなのに襲われたのは流石に初めてだよ」

女が亜樹子に頷いて見せたときである。

「初めて来た街で、それは災難だったな」

不意に、今までいなかった筈の男の声が割り込んできた。形式上で女のことを気遣ってはいてもぶっきらぼうな調子が滲む声に、亜樹子の表情がぱっと明るくなる。

「照井？お前、いつからいたんだ？」

翔太郎が驚いて、男の名を口に出す。

いつの間にか鳴海探偵事務所入口のドアをくぐってすぐのところ、深紅の革ジャケットと革パンツを纏った刑事、照井竜が立って

いた。

いつも口許を真一文字に結んでおり笑顔を見せることすら滅多になく、熱い激情を内に宿す男。以前はそんな印象でハードボイルドを地で行っていた照井だが、翔太郎たちの仲間となり亜樹子との結婚が決まった今、温かで穏やかな一面を覗かせるようになっていた。亜樹子の笑顔を見て微かに表情を緩めたのがその証拠だろう。

そして彼もまた風都を守る仮面ライダーの一人、仮面ライダーアケセルその人であった。

「現場検証が一段落して、今来たところだ」

「私が呼んだの。ドーパントに壊された車の持ち主がこっちに避難してきてるから、来て欲しいっなあって。ねー？」

気配を悟らせない隙のなさを見せつけた照井であったが、亜樹子のために片腕だけは空けてあるらしい。嬉しそうに立ち上がり、ジャケットの袖に手を触れてくる婚約者を邪険にしようとはしなかった。

「風都署の照井だ。主にドーパントによる事件を担当している」

片手で革ジャケットの内ポケットから警察手帳をつまみ出して提示した照井を、女はからかいと驚きが半々の表情で見返した。

「刑事さん？へえ、あの怪物……ドーパントの事件を専門に担当する警察の部署があるんだ。本格的だね」

職務中にいちやつくとは大した国家公務員だも言いたいのか、内容に反して彼女の言い方は冷たい。しかし照井は腕に絡みつく亜樹子のことを特に意識していないようで、そのまま表情だけを普段のそれに戻してから要件を切り出した。

「ここ最近、物質の硬度が変えられたことが原因の事故が多発している。恐らく、貴女を襲ったドーパントが犯人だろうという目星がついているんだ」

「え？」

意外な展開に、女が膝についた頬杖から顔を上げて声を微妙に高くする。

「あのドーパントの特殊能力だ。さっきの戦いで、僕たちも確認した」

「窓ガラスが触ったくらいの力で割れたり、橋が崩れて車が落下したりする被害が出ている。警察としても、このまま放っておくわけに行かなくなってきた」

それまで皆から一人離れてスツールに座っていたフィリップがぼそりと言うと、照井が更にその先を補った。

翔太郎と亜樹子も、そんな事故が頻発しているとは初耳であった。女が運転していた車は横転しても形を保っていたが、それはたまたまあのドーパントが能力を使っていなかったからなのだろう。

「あの、それでうちの車はどうなったんです？」

「証拠として押収させてもらう。いつ返せるかはまだわからない。気の毒だが、あの状態では廃車にするないだろう」

「そうか……そうですよ。ああもう、保険屋に何て説明すりゃいいんだろ。全くもう」

フレームまで歪んだ無惨な社用車のことを遠慮がちに言った女に、照井が返した現実残酷である。まだそれほど使い込んだようにも見えなかった車の損害額を考えたのか、彼女は頭を抱えて嘆きつつ、がつくりと肩を落とした。現実的な金銭的感覚を持ち合わせている亜樹子が、心配そうに女の肩に手を置く。

すると、女は深い溜息を一つついてからこぼした。

「そう言えば、噂で聞いたことはあったかな……人間が化け物に変わって騒ぎを起こす街がどこかにあって、それをやっつけるヒーローもいるって。ただの都市伝説だと思ってたけど、まさかここがそうだな。びっくりだよ……」

「で、でも、ここだっていいところはあるのよ？ほら、気持ちいい風がいつも吹いてるし、風力発電がメインだから、エコ！って感じだし！」

ややもすればすっかり消沈してこの場を去ってしまいそうな女に、亜樹子がよくわからないアピールを明るくして見せる。

「女子中学生」所長、亜樹子に続き、翔太郎が女の口を軽くするために話をさせようと振ったのは、女自身のことであった。

「危ない仕事って、警察か何かか？」

「……ああ、失敬。私、こういう者なの」

仕事のことを他人の口から言われてビジネスの顔を思い出したのか、女が顎を上げる。ポニーテールにしているもなお頬にかかる長い髪を無造作に払いのけて、彼女は脇に脱いでおいたジャケットのポケットに手を入れた。そこからシルバーの飾り気がない名刺入れを抜き取り、その場にいる一人一人に差し出していく。

白地にグリーンの線が入ったごく一般的な名刺には「便利屋 オフィス・ユースフル」という会社名と、その下に「間 未来」という名前が色気のない字体でプリントされている。

「便利屋の……所長？」

名前の横に小さく書かれた肩書きを目にした翔太郎が思わず確認すると、未来なる女は頷いた。

「手っ取り早く言うと、街の何でも屋。人探しから部屋の掃除、人間関係のトラブルに至るまで。犯罪にならない限りは何だってやるよ」

「……それで、ピストルも持ってるの？」

亜樹子がジャケットの上に重ねて置かれたホルスターをちらりと見やる。程良くくたびれた茶色の革製のショルダーホルスターには、先に未来が撃ったグロックが収まっていた。

「人に恨まれることも多いしね。ちゃんと国から正規の許可を受けてるから。今は弾を込めてないし、暴発することはないよ」

「許可証を見せてもらってもいいか」

しれつと言つてのけた未来へ、照井が鋭い視線を送った。彼の疑うような態度が気に障ったのか、未来は僅かにむっとしたように眉を上げると、再び傍らのジャケットを探った。

「どうぞ」

白い指先に挟んだカード型の銃火器携帯許可証が突き出されると、

照井が無言で受け取った。和みかけていた空気が不穏になりかけたことを感じ取った翔太郎が、再び未来へ話題を振ろうと試みる。

「そうか、言ってみりゃ、俺たちと同業なんだな。道理で、同じ匂いがすると思っただぜ」

「あ、そう言えばここは探偵事務所だつて話だっけ」

翔太郎の方に向き直った未来の声に棘はなく、事務所の中を見回している表情からも怒っているような印象は見られなくなっていた。多分、自己抑制が強い性格なのだろう。

鳴海探偵事務所はビル全体が古いことと、以前の所長であった鳴海莊吉の趣味をそのまま引き継いでいることもあり、調度品や雰囲気は古き良きアーリーアメリカンを感じさせるそれとなっている。

くすんだ緑色の壁、白黒の市松模様彩られた床、部屋の隅にあるペンキが色褪せた木製のゲーム台。そのどれも、莊吉の代から使いつづけているものばかりである。莊吉の娘である亜樹子にも、弟子であった翔太郎にも、そこにある全てが宝物であると言つに相応しかった。

翔太郎はこの事務所で莊吉の遺品に囲まれていると、師匠の名を汚さない男となるのが使命だということを忘れずにいられる。ここは、ハードボイルド探偵としての聖地とも言つべき空間でもあった。「自己紹介が遅れて失礼。俺は左翔太郎。この風都で、彷徨える子羊となっている人々の悩みをハードボイルドに解決する探偵だ」

「は、はあ」

ハードボイルドを常に意識した立ち振る舞いを心がける翔太郎だが、それが必ずしも万人に伝わるとは限らない。今回も自己紹介を受けた未来が引き気味になっている様子が、その現実を物語っていた。

「私はここの所長で鳴海亜樹子。あ、もうすぐこの竜ちゃんと結婚するから、照井亜樹子になるんだけどねっ！」

「貴女が所長？ てつきり私、左さんの妹さんなのかと……」

次に照井の腕を取りつばなしで浮かれた自己紹介を披露した亜樹

子に、未来は今度は驚きを隠せないでいるようだった。

「誰がじゃ！」

異口同音に、翔太郎と亜樹子が未来の恐ろしい推測を否定する。

自分好みの雰囲気演出することを失敗した翔太郎は早々に取り繕うことを諦め、まだ独り離れて隣の部屋にいるフィリップに声をかけた。

「こいつは、俺の相棒のフィリップ……っておい、挨拶くらいしろよ」

屋内にいるのにパーカーのフードを目深に被っているフィリップは、スツールから降りるところか、一緒に話をしようという気もないらしい。未来から名刺は素直に受け取っていたくせに、そこから動かず軽く頭を下げただけだ。

未来はというと、同じように会釈を返しただけである。フィリップを極端な人見知りの内気少年だと受け取ってくれたようだった。

「ふーん。それで、仮面ライダーに変身して戦うってわけなんだ」さりげなく、未来が事実を確認するように呟く。痛いところを突かれた亜樹子と翔太郎は、反射的に顔を見合わせていた。

彼女を助けるためとは言え初対面の人間の前で変身してしまったことは、全く迂闊だったと言えない。それは今更隠したところで、どうにもならないのは変えられなかった。

腹を決めた亜樹子が、引きつった笑いを浮かべて未来に揉み手をする。

「え、えつとお、このことは……誰にも内緒にしといてくれれば……」

「ああ。ヒーローの正体が、ばれちゃまずいのはわかるよ」

大人の対応をする主義に見えるだけにものわかりがいい、と亜樹子が誉めようとしたところで、現実的な台詞が未来の口から飛び出していた。

「で、口止め料はいくら？それ次第だけど」

地獄の沙汰も金次第、とはよく言ったものである。純粹そうで愛

らしい外見に似合わないがめつさに、翔太郎が声高に叫んだ。

「金取るのかよ！」

「うん、冗談」

あっさりと自分の言を否定した未来は、見かけより食えない女であるようだ。流石に、女だてらに事務所を切り盛りしていないと見るべきであろう。

「いくら私でも、そこまで鬼じゃないってば。人間離れしてるのは、身体だけだよ」

そして悪びれずにころころと笑ってみせる態度には、今まで世間の荒波に揉まれてきた彼女の油断ならない人間性が透けて見える。やっと銃器携帯許可証を返してきた照井の方へ手を伸ばしながら、未来は呆れ半分でいる亜樹子と翔太郎の顔を交互に見やった。

「そう言えば、うちのスタッフをこの前襲った奴も人間離れしてたって……あ」

「どうかしたの？」

不意に口ごもった未来へ、不審そうな視線を亜樹子が送る。

「……私、あの川の側にある病院に行く途中だったの。うちの新人が何日か前に誰かに襲われて、怪我して入院してるから。でもそう言えば、その連絡を受けたときに変なことを聞いたなって」

これには、翔太郎も身を乗り出さざるを得ない。

「変なこと？」

顔を寄せてきた翔太郎と亜樹子がいたく興味をそそられているらしいことを受け、未来も真剣な表情で返してみせる。

「お化けみたいな格好をしたのに襲われたんだって。コスプレ好きな変質者にでも襲われたのかと思ってたんだけど」

「それが、あのドーパントかも知れないってことか？」

コスプレという単語の響きに緊張感がそがれ、翔太郎の真面目な口調とちぐはぐな組み合わせになる。翔太郎本人は全く気にしていないのが、傍から見ると何とも妙だった。

「本人に聞いてみないと、何とも言えないけど。メモリどうこう、

つてことは聞いてないし」

「すぐに確かめた方がいい。川の側の病院って、風都セントラル病院だろ？俺が案内する」

未来の返事を待たずに翔太郎がソファから立ち上がり、壁にかけてあった黒いソフト帽を取り上げた。事に逸ったような彼に、当事者である筈の未来は逆に戸惑いを見せている。

「でも、車も押収されちゃってるし」

「未来さんは、俺の後ろに乗ればいい。急ごう」

翔太郎は既に、愛馬であるハードボイルダーのリアシートへ未来を案内すると決めていた。ヘルメットはフィリップのものを貸せば間に合うのだし、ドーパントが絡む事件をこのまま見過ごすわけにはいかない。

少なくとも翔太郎はそう決めた上で、鳴海探偵事務所のドアを勢いよく開けて外に出ていった。

「ちょよ、ちょつと翔太郎くん！」

亜樹子がいつもの翔太郎の行動力に慌てたところで未来も急いで立ち上がり、残りのメンバーに頭を下げてから小走りに翔太郎の後を追っていく。

半熟探偵と若き女所長の背中が出ていった後のドアを暫し無言で眺めていた一同だが、やがて亜樹子が憮然として言った。

「ったく、あのハーブボイルド！相変わらず女に弱いと来たよるわ」
亜樹子の横に立つ照井もやれやれと首を振ったが、ぽつんとスツールに座っているフィリップだけは反応が薄い。

この天才少年は、川辺でドーパントと一戦交えてからずっと黙り込んだままだ。いくら初対面の人物が事務所にいたと言っても、ここまで口数が減ることは珍しい。

「どしたの、フィリップくん？元氣ないみたいだけど」

具合いでも悪いのかと心配した亜樹子が、隣まで行ってフードの奥にある顔を覗き込む。

「間未来……彼女は、普通の人間ではないのか？」

「何？」

フィリップが低く呟いた一言を、照井が聞き咎める。仕事の顔を崩さないまま、彼も二人の側に近寄ってきた。

「あ。そう言えば、さっきドーパントに襲われた時も、素手で戦ったのにピンピンしてたわよね。確かあのドーパント、身体がすごく硬いんでしょ？」

亜樹子がついさっき河原で展開された戦闘を思い出して指摘すると、フィリップはその通りだと頷いて見せた。

ドーパントに対して決定力を持つほどではないにしても、未来が繰り出す打撃技は少なくとも素手のWと同程度のダメージを与えていたように見えた。鋼のような外皮を持つドーパントを後退させるなど、彼女がただの人間だとはとても思えない。

本人は身体が人間離れしていると触れていたが、果たしてそれが並外れた怪力だけだとは言い難い事実がそこにある。戦闘訓練を受けた者でなければとっさに身体は動かないだろうし、あの状況で落ち着き払ってもいられない筈なのだ。

加えて、ドーパントが「ガイアメモリを渡せ」と執拗に迫っていたことも引つかかる。翔太郎が見せたメモリに対する反応には嘘をついている様子は見受けられなくとも、風都の住人ではない未来がドーパントに狙われるには、それなりの理由が必ず潜んでいる筈なのだ。

「何故、風都の住人ではない彼女がガイアメモリを持っていると思われるのか。そこが重要だ……もしかすると、彼女自身がドーパントなのかも知れない」

「ええーっ！まさか……でも、それって……」

考えをぶつぶつと口に出していたフィリップが一つの可能性を思いついて声音を上げると、亜樹子が大袈裟なアクションとともに驚きを見せた。

「俺にも詳しく説明しろ。彼女が持っていた銃器携帯許可証は、通常のものではない。あれは一般の人間には取得できない、特殊銃火

器の携帯許可証だった」

傍らの婚約者とは逆に、刑事である照井は極めて冷静な態度を保っていた。

風都セントラル病院は、先にドーパントと一戦を交えた河原から三百メートルと離れていない高台に建っていた。ここは昔からある中規模の総合病院で、入院が必要な怪我や病気の時は頼ってくる住人も多い。風都育ちの翔太郎も、幼い頃から馴染みのある場所だった。

彼はハードボイルダーのタンデムシートから降ろした未来を病院の正面玄関で待たせて駐輪場を経由し、連れ立って白く大きな建物の中へと入っていった。

「じゃあ、あんたの部下は仕事で風都に来て、誰かに襲われたってのか」

外来の待合室を通り抜け、目的である入院病棟を目指して廊下を歩きつつ、翔太郎は更に詳細な情報を未来から集めていた。

「そう、3日くらい前にね。彼、まだうちに入って3ヶ月も経たない新人なの。いきなりこんな目に遭ったんだから、結構ショックが大きいみたいでさ。だから私も心配なんだよね……まあもしドーパントに襲われたんだしたら、余計にショックを受けるのも無理ないけど」

翔太郎の問いに頷きを返しながら、未来が辺りを見回している。

病院の廊下には昼下がりの陽光が満ちて明るく、清潔な雰囲気を感じられるが、翔太郎は建物全体に染みついている消毒薬の匂いが好きになれなかった。まだ十代だった頃、無茶をする度にどこかを怪我してはこの医師や看護師に世話になったことまでが思い出され、微妙な気分にもさせられる。

二人の若者は低い声で言葉を交わしながら様々な検査室の前を通り、小走りに行く白衣の男女と擦れ違い、車椅子に乗っているパジャマ姿の患者を避けているうちに、外科病棟へと辿り着いていた。

「ここだよ。302号室」

未来がジャケットのポケットから出したメモで病室番号を確認し、4人部屋らしい病室の入口に下がっているオフホワイトのカーテンをくぐる。彼女の視線が広めの病室内を一巡し、仕切り代わりのカーテンが開け放たれた窓際にあるベッドで止まった。

「あれ……健太くん。永峰さんも」

すると、意外そうな声が驚きの表情とともに発せられた。目的のベッドの側には、先客がいたのだ。

翔太郎が未来の横に進み出ると、中年の男性がこちらに軽く頭を下げ、一緒に立っている男の子もそれに倣っている様子が見えた。

「いえ。堀内さんが怪我をされたと聞いて、健太くんがどうしてもお見舞いに行くと行って聞かなくて」

恐縮した印象の男性は男の子の父親くらいの年齢に見えるが、名前を呼び捨てていないことから、肉親ではないらしいことがうかがえる。よく見ると、ジーンズに厚手のスエットという作業着のような格好の胸に「永峰智之」の小さなネームプレートがつけてあることもわかった。

「そっかー、お兄ちゃんといっぱい話せた？」

一方の未来は男の子の前まで行つてしゃがみ、満面の笑顔で話しかけている。

男の子は五歳前後くらいだろうか。どこにでもいる無邪気な普通の子どもといった印象で、目を引くのは古くさいデザインで垢抜けない服を着ていることくらいだった。布自体がかなりくたびれているらしく、黄色のトレーナーは薄汚れて見え、デニムのハーフパンツも天然のケミカルウォッシュになっている。

しかし未来から健太と呼ばれた男の子は、みすばらしい格好でも嬉しそうに、元気よく答えていた。

「うん。堀内のおにいちゃん、たいしたことないって。ぼくがよかったね、って言ってたんだ」

「お姉ちゃんも、お兄ちゃんのお手伝いを頑張ってるからね。健太くんのパパ、すぐに見つけてあげるから。いい子にして待ってるん

だよ」

彼女が健太の顔を覗き込むようにして優しく言い、小さな頭に手を乗せて撫でてやる。小さな少年は目を輝かせ、弾けそうな笑顔をこぼれさせた。

「うん！おにいちちゃんとも約束したから、ぼくはだいじょうぶだよ」

「さすが、男の子だね。偉いぞ」

未来の言葉に照れたのか、健太はくすぐったそうにしながらきやつきやつと声上げてはしゃいだ。

「では、私もはこれで。お大事になさってください」 他の患者もいる病室で騒ぐことを気にしたらしい付き添いの永峰が、たしなめるように健太の肩に手を置く。すると健太は慌てて自分の口を両手で塞ぎ、これ以上しゃべらないという意思を頷きで表した。

「わざわざありがとうございます。またね、健太くん」

未来も落ち着いた口調を取り戻して永峰に会釈したが、健太の子どもらしいしぐさに笑みを残したまま手を振っている。翔太郎も二人と擦れ違った際に軽く頭を下げたが、永峰に手を引かれた健太もきちんとお辞儀を返してきていた。

しっかりとしたい子だと感心して小さな背を見送った後、彼はベツドの方に向き直った。

子どもが姿を消すとその場が静まり返ったような気がして気まずく感じるのはよくあることだが、漂いかけた沈黙を破ったのはベツドに半身を起こしている青年だった。

「所長、あんな風に言ってくれなくても良かったのに……俺の方が所長に手伝ってもらってるんですから」

困ったようにベッドの鉄柵へ視線を彷徨わせている青年は、頭と腕に包帯を巻かれ、顔にも大きなガーゼが当てられていた。翔太郎や未来よりも年上には見えず、かと言って子どもっぽくもない印象の顔は、長めの黒髪に包まれている。妙に白い肌と骨ばった体格、どこか怯えたような様子の目が神経質な印象を見る者に与えた。

ドーパントに襲われて怪我をした未来の部下というのは、おおよ

そ便利屋という荒っぽい職業に就いているとは思えないタイプの青年であった。

「何言ってるの。あんた、初仕事なのによく頑張ってるじゃない。部下のフォローは上司の役目なんだから、いちいち気にしないで。それより、傷の具合はどう？」

「ええ。今日はあまり痛まないし、検査結果でも、特に脳とかに異常はないらしいです。このままなら、明日か明後日には退院できるって」

「そっか。本当に、大したことなくて良かったよ。安心した」
思っていたよりも元氣そうな部下の姿を確認できた未来がほっとした笑顔を見せると、青年も照れてはにかんだように笑った。

「あの子の父親を探してるのか？」

その二人の間に、翔太郎が質問を割り込ませる。そこで見慣れない男の存在に初めて気づいたと見える青年が驚きの色を一瞬浮かべ、僅かに表情を歪ませて口をつぐんだ。

「詳しく話す前に、紹介するよ。彼は堀内。うちの事務所の新人なの」

未来が翔太郎にベッドにいる部下の姓を示すと、堀内は上目遣いで翔太郎を一瞥し、殆ど首だけで形ばかりの会釈をよこしてきた。翔太郎も、自然とそれに合わせた形式上の礼を返すこととなる。

「所長、そちらは？」

堀内は翔太郎のことが氣にくわないらしく、目を合わせないようにしながらも値踏みするような視線が無遠慮で、不快感すら覚えさせる。頭に巻かれた包帯に長い前髪がかかるのが鬱陶しいのか、堀内は頭を軽く振って髪を避けた。

「俺は左翔太郎。この風都の安全を、ハードボイルドに守る探偵だ」
こんなことで怯んでいては相手に舐められるばかりである。翔太郎は未来が言葉を発する前に自分流の自己紹介を披露し、ペースを守ることにした。

「探偵？そんなのが、どうしてうちの所長と一緒にいるんです？」

しかし堀内には露ほどの感慨も与えられなかったらしく、胡散臭そうな視線には却って拍車がかかっている。似非探偵風情が偉そうに、と顔に書いてあるかのようにだ。

「左さんは、私を助けてくれたの。多分、あんたを襲ったのと同じ怪物……ドーパントから」

「ドー……え？」

それでも未来から助け船として出された説明については全く意外だった様子で、堀内は聞き慣れない単語に首を傾げている。自分の専門分野の話になったと判断した翔太郎は、再び言葉を挟んだ。

「ドーパント。風都に現れる怪人のことだ」

すると再度、堀内の視線が敵意を孕んで翔太郎の方に向く。それでいて翔太郎とはまともに目を合わせないのだからたちが悪い。男二人の間に険悪さが生まれ始めているのを見て取った未来が、堀内を諷める調子を少しだけ声に込めてくる。

「堀内、あんたを襲った相手のことを聞きたいんだけど。そいつって、コスプレと言うには度が過ぎると言うか……こう、でつかい着ぐるみたいなの格好をしてて、全身がグレーで、岩っぽい感じじゃなかった？」

写真でもあれば手っ取り早かったが、未来のジェスチャーを混ぜた説明で十分だったようで、堀内は激しく頷いた。そのせいでまた髪が目にかからんばかりになり、彼はまた頭を振っている。

首を横に回すように振るのは、どうも堀内の癖らしい。

「え……ええ、そうです！まさしくそんな感じの奴でした。でも、あれが所長まで襲ったって言うんですか？」

「まあね。けど左さんが助けてくれたから、私は何ともなかったの」「へえ。こいつ……いや、この探偵さんが、あんな怪物から所長を？ちよつと信じられないですけど」

未来が横に立つ翔太郎のことに話を及ばせると堀内はあからさまに鼻白んだが、彼女は敢えて彼を注意することなく先を続けた。

「肝心なのはここから先。あんたを襲ったドーパントって、メモリ

をよこせつて喚いてなかった？」

「メモリ……ですか？」

「正しくはガイアメモリだ。これと似たようなのに、見覚えはないか」

鳴海探偵事務所未来に見せた時と同じように、翔太郎がベストの内側からジョーカーメモリを抜き取って堀内へ渡した。相手が感情を見せずに振る舞っているからだろう、堀内も黙ってジョーカーメモリを受け取った。

が、やはり彼の反応も先の未来と同じであった。

「いえ……こんなの、俺も見るのは初めてですよ。ただ、確かに何かを渡せとは言ってたと思いますけど」

「そうだよな。何せ、私たちはこの街に足を踏み入れたのだって、つい何日か前なんだし」

困った顔を見せながらも、未来の口振りにはほっとした響きが含まれている。彼女もこれ以上のトラブルは抱えたくないのが本音なのだろう。

「しかしあんたたちがドーパントに狙われるには、それなりの理由がなければおかしい。その鍵になるのが、奴がよこせと言ってるメモリなんだ」

「そりゃそうだけど……」

けれど、本当に知らないものは仕方がない。

そう言いかけたらしい未来は、不服そうに言葉を飲み込んでいた。「いいか？ 奴は、あんたたちがメモリを持つてると思い込んでるんだ。そうであるからには、また狙われる羽目になるんだぞ」

未来と堀内の顔を交互に見渡して、翔太郎が返されたジョーカーメモリをベストの内側にしまい込む。便利屋の二人が不満を表情に表してはいても言い返さないと、彼は更に根本的な問題へと突っ込んだ。

「しかし、この町の住人でもないあんたたちが、ドーパント絡みの事件を解決しなきゃならない義務はねえ。ここから先は俺に任せて

くれねえか」

「……俺たちには対処は無理だって言いたいのか？」

無論、きつと睨み付けてきた堀内の言う通りである。

相手はドーパントなのだ。いくら元が人間でも、超人的な肉体的特性と特殊能力を持つ身が変わってしまった存在に、仮面ライダー以外の何者も立ち向かうことは不可能だった。

「あんたらだって、襲われて怪我までさせられたんだからわかってるだろ？ドーパントとやり合うのは、普通の人間には危険過ぎる。片がつくまで、迂闊に風都へ近寄らない方が身のためだ」

「そうは行くかよ。やっと健太の父親の手掛かりが掴めたんだ。このまま引き下されるか」

改めて翔太郎は説得を試みる姿勢となったが、逆に堀内は敵愾心を剥き出しにできていて、あくまでも引き下がるつもりがないことを感じさせる。聞く耳を持たない新人の青年にやれやれと小さく溜め息をついて、翔太郎が今度は未来に持ちかけた。

「なら、その件もこっちで引き受ける。とにかく退院できるようになったら、早いところ戻った方がいい」

「そう言うあんただって、ただの人間だろ？人の手柄を横取りするような真似が、ハードボイルドの流儀なのかよ」

堀内の明確に相手を馬鹿にする嫌味さに翔太郎の眉が動き、抑え気味にしていた声のトーンが不快そうに上がる。

「何だと？」

ようやくと言うべきか、翔太郎の目にも怒りが見え始めた。こうもあからさまにハードボイルドを貶すなど、彼の恩人そのものを否定し、侮辱するに等しい行いだと言えるのだ。

「堀内。今はあんまり血圧を上げたら、身体に障るよ。私たちはもう帰るから、何かあったらいつでも連絡してね」

初めて互いの顔を正面から睨み合った二人の男の間に、未来が強引に割り込んできた。場違いとも思える陽気な笑顔をわざとらしく浮かべると、そのまま強引に翔太郎の片腕を引っ掛けて病室の出入

口へと身を翻す。

「いててて！お、おい！引つ張るなよ！」

未来に半ば後ろ向きで引きずられる格好となった翔太郎が、思わず声を荒げて抗議する。

「いーから、来なさい！」

自分よりも背が高い男をずるずると引つ張っていく未来も、子どもを叱り飛ばすような口調になっている。ほんの少し前に会ったばかりの男女がまるで旧友の如き仲で共に去っていく姿を、堀内のみならず病室にいる入院患者の全員がぼかんと見送った。

「あ、すみません！」

翔太郎をまだどこかへ引き連れて行こうとする未来が、病室を出たすぐの廊下で危うくぶつかりそうになったのは、患者の食事を積んだワゴンを押した中年の男性であった。慌てて謝りはしても、彼女は翔太郎の腕をまだ離さないでいる。

「こら！この怪力女、いい加減離せよ！」

「やかましい、さっさと来る！」

未だ口論が続けている若い二人の声が遠ざかっていく様子を、堀内は一人ベッドで聞かされることになっていた。

「……畜生」

彼はベッドにまだ身を起こしてはいたが、顔は俯いており口からは悔しげな、というよりは恨み節のような極色彩に塗りたくられた一言が漏れていた。パールブルーの入院着の袖から突き出た細い腕の先にある手が毛布を握り締め、指が小刻みに震えている。

黒く、男にしては長い髪がばさりと垂れ、堀内の細面を覆った。

「あのう……お食事をお持ちしましたが」

その長い前髪の奥を覗くようにおずおずと声をかけてきたのは、未来と衝突しそうになった配膳係の男だった。

堀内は首を横に大きく振って前髪をどけ、暗い情熱が窺える瞳を上げた。

未来は病院の屋上まで辿り着いてドアを乱暴に開け、春の温もりが満ちる外気の中へと出てから、やっと引きずってきた翔太郎を解放した。

「もう、いきなりあんな言い方はないでしょ。仮にも、彼は怪我人なんだから」

そして振り返るなり腰を両手に当てると、仁王立ちになって翔太郎に文句をつけた。明らかに彼を子ども扱いしているのがわかるが、委員長然とした振る舞いに翔太郎は口答えする気を削がれてしまう。

「わ、悪かった。つい勢いに乗っちゃまって……」

「まあ、堀内も途中から喧嘩腰になってたのは認めるけど。だから引き分けだね」

気圧されて素直に謝った半熟探偵を、腕組みした未来がじろりと横目で睨む。

しかし彼女はすぐにふうつと溜息をつく、カんでいた肩から力を抜いて、傍らの錆びた手すりの方へゆっくり歩いていった。屋上には二人以外に誰もおらず、静かな病棟内の雑音は殆ど聞こえてこない。すぐ側にある物干しには真っ白な洗いたてのシャツが風都の風に揺られており、清潔な香りを彼らのもとへ運んできていた。

翔太郎が立つ屋上の出入口付近からは、未来が頼杖をついた手すりの遥か向こう側に風都タワーがそびえているのが見える。彼がこの場所から春霞でばやけた風都タワーの姿を見るのも、高校時代以来ずいぶん久しぶりのような気がした。

「話を蒸し返すことになるんだけどさ。健太くんの父親捜しの件について、左さんは黙って見ててくれない？」

「あ？」

いつもと変わらない佇まいの風都タワーを見つめていた未来がこちらを向かずに言ってきたことに、翔太郎は怪訝そうな表情で聞き

返した。

未来が風になびくポニーテールの明るい髪を片手で押さえつつ振り向く。その黒い大きな瞳が目立つ顔が、複雑な色を帯びていた。何か事情があることを察した翔太郎が黙ったまま隣に立つと、さり気なく視線を外して彼女は続けた。

「あんたも探偵なら、初めて受けた依頼のことは覚えてるでしょ？」
「もしかして、あの健太って子が依頼人なのか」

翔太郎の鋭い指摘に、女所長は頷いてから続けた。

「堀内が買い出しの途中で、迷子になってたあの子を保護してね。うちの事務所の近くにある保護施設の子なんだけど、三年くらい前にいなくなったお父さんを探して、ふらふらしてたらしくて。それなら俺がお父さんを見つけてやるよって、大見得切っちゃったんだってさ。うちも子どもからお金なんか取れるわけないし、殆どボランティアなんだよね」

「なるほど、それが奴の初仕事ってわけか。だからあんたは、何とか奴の力で解決させてやりたいんだな」

「それもあるけど……堀内も健太くんと同じで、身寄りがないの」

翔太郎の顔から視線を外したままにいる未来の口調が、次第に弁解がましくなってくる。

「うちでバイト募集した時、殆ど着の身着のままで転がり込んで来てさ。最初の頃なんて、うちのスタッフとまともに口をきこうともしなかったの。うちは私と事務の子を除いて全員が外国人だから、言葉の問題もあってね。ある程度はしょうがないんだけど」

こんなことを話しても言い訳にしかないことなどわかっている、と苦しい笑顔になっている未来の目が語っているのがわかるが、翔太郎はまだ彼女の話を遮らないでいる。

「その堀内がさ、あの依頼を通してだんだん明るくなっていくのがわかるから。だから、何とかしてやり遂げさせてあげたいんだよ。親心みたいなのが出ちゃってね」

「風都に来たのも、その一環ってことか。そこであのドーパントに

襲われた」

話の終わりは無理に明るい調子で締め括ったところを翔太郎から冷静にまとめられても、未来は頷きをもう一度返したただけだった。事のいきさつが、次第に明らかになってきた。

堀内が健太の父親を探す途中にあのドーパントが現れてガイアメモリを奪おうとし、堀内がガイアメモリを所持していないことがわかると、上司である未来に目をつけて次に襲ったのである。

しかし、まだわからないことは残っている。何故、彼らがメモリを持っているとドーパントから決め付けられているのかということと、あのドーパントが何者かということだ。そのヒントは、未来の話をもう少し詳しく聞けば糸口が掴めるかも知れない。翔太郎が真剣な顔で頷いて話の続きを促すと、未来は彼の意図を受け低い声で続けた。

「健太くんの父親が、つい最近までこの街の会社にいたらしいってことがわかったんだよ。堀内がそれを証明するものを見つけて、この前私のところに持ってきてくれたんだ」

翔太郎の眉が僅かに上がる。

確かに、病室にいた堀内も手掛かりを見つけたと話していた筈だ。「そういや、堀内もさっきそんなことを言ってたな。そんなに決定的なものなのか？」

「この懐中時計なんだけど……ここに会社名が入ってるの。ほらここ」

未来がグレーのジャケットの内ポケットを探って取り出したのは、引き輪とチェーンがついた銀色の懐中時計だった。彼女の小さな手のひらにも納まる懐中時計の蓋には風都タワーがレリーフされており、まだ新品とも思えるくらい状態がいい。

時計本体を裏返して隅の方を差す彼女の指先を見ると、そこにははっきりと目立つ字体が刻まれていた。

「……これは！」

翔太郎が驚きから呟いて、もう一度その刻印を見直した。

『Digital Co., Ltd』という企業ロゴの特徴ある形が、確かに見て取れる。

「ディガル・コーポレーション。もう倒産したみたいだけど、風都の住人なら誰でも知ってる大企業だったんでしょ？これは二年前に記念品として一部社員に配られたものらしくてね。家族の写真も入ってるし、健太くんもママが写ってるって言ってたから、間違いないだろうって。堀内はこの写真を拡大コピーしたのを持って、聞き込みをしようとしたところ。その矢先にドーパントに襲われたってわけ」

未来が懐中時計の開閉ボタンを押して蓋を開け、直角に開いた蓋の裏側に貼られた写真が翔太郎にも見えるようにして渡した。

セピア色に加工されている写真には赤ん坊を抱いて座る素朴な感じの女性と、夫らしき痩せ型の男性が寄り添って写っているのがわかる。微笑みを浮かべた彼らの身なりに貧しそうなところはなく、雰囲気も柔らかい。どこから見ても幸せそうな家族をイメージさせる写真だった。

写真自体は古いものではなく鮮明だ。だから、子どもである健太も母親の顔がはっきりとわかったのだろう。

「健太の苗字は？」

「山波だよ。山波健太がフルネーム」

「父親はどんな仕事を？」

「健太くんが覚えてるのは……家でもしょっちゅう白衣を洗ってたりにして、その時によく遊んでたってことくらいみたい。どこかの研究所の연구원とか、医療関係とか、理系の仕事だったんじゃないかと思うけど」

段々翔太郎の質問内容が具体的になってくることに、未来が次第に困惑の色を声に滲ませつつあるのが伝わってくる。

翔太郎は、この一見平和な街が抱えている闇の一面を未来に教えることに迷いを覚えていた。が、今ここで取り繕ったとしても、健太の父親の影を追い続けられずに発覚することでもある。彼女を

必要のない危険に巻き込まないためには、前もって伝えるくらいしか手段がない。

意を決した若き探偵は、未来の瞳に視線を合わせた。

「ディガル・コーポレーションは……表向きは一般のIT関連企業だが、裏でガイアメモリの開発から販売まで担っていた会社だ。俺が仮面ライダーとして嘗て戦った相手の一人は、社長の園咲冴子だ」

「……え？」

想像もしていなかったのだろう、未来の目が見開かれたのに一瞬遅れて、低く警戒した声が漏れた。

「会社がなくなった今も、この街では奴等が作ったガイアメモリがまだ流通してる。それどころか、俺の知らないところで新たなメモリが作られてすらいるらしい。山波健太の父親がつい最近まであの会社にいたのは、確かな情報なのか」

「それは今調べてるところだけど……その話、本当なの？」

「こんなことであんたに嘘を教えても、俺には何のメリットもねえだろ」

まだ疑いの目を向けてくる未来から少しだけ目を背けてソフト帽の縁を指で上げると、翔太郎は自分の考えを口に出させた。

「それより今問題なのは、健太の父親が恐らくガイアメモリの開発に関わっていたということだ。そしてあのドーパントも関係者だと考えれば、一応の筋は通る」

「でも、待つてよ。だったら、どうして私や堀内にメモリをよこせなんて言うてくるの？」

翔太郎に食って掛かってくる未来の様子が混乱しているのは変わらないが、恐怖や怯えなどは感じさせない。ボランティアに近い人捜しの筈がドーパント絡みの事件に巻き込まれたことに、純粋に驚いている印象だった。

「健太の父親は、ガイアメモリを持って行方をくらましたんだろう。多分、あんたたちが既に健太の父親の居所を掴むか接触するかして、メモリを手に入れてると思われるんじゃないかねえか」

「ええ？そんなの、むちゃくちゃな理屈じゃない！第一私たちは、あの子の父親が何の仕事をしてたかってことも、たった今知ったばかりなんだよ。何をどう勘違いすれば、メモリを持ってるってことになるわけ」

「さあな。ドーパントの考えることは俺もわからんが、そうしか考えられねえ。とにかく奴はそう思い込んでるんだからな」

「けど、目ばしい手がかりもこの懐中時計だけなのに……」

自分と同じ年くらいの若い探偵から聞かされた推測に、未来はその先を継げずに懐中時計を見つめるばかりになった。色々な考えが錯綜する頭を落ち着かせようと考えを巡らせているのか、時折何もないコンクリートの足元に視線を落としている。

「堀内は、どこでそれを手に入れたんだ？」

「質流れしてたのを見つけて、買い戻したって言ってた。店長にも売りに来た人の人相風体は確認したけど、どうも本人だったみたい。売るときに店に教えた連絡先は、お約束通りでたらめだったよ」

未だ思案をこねくり回していると思える未来は、継続する翔太郎の問いにも殆ど無意識に答えているらしい。聞かれていないことまで回答に出してしまっているところは、認識が甘いと言わざるを得ない。

もつとも、翔太郎も他人のことは言えないが。

「だとすると、もうそっちからは探れねえな。どう調べたもんか……」

「ちょっと。さっきから聞いてると、あんたが健太くんの父親を探そうとしているようにしか思えないんだけど。まさか、本気で堀内の仕事を横取りしようってんじゃないだろうね」

本気で考え込もうとした翔太郎が呟いて腕を組んだところで、聞き咎めた未来が懐中時計をしまってから睨んできた。

「横取りって、人聞きの悪いこと言うな。言ってるだろ、普通の人間にドーパントの相手は無理だって！」

「ああ、それなら大丈夫。私も普通の人間じゃないから」

「あ？」

先とは逆に翔太郎が聞き分けのない未来に食い下がったが、片手を振って軽く返され、彼は間が抜けた声に疑問符をつけた、何とも格好のつかない返答をする羽目になった。

言われてみれば確かにこの若い娘は人間離れ、と言うか日常から離れたところに立つ存在のようだった。ドーパントを初めて見た直後に見せたあの落ち着きと言い、生身でドーパントに立ち向かいあの硬い身体にダメージを与えられる怪力と言い、全く普通の人間だとは言いがたい。

「……まあ、確かにあんたが馬鹿力の持ち主だってことは認める。だがな、戦いの素人には……」

「生憎、素人じゃないよ。戦えない女が銃なんて持ってると思ってるの？」

違う方向から事件への介入を阻もうとした翔太郎に、再び未来が突っ込みを返して見せる。

そして今度も、内容を素直に認めてしまふ彼がいた。

「言われてみりゃそうか」

「簡単に納得するくらいなら、最初から言っな」

「って、あんたまだ俺に正体を明かしてねえじゃねえか！」

今更ながらに気づいた翔太郎が、ドライな態度へ転じ始めた未来に詰め寄った。

「私は便利屋の所長で、戦いの心得がある怪力女。それ以上、何が知りたいっての？」

「うそつけ！あんたの力は、変身した俺たち……仮面ライダーに匹敵するとフィリップが言ってたんだ。それに身のこなしや戦い方も訓練を受けた人間のものだったな」

翔太郎から具体的に指摘された未来の整えられた眉が僅かに動き、大粒の瞳がずっと細められる。彼女の表情から今まで軽口を叩いていた活達さが霧の如く消え失せ、代わりに他者からのあらゆる思いを撥ねつける透明な壁が瞬時に築かれたような錯覚すら覚えさせた。

翔太郎は自然と膝が緩められ、すぐ動けるように脚の筋肉が力を溜め込んだのを自覚した。彼女が放つ鋭い刃のような陰しさに、修羅場をくぐってきた身体が反射的な反応を示しているのだ。

文字通り、瞬く間に自らが纏う空気を一変させたこの女は、やはりただ者ではない。

既にわかっていることではあったが、それでも翔太郎は敢えて問うた。

「……あんた、一体何者なんだ？」

未来は答えない。もとより答えるつもりがないのかも知れないが、それならここまで引つ張る理由もない気がする。

無言で互いの眼を睨み合う男女の間に、病院と言う場所には不似合いな、きな臭い緊張が漲ろうとした。

「私があんたにそこまで教えなきゃならない義務はない」

その全身の神経を突き刺してくる張り詰めた雰囲気から先に気を逸らしたのは、未来の方であつた。冷たく平坦に言い放つ声には、殆ど感情が込められていない。しかし他者をばつさりと切り捨てる言い種には、これ以上踏み込まれたくないという強い拒絶が読み取れる。

翔太郎と未来の双方ともまだ視線は外していないものの、もう近寄ろうとする姿勢を取っていないことは明らかだった。

「とにかく堀内が動けないうちは私が健太くんの依頼を代行するか、そのつもりでいて。極力、誰かに借りは作りたくないの」

そして鳴海探偵事務所で見せたビジネスの表情が、未来の顔に浮かび上がる。

翔太郎は言葉でも態度でも返事を返さなかったが、沈黙を同意と受け取ったのだろう。彼女は風が乱したポニーテールの髪に手をやり、ジャケットの襟を整えながら翔太郎に背を向けた。

「そうそう、一つだけいいことを教えてあげる。あんた、『プライド』って言葉に心当たりはある？」

ところが翔太郎が黙って見送ろうとした小さな背中が、屋上の出

入口の前で止まって振り返った。

「プライド？」

彼が屋上を吹き渡る風に煽られる愛用の帽子を押さえて訊き返すと、未来は不思議と硬さの消えた幾分か穏やかな表情で頷いた。

「私が襲われる少し前にコンビニで買い物したんだけど、そこから車を出すとき確かにそう聞こえたの。けど人間の生の声じゃなくて、機械に通したような声だったよ。そのすぐ後に、ドーパントが車にひつついてきたの」

「何だと？」

思いがけずもたらされた手掛かりに驚いて、翔太郎は未来の方へと数歩踏み出した。

彼女が耳にした「プライド」という声は、ガイアメモリを使用する際に上がるガイアウィスパーだ。それがドーパントの種類を示したことも間違いないだろう。ガイアメモリの種類がわかれば、フィリップが「地球の本棚」で探れる情報量が圧倒的に多くなる筈だ。もしかすると、ドーパントに変身した何者かの正体も判明するかも知れない。

「ドーパントから助けてくれた借り、今ので返したからね」

しかし翔太郎の興奮をよそに、未来は片手を軽く振って去ったのみであった。

鳴海探偵事務所の奥にあるドアをくぐった先は、一見したところで工具とガラクタが散乱するガレージだ。

しかし実際は鳴海荘吉の幼馴染みであり、フィリップーつまり園咲来人の実母であるシユラウドが、最新技術を駆使して作り上げたガジェットを集結させている要塞である。

母が遺してくれた場所の一角に、フィリップは瞳を閉じて静かに佇んだ。

「検索を始めよう」

傍らで亜樹子と照井が見守る中、天才少年の一言が厳かに響く。すると、彼のブーツを履いた足元から長いパーカーの裾が揺れる膝下の辺りまでを、ごく淡い光が包み込んだ。

同時にフィリップの意識が空間を超越し、己の姿を現実のそれと全く同じものとして仮想空間に再構築する。肉体の存在をはっきりと掴み取ったフィリップが閉じていた瞳を開くと、目の前は真っ白に塗りつぶされていた。

まともな感覚を持つ人間ならば一分と耐えられないだろう単一色の次元を、少年がいつもの癖でぐるりと見渡す。

「キーワードは『オフィス・ユースフル』、『間未来』」

単語を口に出すと、他人には決して目にする事ができない電子的な綴りがフィリップの目の前に浮かび上がり、白い地平の彼方から忽然と現れた巨大な無機物の群れが彼を目掛けて殺到してきた。が、その中心にいるフィリップは微動だにせず、まるで瞬間移動の如き速さで迫ってくる本棚の中に悠然と立ち続けている。

干渉できる者がごく限られたこの場所、『地球の本棚』にある物質が全て自分に情報を与えてくれるものであり、危害を加えてくるようなものではないと、ずっと前から知っているためである。

もっとも、本に書かれていることが利益をもたらしてくれるとは

必ずしも限らなかったが。

フィリップが先に呟いたキーワードに合致する本が本棚から飛び出し、そうでないものは代わりに本棚ごとその場からかき消える。たちまち、彼の周囲は様々な種類の表紙に守られた本に取り囲まれた。その数はまだ数十冊にも及んでいるだろうか。

「そして『戦闘訓練』」

未だ数が多すぎたため、フィリップは更なるキーワードを追加する。彼の声に反応した本たちが再び一斉に動き出し、すぐに濃紺の表紙の本一冊のみが目の前に選り出された。

金色の簡素な飾りに彩られたそれをフィリップが手に取った瞬間、「Company」のアルファベットが題字として浮かんで定着する。

「オフィス・ユースフルは、間未来が出資して四年ほど前に設立された会社だ。武器の所持については国から正式に許可を受けているが、今までに違法行為が摘発されたようなことはない。会社のメンバーは殆どが外国人で構成されていて、必要な射撃訓練を定期的に行っている」

本を開き、立て続けでページを無造作に弾き続けた少年は、必要な情報をすぐに読み取ることができた。次々と白紙のページに現れる文字を忙しく追いかけて、彼は更に目ぼしい情報を掬い上げていく。「しかし代表であるところの彼女は、一時的に会社を離れている空白の時期があったようだ。三年前の五月からおよそ一年間、副所長が代理として業務に当たっていたらしい」

題字に示されたように、この本に現れたのは主に未来が経営する便利屋事務所のことであった。

フィリップが声に出して読み上げた本の内容について意見をつける照井の声が、遠くの方から呼びかけてくる。

「間未来の個人に関する情報は、他に何かないのか？ あんな若い女が、正規の手続きを踏んで特殊銃火器所持の特別許可を受けたとは到底思えない。必ず何か裏がある筈だ」

訝るような照井の声を受けたフィリップは、地球の本棚にある身体で首を横に振った。

「彼女の個人的なことを知るには、もっと違うキーワードで探さなければならぬ。今の状態では、これしかわかることがないようだ」
呟きながらまだ本のページをめくっていたフィリップだが、そこに有益そうな情報がもう見つからないことに溜め息をついて、精神の集中を解いた。

今まで宙に漂っているのと似た感覚すらあった身体に重さが戻り、たった今足が地に接触したような軽い衝撃が走って、肉体が知覚されていく。最後に閉じていた瞳を開き視界を戻したフィリップは、日常の空間を全身が把握したことを確認して肩から力を抜いた。

地球の本棚から戻ってきた少年が立っているのは、ガレージの最深部に当たるリボルギャリーの中である。彼の頭の高さくらいまで上がる簡素な鉄の階段を登った場所に、照井と亜樹子がいた。検索を終えたフィリップがゆっくりと彼らのもとへ歩み寄っていくと、亜樹子の特徴がある甲高い声が大きく聞こえてくる。

「まさか竜くん、本当に未来さんがドーパントだって疑ってるの？」

「そうでなければ、左やフィリップの話が現実だとは思えない」

亜樹子の婚約者である刑事があくまで先の来客を疑うのも理屈としてはわかっていても、納得がいかない様子で彼女は首をひねっていた。

「私には、彼女が何か嘘をついてたようには見えなかったけどなあ

……ほら、仮にも私と同じ、事務所の所長！って立場なんだし」

照井が理屈に沿ってそう考えていたが、亜樹子の考えは勘や閃きに近いものがある。典型的な男女の思考パターンの違いが如実に現れているのもこの二人だったが、だからこそ補い合えるところも多々あるのだろう。

そしてフィリップは、双方の考えからではまだ触れられていない点について言及した。

「そう。彼女は嘘は言っていないが、また本当のことを全て僕たち

に教えているわけではないんだ。まだ何か、僕たちの知らない彼女の姿があるはず。それに何とか見当がつけば……」

「フィリップ！」

そこまで彼が言ったとき、事務所から通じているドアが乱暴に開け放たれ、息を弾ませた翔太郎が駆け込んできた。ハードボイルダーから降りてそのまま中に走ってきたらしく、風に煽られていたネクタイやベストが乱れたままだ。

「どうした、左？」

「照井……お前、まだいたのか」

「竜くんは今日直帰するからいいの！それより翔太郎くん、どうしたの？随分慌ててるみたいけど」

病院に未来を送ってから戻ってくるまで数時間は要しているのに、まだ照井が帰っていないことに翔太郎が意外そうな顔を見ると、亜樹子が二人の間に割って入ってきた。

翔太郎が一人で戻ってきたことを確かめたフィリップも、話の輪に加わってくる。

「やあ、翔太郎。間未来個人について、僕らの知らない一面を探ってくれていたんだろう？早く教えてくれないか」

「そんなのは後だ！それより、今から俺が言うキーワードで検索を頼む」

フィリップが冷静に見ればかなり酷い偏見と誤解に満ちた言葉をさりげなく通したことは気に留めず、翔太郎は話を先に進めようとした。

が、一度こだわったことにはあくまで筋を通すのがフィリップという人物である。からかうつもりで出した推測を肯定も否定もしない相棒の顔を、フィリップは不審さをありありと表した顔で覗き込んだ。

「翔太郎が女性のことを二の次にするなんて、珍しいこともあるものだ。まさか、また悪女とやらにでも引っかけたのか？」

「『また』って何だよ！」

じろじろと人の顔を眺め回してくるフィリップの無遠慮さと痛いところを突かれた苛立ちで、翔太郎が憮然とする。確かに今までの事件では、女性絡みでしかも彼女らが主犯格のものが多かったとは言っても、今回はまだそうと決まったわけではない。

ただ、翔太郎が悪女に何度も引つかけられたことなどないと強く主張するには、今一つ説得力に欠けるのは確かなことであつた。

「左がいつまで経っても懲りないからだろう」

探偵コンビの横で照井がぼそりと突っ込みを入れると、亜樹子もたちまち同調して激しく頷いた。

「何だと……ってこら亜樹子！てめえも何気に納得してるんじゃないやねえ！」

翔太郎の怒鳴り声に、亜樹子が悲鳴を上げて素早く照井の背に隠れるしぐさを見せる一方、照井の方は二人を止めようという気はないらしい。

フィリップも興味深そうに翔太郎と亜樹子が始めた追いかけてここを数秒間眺めていたが、相棒が持ち帰った情報への好奇心の方が勝つたようだった。普段のマイペースな口調を崩さずに、まだ照井の周りで亜樹子を追う翔太郎へ促しにかかる。

「検索はいいのか？」

相棒の少年に言われた翔太郎は、思い出したようにぴたりと足を止めて向き直った。

「お、そうだった……キーワードは『山波健太』、『ディガル・コープレーション』。最後に『プライド・ドーパント』だ」

「プライド……それが、今日現れたあのドーパントなのか！」

「ああ、恐らくな」

まだ荒い息がおさまらないうちに所長とのじゃれ合い開始した翔太郎は再び息切れし、短くしか返事を返せなかった。しかし手は忙しくネクタイやベスト、癖のついた髪を直しつつ頷くという、器用な真似をやつてのけている。

「ええ？すごいじゃない、翔太郎くん！どうやって調べたの？」

「ふつ、俺の情報網にかかればこの程度は朝飯前ってことだ」

「その場合、本当に役に立っているのは情報を持っている連中だな」

呼吸を整えながら気障な台詞を決めたつもりの翔太郎であったが、残る仲間の男から飛んできた横槍は見事にその間隙に突き立っていた。

「うるせえ。そいつらから色々聞き出せるのは、俺の人徳だっただ」

凶星を突かれた翔太郎が、照井に子供っぽくむきになって言い返す。

「よし。早速検索を始めよう」

仲間の漫才じみたやり取りからいち早く脱却を図ったフィリップは、やはり自分のペースを取り戻すのも一番だった。すぐに鉄の階段を降りて最も落ち着ける場所へ陣取り、再び「地球の本棚」へと身を投じる。仲間たちがフィリップの精神集中の妨げにならぬよう口をつぐんでから数秒と経たないうちに、彼はあの白い空間へと戻っていた。

「キーワードは『山波健太』、『ディガル・コーポレーション』。そして『プライド・ドーナツ』だ」

天才少年の言葉に反応し、地球の記憶全てを封じた数億もの本が一斉に空を飛び交い、しかし決して互いに衝突することなく、求められた知識に合致する本だけが選り出され、残る数多のそれは音もなく消えていく。

やがてフィリップの手元へと導き出された一冊の本は、淀んだグレーの表紙に白い紋様が描かれた、「Project」という題字を持つものであった。

「何かのプロジェクトについての情報か」

彼は意外そうに呟いてから本を取り、白いページに現れる文字を一心不乱に読み取った。そして本文を追い始めてからまもなく気づいたのは、この本がディガル・コーポレーションのガイアメモリ開

発業務そのものについて書かれているということである。

「ディガル・コーポレーション倒産直前に進められていた、ガイアメモリの極秘開発プロジェクトがあったらしい」

フィリップが仲間に伝えるために判明した事実を口に出すと、早速翔太郎が疑問を投げ掛けてきた。

「しかし、ガイアメモリ開発についてはそれ自体がトップシークレッツ扱いじゃないのか」

「勿論それはそうなんだが、その中でも機密事項とされたものとなる。それが『七つの大罪』のガイアメモリ開発だ」

七つの大罪ガイアメモリ。

それは単語を発したフィリップを含む一同が、初めて知った言葉だった。

「七つの大罪って、宗教によく出てくるあれ？人間が持つ罪っていう……」

普段殆ど触れる機会がないため、乏しくならざるを得ない知識を頭の奥から引っぱり出すべく、亜樹子は首を捻っていた。

「『憤怒』、『怠惰』、『暴食』、『色欲』、『強欲』、『嫉妬』。それに『傲慢』だな」

「……プライドを日本語で言うと『傲慢』か。何者かがプライドのメモリを使って変身したのが、今日見たプライドドーパントってわけか」

すらすらと人間が持つとされた原罪を述べた照井に続き、翔太郎が推測を口にする。

彼らの発言を聞き取ったフィリップも、仮想世界の中で頷いた。

「その通り。そしてその開発を行っていたチームのサブリーダーが、山波勇雄という人物だ。恐らくこの男が、山波健太の血縁者だろう」
彼は念のため本の全体をざっとさらってみたが、他に同じ苗字を持つ人物についての記述はないようだった。

「しかし今は会社が消滅して、プロジェクト自体がなくなっただんじやないのか？プロジェクトメンバーの行方はどうなっている」

今度は照井が疑問を唇に上らせると、目を閉じて立ち尽くしているフィリップからすぐに答えが返ってきた。

「メンバーは散々になっているが、サブリーダーの山波と……リーダーの永峰智之に関しては、消息がつかめていない。他のメンバーは全員解雇された後、別の会社に行ったようだ」

「永峰智之……？どこかで見た名前のような……」

その名を聞いた翔太郎が、きつく腕を組んで宙を睨んだ。

フィリップが出したもう一つの人物名について、確かにごく最近見聞きした覚えがあったのだ。フィリップに全く反応が見られず心当たりがなさそうなところを見ると、恐らく自分が単身で行動していた時のことだろう。

ナガミネ、という姓はよくあるものではない。文字とその音の響きを聞いた感覚は確かにあるのだ。

『あれ……健太くん。永峰さんも』

そのときである。

翔太郎の耳が残っていた記憶が、未来の声に乗って引き出された。

「あー！」

「思い出したのか？」

突然驚愕の表情で大声を張り上げた翔太郎には全く動じず、照井が突っ込む。

「確か今日、病院で未来さんの部下の堀内を見舞いに来てた男が永峰だ！名札をつけてたのを見たし、彼女が奴の名字を呼んでたのも聞いている。間違いねえ」

「ええーっ！行方不明の筈じゃなかったの？」

婚約者に続いて、亜樹子も声を上げる。

翔太郎は今日の昼間に病院であつた出来事を詳細に思い出した。

永峰は確かに、病院の堀内を山波勇雄の息子である健太と共に見舞っていた。が、未来が健太は施設の子だと説明していたことから、永峰が同僚の息子である健太を引き取って育てているのではない。それに第一、永峰は健太がいる施設の職員の筈ではないのか。

行方不明の元ガイアメモリの開発研究者が何故そんな真似をしているのか、皆目見当がつかなかった。

「ガイアメモリの開発は成功していたのか？」

大声を上げたきり、今度は黙って考え込んでいる翔太郎の肩越しに、照井がフィリップへの質問を続けた。

「メモリの開発自体はある程度まで成功していて、七本全てのメモリの試作品が作られていたとある。しかし山波と永峰の両名が姿をくらすと同時に、試作品も全て研究所から消えたようだ」

試作品のメモリが、開発担当者と共に消えた。これは捨て置けない情報である。まだ地球の本棚にいるフィリップの話を聞くとはなしに聞いていた翔太郎が顔を上げた。

「どういうことだ？」

「やはり、山波と永峰が持つて逃げたんだろう。二人ともチームでは上の立場にいた人間だ。まだ密かに研究を続けようとしてるなら、地下に潜ったということも考えられる」

次に自らの見解を述べたのはフィリップではなく、翔太郎の横にいる照井だ。

「他の人がメモリを持つて逃げて、それが売られたってこともあり得るんじゃない？」

「いや。それだとプライド・ドーパントがメモリに無関係な人間を襲う理由がないだろ」

亜樹子もひとつの可能性を示して見せたが、翔太郎がすぐに否定する。

ただしそれは自身でも予測していたことだったらしく、彼女は先の翔太郎と同じように唸った。

「そっか……そもそもメモリなんて自分で一本持つてれば十分よね。ガイアメモリを作ってたんなら、使えばどうなるのかってことぐらいわかってる筈だし。とにかくそのプライドは、『七つの大罪』のメモリを集めようとしてるのよね」

今現在で判明していることを整理し出した亜樹子がぶつぶつ呟く

と、翔太郎が今度は頷いた。

「そして今現在、メモリの開発の中心にいた山波勇雄は行方不明。永峰は、山波勇雄の息子である健太がいる施設の職員。七本のメモリのうち、今のところ表に出てるのはプライドの一本のみだ」

自分が持ち帰ってきた情報を皆と共有すべく、半熟探偵はなるべく具体的なキーワードを混ぜて説明した。最低限の事実関係を最も短い言葉にただけだったが、照井と亜樹子、フィリップには十分伝わるのありがたい。

「そういえば、未来さんは本当にメモリを持ってないのよね？」

「ああ。それどころか、先にプライドに襲われた彼女の部下も持っていないって話だ。俺の勘だが、あの二人は嘘をついてない。最初からガイアメモリの存在も知らなかったんだと思う」

亜樹子の問いに、翔太郎は自信を持って答えた。自分は女を見る眼力に乏しいかも知れないが、少なくとも人間の本質を掴み取る本能的な感覚は冴えていると胸を張れるのだ。

「しかしプライドからはメモリをよこせと詰め寄られていて、なに彼らに全くその心当たりはない……堀内という間未来の部下が先に襲われたのだから、彼がメモリを最初に持っていたとプライドは考えていたわけだ」

そこで、地球の本棚から戻ってきたフィリップが階下から一同のもとへ上がってきた。彼も仲間からの意見を参考にして自分なりの推測を立てている最中らしく、今ある現実から確実に導き出すことができる結果をひとりごとのように口に出していた。

「うーん、わからんわ！ なして未来さんたちが狙われたのか、そこが全然ピンと来んねん！」

実年齢不相応な容貌をした亜樹子はその外見が示す通りに常時飽きっぽいが、今もその様子である。まだじつと考えに沈んでいるフィリップよりも早く音を上げて頭を抱え、足踏みしながら苛立ちを態度で表していた。

「しかしプライド・ドーパントは、恐らく永峰か山波のどちらかだ」

子どもじみた振る舞いが抜けない亜樹子を尻目にしながらも、照井は自分の中でそう結論づけたらしい。婚約者がうるさく隣で騒いでいると言うのに落ち着きを保っていられる神経の太さには、最近更に磨きがかかってきたような印象すらある。

「それについては僕もそう思う。間未来たち二人とガイアメモリを巡る接点は、あの二人が『七つの大罪』メモリ開発者の一人である山波を探していたということのみだ。そうでなければ、彼らがドーパントに狙われる理由がどこにもない」

ドーパント犯罪を専門とする刑事の意見に、フィリップが同調する。

渦中にある人物たち全員を唯一その目で確認している翔太郎の考えも、フィリップや照井のそれと同じであった。メモリを所持するどころか存在すら知らなかった未来と堀内がドーパントに狙われる理由としては、今のところ「七つの大罪」ガイアメモリ開発者の身辺を探ろうと動いていたことしかないのだ。

ただしそれでも、何故彼らがメモリを所持しているとプライドに思い込まれているのか、という最大の疑問がまだ解決していない。それはこれからプライドを倒すなり、更に当事者たちから詳しく話を聞くなりして突き止めるしか手段がないだろう。

照井は翔太郎が異論を唱えてこないことをさり気なく横目で確認してから、フィリップの方に真剣な眼差しを向けた。

「問題なのはどちらがドーパントなのかと言うことと、奴等が他に何本のメモリを持っているかということだが」

「その問題と言うのにも、様々なパターンが考え得る。メモリの全てを彼ら二人が分け合っているのか、それとも何本かが既に風都へ流出しているのか。そして、ガイアメモリを集めているドーパントが、果たして山波と永峰のどちらなのか」

照井の言葉を受けたフィリップは自らが考え出した事例の一つ一つが実際にそこにあるかのように、何も無い空間をゆっくりと指で指し示して熟考しようとしている。

たった今相棒が口に出した「可能性」の一つについてこの後のことを考えると、急に暗い将来しか待ち受けていないかのような錯覚に襲われる。

そう感じたのは、翔太郎であつた。

「もしプライドが、今日俺が病院で見た永峰だつたら……」

フィリップと照井が山波と永峰の居場所を突き止める具体的な手段を検討し合っている横で、彼は重い呟きを唇からこぼれさせていた。

健太の父親は未だに行方が知れないが、永峰は今日の昼に入院している堀内と話している。

永峰は健太が見舞いに行きたがつたから来たのだと言っていたが、堀内の肉親でもない彼が何故、入院したという情報をあんなに早く掴んでいたのだろうか？

もしかしたら、怪我をした堀内がまだメモリを隠していないかどうかを確かめに行つたのではないだろうか？そして直接彼と言葉を交わして、メモリを本当に持つていないことを確信したのではないだろうか？

だとすれば、例えばメモリを持つていなくても、上司である未来が再び襲われる可能性が高いことになるのではないか？

勿論これらは数多くの「可能性がゼロではない」予測のうちの一つに過ぎず、フィリップに相当な論理の飛躍があると指摘されても仕方がない。しかし問題に関わる人間のほぼ全員に会い、特に未来について短時間のうちに多くを知ることとなつた翔太郎は、彼女が危険な目に遭う可能性を黙って見過ごせなくなっていた。

いくら未来が普通の人間ではないとしても、彼女は仮面ライダーではない。即ち、ドーパントに襲われても戦うことはできるが、メモリブレイクは不可能であるということだ。それはつまり、身を守るための決定力に欠けるということになる。

未来は借りを作りたいくないと話していたが、このままでは遠からず彼女が窮地に立たされるのではないか。

翔太郎は、黒い予感に胸がざわめくのを嫌でも感じざるを得なかった。

翌日は薄く雲がかかりながらも、暖かな陽気が街全体を包み込む穏やかな天候だった。

この時期ならではの眠たげな空模様は人々にも眠気をゆつくりともたらしってくるが、未来のいる軍事・化学総合研究施設たるC-SOLは、冬が終わる頃から慌ただしい空気のさ中にある。海辺の埋め立て地で巨大な敷地を持つ複数の研究棟に吸い込まれていくトラックやトレーラーも、外から潮風とともにせわしさを運んでくるような気がしていた。

「はあ……」

未来はC-SOLに建つ研究棟の一つ、AWP棟と呼ばれる全面がガラス張りのビルの3階で、アイスコーヒーを飲みながら憂鬱そうな溜め息をこぼしていた。昨日は事務所に帰り着くのが遅くなつてしまい、深夜まで大破した営業車の処理に追われることになったのだ。お陰で睡眠不足になった上に保険会社の担当とも折り合いがつかず、彼女にとって頭の痛い事態に陥っているのだ。

未来が座すのはまだ新しく小綺麗な研究室で、黒い革ジャケットを着た小さな背中が向かうテーブルの後ろでは、白衣の研究員たちが測定器や分析機の間で動き回っている。そこから聞こえてくる化学式を含んだ会話と機械音にはもう慣れて、未来にとってはごく日常的な雑音の一部となっていた。

「どうした未来？メデイカルチェックの結果は異常なしだったのに、元気ねえじゃんか」

施設内のカフェテリアで買ったアイスコーヒーのストローを弄んでいる未来に、やはり白衣姿の男が声をかけた。

男がのっそりと近寄って来ると、彼女の細めの身体が殊更強調されるように見え、男が一八〇センチを優に越える大柄な体格をしていることがわかる。が、白衣の下は着古したジーンズとポロシャツ

で、他の研究員が皆きちんとしたワイシャツを身につけているのと比べれば随分とみすばらしい。

彼の無精髭とぼさぼさの黒髪に包まれた顔は中年のそれであつたが、どちらかと言えば小造りで暖かい印象がある目鼻立ちと細かいことを気にしなさそうな雰囲気には、人柄の良さが表れているようでもあつた。

自分が座っている席のすぐ横までサンダル履きの足をぺたぺた鳴らして歩いて来た男に、未来は顔を上げた。

「うん、仕事のことでちよつとね」

「何だ。てつきり杉田がいない間に、気になる野郎でも新しくできたのかと思つたんだがな」

男がにやりと笑つて発した言葉にはそれとわかるからかいの調子があつたが、未来の反応は顕著だつた。

「ちよつ……おいオツサン！何でそうなるのさ！」

とげとげしい一声を上げた未来が、椅子を蹴飛ばさんばかりの剣幕で立ち上がる。

「いきなりおっさんとは、お前も結構な言い種じゃねえか」

「生沢先生は私よりも一回り以上歳上じゃない。立派におじさんだよ」

垂れ気味の目に軽い負けん気を込めて言い返してきた男に、未来は非情なる事実を叩きつけた。

この熊のような男の名は、生沢慎吾という。ふざけた言動を常とする中年が実は世界的に有名な外科医であるなど、一体初対面の人間の誰が信じられるというのだろうか。

と、子供っぽい喧嘩言葉の応酬を繰り返す度に、未来は真剣に思う。

「杉田先生がいないと調子が出ないんですね、わかります」

その彼女の背後から、いきなり別の人物の声が割り込んできた。

未来は少しもその気配を感じ取れなかったが別段驚いた様子もなく、ただし仏頂面で振り返る。

「もう。リユーってば、あんたまで……」

未来が上目遣いになったのは、リユーなる男の顔が生沢と同じくらい高い位置にあるせいだ。

しかしこの青年は派手なＴシャツに色落ちしたジーンズと言う冴えない格好なのに、それがちつとも浮いた感じに見えない。彼がアメリカ人とのハーフで、欧米系の顔立ちと引き締まった体格をしているために、何を着ても様になってしまうのだ。

が、明るい茶色の巻き毛と、彫りが深く美しいとさえ言える顔を持つ彼の本名は田原隆三で、至って普通の日本人のそれである。アメリカ人で軍属の身だった彼は日本に帰化して数年経っているという話だったが、外見に似合わない名前の件では散々な目に遭っているらしく、今もまだ通常時はニックネームで呼ばせる癖から抜け出せないでいるのだ。

「まあそれは置いておくとして、生沢先生はその時計のことが気になってるだけです」

「え？ああ、これのことか……」

その彼に握りしめている懐中時計を指された未来は、ようやく自分が考えに耽り過ぎていたことを意識した。

「お前にしちや、レトロな小道具を持つてるなと思ったただけだ。若い女が持つようなもんじゃねえだろ」

まだ未来をいじって遊ぼうとする生沢には、リユーが無遠慮な突っ込みで待ち構えていた。

「だからと言って、すぐ下衆な勘繰りに動くのはどうかと思います
が」

「頭ん中が常に萌えエロのお前に言われる筋合いはねえよ」

生沢にそう切り返されても、リユーは平然としたものだった。

「失敬な、私は現実と妄想の区別はしっかりつけてますよ。それに、ただの三次元には興味ありません」

そして惜しむらくは、黙っていればどこから見てもイケメンなりユーがかなり濃い「オタク」であり、空気を読まない発言が常態化

しているということだろう。

いつもの空間に、いつもの仲間。未来がここ数年で馴染んだ場所は、相も変わらずそこに存在した。昨日出掛けた街でたまたま非日常的な事態に遭遇したために、もうここは戻れない場所になってしまうのかとおかしな錯覚にも襲われたが、幸いそれは本当の杞憂に終わってくれたようだった。

もっともここC・SOLも、本来であれば未来に縁があるような場所ではない。

国内最高にして最新技術の粋を集めた研究施設は、産業スパイたちから様々なものを守るため、一般の人間に対しては固く扉を閉ざしている。それどころか、四つあるゲートには拳銃で武装した警備員までもが配置されているのだ。そんなところに自分が関係者として三年も通っているなど、普通ならありえない話ではないか。

もしここで行われている極秘プロジェクトにかかわるきっかけがなければ、今この世に自分自身が存在すらしていなかった可能性もあるのだから。

そう考えると、未来の胸中は複雑だった。

「おい、ちよつとは突っ込んで来いよ。お前が静かだと調子が狂うだろ」

軽口の叩き合いに今一つ乗ってこない未来に、生沢が茶々を入れてくる。確かに普段なら情け容赦のない毒舌を喜んで吐いているところだが、今はあまり気乗りしなかった。

「うつさいなあ。私だって、仕事のことで色々考える時くらいあるんだから」

普段の未来がここに来るときは、本業である便利屋の仕事をあまり持ち込まないようになっている。この研究所における彼女の立ち位置が素顔でいるときのそれと全く異質であり、決して相容れるものではないと心得ているからだ。

が、今度ばかりはそうも言っていられないかも知れない。

今現在抱えている――彼女が持つ懐中時計の持ち主を探すという、

ごくありふれている筈だった依頼には、既に人間の叡智を越えかねない場所にあるものが影を落とし始めているのだ。この研究所にある科学技術にすぎりつきたいのが、未来の正直な気持ちである。

しかしリユーや生沢に助けってくれと泣きついたところで、ドーパントという怪人に変貌した人間やそのための鍵となるガイアメモリ、そして彼らと戦う仮面ライダーたちのことを、果たして信じてもらえるのかどうか。未来には全く自信がない。もし自分がそんな相談を受けたなら、きっと妄想と現実をこっちゃんにした変人が現れたのだと思うに決まっている。

やはり、自分の力で何とかするしかない。

改めて腹を括った未来であったが、そんな彼女の覚悟など知る由もなく、生沢が世間話を振ってくる。

「そういや、今日は杉田の見舞いに行つてないのか」

「杉田先生も、もう自宅療養が終わるしね。最後はちゃんと休んでもらわなきゃ」

ここにいないもう一人のスタッフの話は必要最小限にとどめ、未来が再び座って懷中時計の蓋を開いた時である。生沢が驚いて声を上げた。

「ん……？おい未来。ちょっとそれ、俺にも見せてみる」

言つが早いか、彼女の小さな手から銀色の時計を引ったくろうとする。白衣に包まれた太い腕をするりとかわし、未来は眉根を寄せた。

「ええ？これは他人からの預かり物だから、関係者以外には……」

「そこに貼つてある写真の男、俺の知り合いによく似てるんだよ」

「うそっ？」

これにはさしもの未来も仰天して、開きっぱなしにした懷中時計を慌てて差し出した。風都タワーがレリーフされた蓋の裏側に貼られた家族の写真をまじまじと見つめ、生沢が懐かしそうに目を細めている。

「……ああ、やっぱり山波じゃねえか。写真はちょっと昔のみたい

だが」

生沢は、そこに写っている家族の姓まで正確に思い出しているようだった。彼の視線が写真の中の男性に向いているのを確認してから、未来は高くなった声のトーンを落として質問した。

「この人、本当に生沢先生の知り合いなの？」

未来がまだかすかな微笑みを浮かべている生沢と小さな写真を見比べると、生沢は頷いて見せた。

「こいつはAWP立ち上げの頃のメンバーで、このCISOでも結構長い間一緒だったんだ。まあ、奴が辞めてから五年くらいにはなるけどな」

天才外科医が穏やかに語る内容に、未来が目丸くする。健太の父である山波が生沢の同僚だったとは、何と言う偶然だろう。突然降って湧いた手がかりに、彼女は食いつかんばかりにして身乗り出した。

「この人は、AWPで何を担当してたの？今はどこにいるかわかる？」

「ええと、主にDNA関連だったと思うが……確か五年前に子どもが生まれた時、その子に先天性の病気があったらしくてな。それで自分が何とかして治療法を見つけたいからって、別の仕事に移ったんだったと思うたが」

この口振りからすると、生沢も山波が今どこにいるかは知らないようだった。未来が小さな溜め息とともに肩を落としたが、新たな情報が含まれていたことにすぐ気がついて顔を上げた。

「そっかぁ……って、子どもが病気？生まれつきの？」

これもまた初めて未来は聞く情報だったが、特に不審なことではないと思い直した。

健太はまだ五歳なのだ。自分の身体のことなど正確に知らないだろうし、恐らく堀内にも知らされていないことなのだろう。施設で健太の担当らしい永峰ですら、知ってるかどうか怪しいものだ。

鸚鵡返しにした未来に、生沢は再び頷いた。

「初めての子どもがそんなことになって、気の毒だからな。俺もできることがあれば協力すると言った覚えがある。同じ男の子の父親だからって……そう、確か息子だった筈だ。その時の子がまだ生きてれば、五歳くらいにはなってるな。健やかに育って欲しいという願いを込めて、健太って名前の子だったと思う」

「そんな……」

未来が絶句する。

彼女が堀内から聞いた話では、健太はおぼろげながらに母親のことを覚えており、父親が姿を消したのは母親が亡くなった後であるという。山波は文字通り、健太をひとりぼっちにしたのだ。

今まで未来は家族を置き去りにする父親など言語道断、山波が問題ある親の典型で、何が何でも捜し出して健太に土下座でもさせねばなるまいと思い込んでいた。

しかし実際の山波は、同僚である生沢の前でも息子思いで心優しい父親の姿を見せていた。病を背負った息子には願いを託した名を授け、将来のために仕事まで変えたのだ。逆に、そこまでする親はなかなかいるものではない。

そこまで息子のことを愛していたのなら、何故全てを捨てて姿を消したのだろうか。

これまで自分を突き動かしてきた無責任な親に対する怒りの感情が、困惑にすり替わろうとする。

「お取り込み中のところ申し訳ないですが、未来。貴女にお客さんですよ」

生沢との話の途中で動揺した様子を見せ始めた未来に、リユーが申し訳なさそうに告げた。

はっとした未来が反射的に返事を返そうとして思いとどまり、一瞬だけ考え込んでから応える。

「私に？人違いじゃないの？今私がここにいることなんて、関係者以外は誰も知らない筈なのに」

C-SOLは内部で行われている研究や実験の機密性が高く、こ

この存在を知るのはごく限られた者だけだ。少なくとも未来は、生沢やリユーと共通の知り合い以外の誰かにC・SOLのことを話したことがなかった。

たった一人、大きなトラブルの元凶となった存在であった彼女の母親以外には。

「ですが、永峰智之という男性がロビーで待っているらしいんですよ。関連企業の者を名乗って、正式な入館証も持っているそうです。心当たりはないんですか？」

リユーも正規の手続きを経てきたらしい来訪者に戸惑っているようだ。彼が口にした人物の名前には未来も咄嗟に覚えがなかった。「永峰智之？」

彼女はポニーテールの髪を揺らして名前を反芻する。ナガミネ、という姓の漢字を思い描いたところでようやく、健太がいる施設の担当者の顔を思い出した。フルネームの音を殆ど聞いたことがなく、どうもぴんと来なかったのだ。

「わかった、すぐ行くよ」

軽く頭を掻いて、未来は懷中時計を革ジャケットのポケットに滑り込ませた。

未来がいるA W P棟は地下三階、地上五階という研究施設にしては大きな建物で、数百人の研究者とスタッフが働いている。一階部分は大きな窓に囲まれた開放的な共同スペースで、カフェテリアなどの飲食店や応接間など、対人空間がまとめられていた。

その中の一部である午後の陽光が満ちた明るいロビーに、未来は永峰の姿を見つけていた。

「永峰さん？」

二階の共同研究室からエレベーターで降りてきた未来は、見覚えがある中年の男へ躊躇いがちに声をかけた。これといった特徴もなく、冴えない身なりをした男が顔を上げて会釈を返してくる。

「こんにちは。こんなところにまで押しかけてすみません」

「いえ。どんなご用件ですか？」

ぎこちなさが拭えない笑顔で未来が問うと、永峰がロビーの一角に並べられているソファから立ち上がった。

「あまり大きな声でできる話ではないので……外へ出ませんか？」

永峰の声がほんの僅かに潜められ、未来の表情に一瞬だけ影が過ぎった。

未来と彼とは、幼い依頼人の保護者と事務所で依頼を担当する社員の上司というだけの関係だ。永峰が人払いをしたいのは、ただ単に見も知らぬ他人の耳には入れたくないというだけの話だけなのかも知れない。

未来は頷いてから、中庭に出る通用口へ永峰を案内した。白衣や会社指定の作業服を纏ったスタッフの間をすり抜けて、彼らは建物の隅にある小さなドアをくぐって春の外気の中へと出ていく。

A W P棟と銃器開発研究所、爆発物研究所、組織工学研究所に囲まれた中庭は、電子機器と終日睨めっこをする職員のために、普通よりも緑が多く作られた公園とも言える場所である。各種研究棟の

間を渡る海風で新緑に彩られた木の枝が時折ざわめき、自然の雑音でちよつとした会話は紛れてくれそうだった。

「それにしても、よく私がここにいてるってわかりましたね」

手入れされた芝生をスニーカーの爪先で確かめながら、未来が先に立つて中庭の奥へと歩いていく。

「元協力企業ですからね。随分と前のことになりますが、私もここに来たことがあるんですよ」

その小さな黒い背中をゆっくりと追ってくる永峰はしかし、返答をはぐらかしていた。僅かに視線を後ろに向けた未来は、警戒心が胸の内に湧き上がってくるのを感じた。

彼女が気にしていたのは、今日ここに自分がいることを永峰がどうやって知ったかということであり、訪問の目的は二の次だ。特に聞くに憚るようなことを質問したわけではないのに、どうして素直に答えないのだろう。

そして気になることはもう一つある。彼が協力企業の者を名乗っているのはリユーからも聞いていたが、一体何のプロジェクトの協力企業だというのだろうか。

「その頃から親しくしてる職員がいますね、すんなり申請を通してくれましたよ。それに、C・SOLがここで本当は何をやっているかということも、色々と聞いていますから」

続けられた言葉にも、永峰はまともに答えようとする姿勢を見せていない。加えて、C・SOLのことを色々知っているというのも引がかかる。

未来は自分から突っ込むことで望む回答を得ようと、会話の立ち位置を変えることにした。

「あれ、職場は児童養護施設の筈じゃないですか？健太くんの担当なんですよね」

「元、だと言ったでしょう。私は少し前まで、ディガル・コーポレーションの社員だったんです」

少しだけだったが、永峰が不快そうな響きを語調に混ぜてきてい

る。

ディガル・コーポレーションと言えば、健太の父親である山波勇雄も在籍していた会社である。そこに現在健太の保護者代わりとなっている永峰がいたなど、偶然とは重なるものだとも未来は素直に驚いていた。

それにしても、裏でガイアメモリを作っているディガル・コーポレーションがC・SOLで展開されているプロジェクトの協力企業だとは、露ほども思わなかった。ただ、ディガル・コーポレーションは表向きは風都で大手のIT関連会社として有名な企業であるし、他社との大きなプロジェクトに協力していても特に不審なことはい。

そうは理屈で納得できても、実際に何のプロジェクトにかかわっていたのかと言う点は気になる。永峰がこの研究施設が何をやっているか色々知っている、と話していたことから大体の予想はついていたが、彼女は直球をぶつけてみることにした。

「そうですか、失礼しました。で、何のプロジェクトの協力企業だったんです？」

「AWPですよ。もっとも、私はそちらに関連した業務をさほどやっていたわけではありませんでしたがね」

永峰の口から具体的にAWPというプロジェクト名が出たことは、嫌な予感的中したときの奇妙な安堵感を未来にもたらしていた。

未来はAWPの中核メンバーだが、今の今まで彼のことは全く知らなかった。ということは彼がAWPのコアメンバーではなく、持っている情報にも限りがあるということを示している。

それならばさほど核心に迫ってくるような、重すぎる話も出てはこない筈だ。多少注意して耳を傾ける程度で済むだろう。

一瞬でもそう考えた未来は、目の前の男が次に唇に上らせた言葉で、心臓に強い衝撃を喰らって鼓動が止まるかと思うほどのショックを受けることになった。

「そう。この研究所でどんな実験をやっているかということと一緒に

に、貴女の噂もよく耳にしましたよ。間未来さん……いえ。Prototype 3、P3。もしくは正式に、AWP実験第参号体と呼んだ方がいいでしょうか」

永峰の言い方は淡々としており、決して大きな声ではない。なのにその響きは、この緑に包まれた空間に毒の霧の如くたゆたっているかのような気さえた。風に木の葉がざわりと音を立てるとともに、未来の心にも鳥肌が立ったような心地になる。

彼の発した言葉はまるで沼地に黒く淀んだ泥のように、未来の精神にじわじわと忍び込んでいた。胸がぎりぎりとは締めつけられ、世界中から空気が半分になったかと思うほどの息苦しさが襲ってくる。彼女の呼吸はたちまち浅く速くなり、顔からみるみる色が失われていった。ドーパントに襲われた時でさえ冷静さを保っていた彼女が肩を震わせ、上半身をぐらりと傾かせたことが、精神に受けた衝撃の強さを物語っている。

「……あんた、どうしてそのことを……」

やっとのことで未来は喉の奥から一言を絞り出したが、声は哀れなほどに掠れ、震えている。

心の置き場所を崩された娘が動けなくなっているのも構わずに、永峰はゆつくりと語る口調で先を続けた。

「貴女を慕っている堀内さんや健太がこのことを知れば、一体どうなるんでしょうね？一番近くにいて親切な筈の女性が人間ではなく、実は人殺しのために作られた道具だったのだと」

「やめる！」

低い怒号が飛び、永峰の言葉が中断される。

未来は己が心を侵してくる衝撃を怒りに換え、今にも飛び掛らねばかりの敵意を込めた視線で永峰を睨みつけていた。その激しさは、大の男を怯ませるくらいの圧力を孕んでいる。

「あんた、一体どういいうつもりなんだよ。何でそのこと知ってる？そんなことをしたって、あんたには何のメリットもないだろ！」

無意識の所作なのだろう。彼女は踵を軽く上げて膝を緩め、全身

に満遍なく力を行き渡らせた戦闘態勢で身構えている。自分が肉体的には圧倒的に有利であることを熟知しているからこそその行動だ。

が、危機的状況を嗅ぎ取る能力が鈍いのか、堀内にうるたえた様子は無い。それどころか、平然と彼は言い放った。

「ありますよ。貴女にこう言えば、ガイアメモリを大人しく渡してもらえと言うメリットがね」

「……何？」

意外な人物から想定外の要求を突きつけられ、未来は眉根を寄せた。

「貴女が堀内さんから何か重要なものを預かったことは、私も知っています。まだ彼が何か隠しているのかと思いましたが、昨日見たところではその様子はなかった。ということは、貴女が持っている以外に考えられない」

そこまでヒントを与えられて、ようやく未来は「可能性がある事実」を心の中で掴み取っていた。

ガイアメモリ。

堀内から預かった重要なもの。

その二つのキーワードから導き出されたのが何であるのかに思い至り、彼女の手は自然に革ジャケットのポケットに差し入れられていた。

「まさか……」

細い指先に硬く冷たい金属が触れるとともに、緊張した呟きがふつくらとした唇からこぼれる。

つい三日ほど前、堀内がドーパントに襲われる直前に風都近くのカフェのオープンスペースで打ち合わせをした時のことである。

彼はこの懐中時計を、健太の父に繋がる重要な手掛かりとして未来に手渡していた。ただし渡されたのはケースである箱ごとだったため、その中身が何なのかは外見から判断できなかった筈だ。

そして開放空間で打ち合わせをしていたのだから、その現場にいた人間は大勢いるはずだ。その中の一人に永峰がおりそのやりとり

を目撃されていたとしても、気づけるわけがない。

何と言っことだろう。

永峰は、あの箱の中身がガイアメモリであると思い込んでいるのだ。

「違う！あの箱の中身はこの時計で、ガイアメモリなんかじゃない！確かにこれは、健太くんの父親に繋がる唯一の手がかりだけど……」

未来は慌ててポケットから風都タワーがレリーフされた銀時計を引っ張り出したが、肝心の永峰はいつの間にか身体ごとそっぽを向いていた。

「ちよつと！人が大事なことを話してるんだから、ちゃんと聞けよ！」

永峰がこちらに注意を払っていないことに語調を荒げた未来が、彼の方に一歩踏み出した。

が、彼女はそれ以上近寄ることができなかった。

冴えない中年男の様子が明らか異常であることに気づいたのだ。

彼はぼんやりと宙を睨みつけ、ぶつぶつと何事かを呟き続けている。

「健太の父は……山波英雄は、私の同僚だった」

「え？」

そこにはつきりと聞き取れる言葉を見つけたため、未来が思わず声を上げる。それでもやはり足を前に進ませようとしなかったのは、本能が危険を察知して身体の動きを抑えたためだ。

未来は便利屋という職業柄、様々な人間とかかわってきた。

小さな子どもから老人、公務員や水商売の男女、天涯孤独の若者や甘やかし過ぎた大きな子どもを持つ母親。

その中でもとりわけ扱い辛く厄介だったのが、精神に何らかの異常をきたしている者たちだった。彼らの中には人の話を全く聞こうとせず、自分の望む結末が得られなければ感情に任せて暴れたりする者もいた。

未来がそこにいないかのように振る舞っている今の永峰は、そう

いった者たちと同じ雰囲気を纏っている。迂闊に刺激してはどんな大騒動に発展するか読めないことを知っているがために、近寄るのを躊躇せざるを得なかったのだ。

「山波は、私よりも後からメモリ開発に加わったのに。サブリーダー止まりでもおおよそ権力に対して無欲だったから、奴はあそこまでの……そう、実力は私よりも遥かに上を行く男になった。息子の病を治す糸口をガイアメモリに見つけていたせいもあるが」

心なしか、永峰の握り締めた拳が震えているように見えた。

彼から漏れ出す怨嗟に満ちた呟きは小さな声ながら、耳にした者の心臓に直接手を伸ばして恐怖を植えつける毒に満ちている。

永峰を取り巻く空気が変質し、刃を思わせる鋭さと硬さを持ち始めたことに警戒した未来が、反射的に声を上げた。最早二の足を踏んでいる状況ではなくなってきた気がしたのだ。

「ちよつと、永峰さん？」

「私はそんな奴が、ずっと許せなかった。奴め、私にガイアメモリを渡さずに消えやがった。あれは私が奴に引き継ぐまで、どれだけ苦勞して研究していたかなんて知る由もないはずだ！」

彼の口調はますます激しくなるばかりで、一向に治まる気配がない。

しかしそれでも、彼は単なる一般人だ。未来は今までこんな窮地に陥ったことは何度もあったが、いざとなれば力づくで抑え込んでしまえば良い。

自分が普通でない身体を持っていることを、彼女が改めて意識したその時である。

「私は研究者の誇りにかけて、メモリを取り戻す。他人の成果を奪った卑怯者から、必ずな！」

怒りに満ちた叫びを堀内が上げ、ズボンのポケットから取り出したもの。

「それは……！」

未来の大きな瞳が見開かれ、彼が目の高さに掲げた物体が映り込

む。

それは、昨日に翔太郎が見せてくれたガイアメモリとそっくりだった。

が、目の前の男が指先に挟んだそれは鈍く光るグレーで、骨と牙のような装飾が施された似て非なるものであり、禍々しい印象しか見る者に与えない。

「プライド
Pride」

永峰が指先でメモリのスイッチを弾くと、聞き覚えがある機械音声 that 響いた。

未来が昨日襲われる直前に聞いた声に間違いない。

彼女が止める暇もなく、永峰は首筋にメモリの端子を押し当てた。

「……！」

薄い黒の光がメモリから溢れ出し、永峰の身体を球状に包み込む。次の瞬間にはその中で人間の形をした影が膨れ上がり、ごっごつした岩肌がそのまま五体を持った身体に変化した。

未来が息を呑んでいる数秒の間に、永峰はプライド・ドーパントとなったのだ。

「さあ、お前が山波から預かっているメモリを渡せ！」

プライド・ドーパントが手を鋭く突き出し、昨日と同じ要求を叩きつけてくる。

「う、そ……こんな、こんなことって……」

未来は驚愕に目を見開き、その場から動くことができなかった。

あんなに小さなガイアメモリが人間を怪物に変えるアイテムだと聞かされてはいても、実際にその働きを目にするまでそんなものが現実に存在するなど、心の底からは信じていなかったのだ。だからこそ、今この場で目撃した光景が事実であることをすぐには理解できず、硬直した筋肉が身体を縛っていたのである。

「早くメモリを出せと言っている。大人しく渡してくれば、命までは取らん」

もう一度手を突き出されて、未来はやっと我に返った。まだ舌を自由に動かせず歯切れの悪いしゃべり方になってしまいが、それでも何とか誤解であることを説明しようと試みる。

「だ、だから……さつきから違う、誤解なんだって言ってるじゃない！あんだ、人の話を……」

「まだ白を切るつもりか。お前がそのつもりなら、殺してでも渡してもらおうことにしよう」

顔をらしく見える部分から言葉を発するが早いか、プライドは未来に鋼鉄の如き拳を振り翳してきた。

「わあっ！だから、できるわけないって言ってるんだろ！」

頭を狙ってきた一撃を避けながら、未来は必死に元人間であるプライドと話を続けようとする。だが、この一言は誤った意味をもたらし、更なる思い違いを生むだけの結果となっていた。

「できるわけがないだと？良かるう、今の言葉、後悔することになるぞー！」

プライドは手近な生け垣に手を伸ばして若い葉を箸取り取り、未来に向かって投げつけた。素早く横へ跳んだ彼女に空を切って飛んできた葉は掠りさえしなかったものの、柔らかい筈の新緑は鋭い刃物と化し、カッターナイフのように土の地面に突き立っていた。

先日も目にした、物質の硬度を変化させるプライドの特殊能力だ。……聞く耳を持つてるような状態じゃないってわけ！」

未来が舌打ちを漏らし、プライドから走って離れてから呟いた。超常現象とも言うべきドーパントの変身を目の当たりにし、膝がまだ震えているものの、動きに支障をきたすほどではない。

まさか永峰がプライド・ドーパントだとは思ひもなかった。そうと早く気がついていれば変身する前にガイアメモリを奪えたのに、自分の間抜けさがひたすらに腹立たしい。しかし戦闘になってしまった以上、この状況を嘆いたところで何も変わりはないのだ。早急な事態の収束を目指す以外に道はなかった。

それに不幸中の幸いと言うべきか、永峰は研究者で戦闘技術に関してはずぶの素人だ。ドーパントに変身したところでその穴は埋めようもない筈で、自分のペースで戦うことができれば、十分に勝機はある。

未来はプライドが様子を窺っていた数秒間のうちに冷静な普段の自分を取り戻し、考えをまとめると、再度向けられてきた攻撃を迎え撃った。

走り込んできた怪人が放つ拳をかわし、蹴りを受け止め、弾き返す。そのどれもが鋼鉄の塊相手に立ち回りを演じているかのよう、彼女の四肢に鈍い痛みを残していた。さしもの自分も、生身のまま格闘戦に持ち込むのはきついと考え始めた時である。

突然、横合いから引きつったような悲鳴が上がった。

見ると、白衣を羽織った二人連れの女性がこちらを凝視して立ち尽くしている。彼女らはC・SOLで働く一般職員だ。未来はここが会社の敷地内であることを、今の今まで失念していた。

地面に足を叩きつけた未来が跳躍し、プライドと職員の間割り

込んで怒鳴る。

「逃げる、早く！」

緊張した声が消えないうちに、彼女はプライドへ猛然と躍りかかった。瞬時に懐へ飛び込んで四肢に力を込め、打撃の一発ずつに重さ乗せるよう意識し、突きと回し蹴りの連続技を叩き込む。

ここは戦う力を持たない人間が多過ぎる。未来にとっては極めて不利な状況となりかねないことを、プライドに悟られるわけにはいかなかった。

「全く、わかりやすい女だな。あくまで他人を巻き込むわけに行かないというわけか」

しかしプライドは、未来の放つ攻撃の殆どをものともしていない。彼女が上段に放った突きを跳ね返し、あたふたと建物に逃げ込もうとする女性職員たちを追おうとした。

人質を取ろうとしている意図を察した未来が、すかさずぐりとした足元に滑り込んでくる。両手で地面を掴んで身体を浮かせ、腕だけで体重を支えた彼女は、膝を胸に引き寄せて身を縮めた。

「させるかあっ！」

叫びとともに弾みをつけ、渾身の力を両足に込めてプライドの胸板を蹴り上げる。

がん、と乗用車の事故と聞き間違うほどに重く、鈍い衝撃音が大きく周囲の空気を震わせた。

「ごあっ！」

銃撃と同じくらいの威力を秘めた、強烈極まりないカンガルーキックをまともに喰らい、プライドの巨体が濁った呻きを上げて宙を舞う。中庭の木々を突き抜けて弾き飛ばされたプライドは、十メートルは後方の地面に叩きつけられた。

しかし、動く金属の岩も同然の相手に蹴りを放った未来も、流石にただで済んでいるわけではない。両足は軽く痺れており、骨に響く痛みが残っていた。

「ったたたたたた……リユー！誰か、そこにいないの？」

ドーパントを打ちすえた衝撃が走り続けている足の痛みをぴよんぴよん跳んで紛らわし、未来は右耳につけているピアスに触れてひとりこちた。

『どうしたんです、未来？敷地内にいるんですから、携帯でも使えば……』

すると、すぐさま彼女の耳だけに聞こえるのんびりした感じの声が答えてくれた。脳に埋め込まれた装置を介した特殊通信に即、リユーからの反応があつたことに安堵して、矢継ぎ早に状況を伝える具体的な語句を紡ぎ出す。

「緊急事態発生だよ！A W P棟北の中庭で、不審者と遭遇。周囲に被害が出る可能性もあるから、交戦しながら爆発物試験場に移動する。至急、敷地内の全職員に屋内退避の通達を出して！」

未来の張りつめた調子で異常が発生したことが伝わったのか、リユーの声の印象がきびきびとしたものに変わる。

『何ですって？相手の人数は？』

「一人、だけど……」

しかし、未来は口ごもった。

事実ではあるのだが、共同研究室でリユーがぼかんとした顔をしているのが目に浮かぶようだった。

『は？……それで、武装は？』

「してない。けど」

またも正直に状況を伝えるのが申し訳ない気持ちになり、彼女の緊張していた語尾が萎んだ。

一瞬の間を置いて、呆れたようなリユーの言葉が返ってくる。

『やれやれ。丸腰の不審者如きで、いちいち騒がないで頂けませんか？貴女なら、そんな連中が何百人と束になってかかってきたところで、全く問題ないでしょうに。ビリビリでさっさと片付けて、警備員にでも引き渡して……』

「相手はただの人間じゃないんだよ！」

未来が大袈裟に騒いでいると決めつけたリユーの言葉を遮ると、

彼女は何とか説明しようと試みた。

「何て言うか……その、怪物？身体がものすごく硬くて、物質の硬度を自由に操れるって……」

『能力者というわけですか……未来、それは何と言うラノベですか？』

本当の非常時だと言うのにリユーに茶化され、未来は立ち上がるうとしているプライドから目を離さずにいながらも、つかつかとした荒い口調で返してしまった。

「ちがーう！ラノベじゃなくて、本当に襲われてるんだってば！」

プライドは落下する際に頭を打ち脳震盪でも起こしたようで、なかなか起き上がれないでいるらしい。これ幸いと、未来はリユーに説明を続けた。

「嘘だと思うなら、監視カメラの映像をみなよ！それから、私の視点カメラも」

『視点カメラは結線してないので、監視カメラを確認しますよ』
はいはいと受け流す態度を崩さないリユーの音声で、そこで未来の耳から途切れた。まだバランス感覚を取り戻していないプライドの様子を注意深く見続ける彼女を、焦りが襲ってくる。早く手を打たなければ、建物の中に入り込まれてしまう危険性がある。かと言って、まだどんな能力を隠しているか測り切れない敵に近寄るのも危険だった。

数十秒が何十分にも感じられる苛立ちに胃が痛くなり始めようかという頃、ようやくリユーの嘆息が未来の耳を打った。

『はあ……驚きました、特撮ですね。それはコスプレした変質者ではなく、本当の怪人なんですネ？』

「さつきからそうだって言ってるんですよ！」

『……不謹慎ながら、胸熱です』

恐らく今現在の映像だけでなく、永峰が変身する瞬間の録画も確認したのだろう。未来の仲間であるオタク青年は、いつもと違って恍惚とした印象のしゃべり方になっている。「特撮」などという単

語をすんなり思いつく辺り、非日常的な状況に酔っているとしたか思えなかった。

「ああもう！あんたがどう感じようが勝手だけどさ、あいつを追っ払わなきゃならないのは私なんだから！ちゃんと援護しろっての」

今一つ緊張感に欠ける司令官の楽しそうな態度に、未来は頭を掻きむしりたい気分である。が、文句はけりがついた後でまとめて並べ立てることとして、今は施設の安全を確保することが優先事項だ。『とりあえずは了解しました。職員は全員、屋内に避難させます。防弾シャッターを下ろした方がいいですか？』

しかしそこは元戦闘のプロと言うべきか、やるべきことはきちんと把握しているのがあるがたい。ようやく立ち上がったプライドを睨み、未来はリユーの提案に同意した。

「役に立つかわからないけど、一応そうして」

プライドは、物質の硬度を自在に変化させる能力を持つ。その気になればどんな材質のシャッターも破ることができる筈だ。施設内の者を盾にされないためにも、早急に倒さねばならない。

ただし、それが小型の拳銃しか持っていない今の状態で可能かどうかは不透明だ。彼女はゆっくりと足を進めながら、リユーにもう一つ指示した。

「それから、私の装備を揃えておいて。隙があつたら一度退却して武装するから」

『了解。サポートが必要なら、いつでも言うってください。視点モニターで、私も様子は逐一確認します』

以降の様子はリユーが確認し、適切に対処もしてくれるだろう。満足げに頷いた未来が、まだ頭を振っているプライド目掛けて走り出し、一気に距離を詰めた。あつと言う間に相手の懐へ飛び込んで上段を狙った突きを叩き込んでいく。

彼らが戦うのは研究棟が集まる敷地のほぼ中央、煉瓦を組み上げて作った噴水がある広場だ。ここも休憩時間には大勢の職員がくつろげる場所だが、今は半端な時間であるため誰もいない。これなら

ば、未来も思う存分に暴れられそうだった。

自分の方が遥かに素早いのをいいことに未来が突きの連打を浴びせかかると、プライドはまず防御する体勢に入ったようだった。案の定と言うべきか、彼女の繰り出す打撃すべてを受けても、プライドは全くダメージを蓄積させているように見えない。

逆に恐ろしく堅固な鎧を殴り続ける未来の拳の皮膚が擦り切れ、早くも血が滲み出す有様だ。

「さつきはよくもやってくれたな、この小娘が！」

未来の回し蹴りを腕で防いだプライドが大きく後退し、浅い噴水の縁で低い姿勢を取る。的を外した彼女の蹴りは煉瓦の柱の一本に命中し、大きな破壊音を響かせて粉碎していた。

『未来。頼みますから、施設内での破壊行為は慎んでください』

視点カメラを通じてその光景を目撃していたらしいリユーが、困ったような口調でたしなめてくる。

「不可抗力だよ。文句なら、このドーパントに言つてよね！」

吐き捨てついでに弁償の請求書も永峰に回して欲しいと思った未来だが、実はそんなに余裕があるわけではない。鋼鉄製とも言えるほどに硬度があるプライドの身体を立て続けに攻撃していた手足は、骨にこそ異常はないだろうが、痣ができ内出血くらいは起こしているだろう。

いくら何でも、生身のまままで戦い続けるのは危険だった。最低でも専用武器がなければ無事なままで凌ぐことは困難に思えたが、ここまで誰かに武器を届けさせることは避けたかった。

「大型のキャタピラロボットは、まだメンテナンス中だっけ？」

『申し訳ないですが、アサルトライフル本体を運べるものが他にないですね……高周波振動ナイフならいけると思います』

未来はリユーとの特殊通信を続けながら、内心で舌打ちした。確かに高周波振動ナイフならプライドの硬い外皮を切り裂けるだろう。しかし、身体に刃が触れた時に刀身の硬度を変えられたら、ナイフそのものをたやすく折られてしまう可能性の方が高い。確実に反撃

するには、やはり飛び道具が欲しいところだった。

「何をぶつぶつ言っている？さっきのお返しをさせてもらっぞ！」

リユーと話すため未来が一旦間合いを離れた間に、プライドが噴水へ右腕を突っ込んだ。

「うっそ……何あれ」

鋼の鎧に全身を守られたドーパントが腕を掲げると、未来の唇から驚きの呟きが漏れた。

プライドの右腕が、陽光を反射してきらきら光っている。目を凝らしてよく見ると、黒っぽい外皮が光の膜を纏い、薄いそれは指先から一メートル程度先まで、細長い形を取り突き出していた。先端が鋭く尖った形は、まるで西洋剣のようだ。

『あれは……水、ですかね？』

「水？」

プライドが物質の硬度を操る特殊能力を持っていることを思い出した未来は、特殊通信に乗ったリユーの一言を受けてすぐ勘づいた。プライドは水の硬度を上げた氷状のものを右腕に纏い、剣の形を持たせているのだ。

未来の表情が陰しさを増す。

元が水とは言っても、その刃は硬度と鋭さ次第で強力な武器となる。その上破壊に成功したとしてもすぐに再生されてしまうし、別の物質で同じように武器が作り放題ということだ。考えていたよりもずっと厄介な能力ではないか。

「どうした？まさか、私のこの力が手強いと今更気がついたのか！」

嘲りながら、プライドが透明な刀身を振りかぶってきた。

凶星を突かれた未来であつたが、敢えて何も言い返さないことにする。プライドの素早さはさほどでもないため、斬撃を避けるのは容易だったが、目標を途中で見失った剣は先に未来が砕いたのとは別の柱に当たり、一抱えもあるそれを真つ二つに切り裂いていた。断面が滑らかなところを見ると、恐ろしいまでに研ぎ澄まされた剣であることがわかる。

確かに脅威となるほどの威力を持った武器だと言えるだろう。

「そもそも、当たらなければどうってことはないんだよ！」

叫んだ未来は既にプライドの背後に回り込み、渾身の回し蹴りを黒光りする外皮に炸裂させていた。敵がバランスを崩したことを確認し、すかさずシオルダーホルスターから拳銃を抜き放つ。

「ぎゃっ！」

前方につんのめったところへ更に鉛の銃弾を撃ち込まれ、プライドが奇声を上げた。

だがその巨体は倒れたり、転んだりはずせず、ただよろけただけである。

プライドは未来の素早さについていけず、未来はプライドに決定的なダメージを与えられずにいる。それは戦いの素人であるプライドの方でも、もう勘づいていることだろう。どう考えても、短時間で決着をつけることは困難になりつつあった。

あの翔太郎とフィリップが変身する仮面ライダーなら、この程度の相手など簡単に叩きのめすことができるのだろうか、ふと彼女は考えた。餅は餅屋と言う諺の通り、素直に彼らを頼るのが賢明だったということなのだろうか？

『膠着状態になりそうですね。武装警備員の応援を呼んだ方がいいかも知れません』

リユーが提案してきて、思考が中断される。

未来は答えない。未知の力を持った怪人を相手にしているこの戦闘に、なるべく一般人を巻き込みたくないというのが本音だった。

「おのれ、ちょこまかと鬱陶しい小娘が……」

「あんたこそ、私を脅しても無駄だってわかったでしょ。ガイアメモリは諦めて、おとなしく撤退しろ。デザートイーグルで撃たれたんじゃないことに、感謝するんだね」

一向に目的の人物を追い詰められないことに歯噛みしているプライドヘグロツクの銃口を向けたまま、未来が強い命令口調で言い放つ。

「黙れ！その生意気な口を、二度と叩けないようにしてくれる！」
未だ少女の面影を残した若い女に見下されたのが気に食わないのか、プライドが吠える。ここは敵が後ろ向きに考え始めた今、少しでもダメージを蓄積させるべきと踏んで、未来は積極的に挑みかけることにした。

「できるもんならやってみるよ……って、わあっ！」

猛烈なチャージをかけるべく突進しかけた未来の勇ましい言葉が、途中から素っ頓狂な叫び声に変わった。

一体何が起こったのか、咄嗟には把握できなかった。足元にぽっかりと大穴が開いて垂直に落下したかのように、目の高さが突然一メートルは低くなったのだ。

それだけでなく、野性動物を凌ぐ脚力を誇る両足が何かにがっちりと絡め取られているのか、びくともしない。

驚いて下を確かめようとすると、信じ難いことが起きていた。

地面にほっそりとした腰から下までが完全にめり込み、今もじりじりと沈みつつあったのだ。彼女がすっかりグロックを放り出してしまったことも忘れ、慌てふためきながら脱出しようともがいても支えにすべく力を入れた手までもがずぶずぶと沈んでいく有様だ。
「ななな、何これええ！」

すっかり動転した未来が悲鳴を上げる。まるで自分がいる周囲だけ、底なし沼になったようだ。必死で足を動かさなければ今にも胸まで地面に沈みそうで、全く這い上がることができないのである。
「肉体的には無敵を誇るお前も、こうすればただの人間と変わらないなということだ」

嘲笑を浮かべているらしいプライドが、地面に半身を埋めて無様にもがく未来に歩み寄って水の刃を鼻先に突きつけた。

彼女は、プライドの能力が「触れた物質の硬度を変化させる」ことだと理解し、物理的に接触した場所にしか影響が及ばないものだと思っていた。それが正確には「一定の範囲において自在に物質の硬度を操れる」ことだったのだ。

とんでもない勘違いをしていたことを、認めざるを得なかった。

「く……」

目の前の切っ先とプライドのずんぐりした姿とを交互に見やり、未来が呻く。水の剣を掴んで敵を引つ張ることも考えたが、石柱を切り裂くほどの鋭利な刃だ。下手に触れれば、指が切断されかねなかった。

「貴様の方が諦めて、ガイアメモリを渡すがいい。それとも、そのまま生き埋めにされたいか」

「……不可能だ、つつてんでしょ」

無然としたままプライドを睨む彼女は、それでもまだ諦めていなかった。最悪、腕一本を犠牲にすることになるかも知れなかったが、その程度で済むのならまだましだ。持ってもいないガイアメモリを持つているから助けると偽って交換条件を出したとしても、相手は正気を失っているのだ。逆転できる保証はどこにもない。

自分が圧倒的に優位な立場にいるとプライドが思い込み、油断している今のうちに何とか手を打たねば――

未来が齒軋りを抑えつつ思った時である。

「ぎゃあっ！」

勝ち誇っていたプライドが突如、濁った叫びを漏らして吹き飛ばされた。同時にその岩の如き身に幾つもの光が爆ぜ、数えきれないほどの火花が散ったのを、未来の大きな瞳が映す。

プライドの身体を狙って飛んできたかに見えた光の束は、上空から降り注いでいた。

仮面ライダーWが携える、トリガーマグナムの光弾であった。

二人 - 正確には三人の仮面ライダーが上空から見たのは、ドーパントと思しき異形の眼前で、若い女が胸から下を地面にめり込ませているという奇妙な光景だった。

ハードボイルダーの後部を換装し、圧倒的な推進力を得て空を飛ぶハードタービュラーのボディに立つWは、翔太郎が咄嗟にトリガーフォームにチェンジを図っていた。彼がトリガーマグナムから放った光弾は、ほぼすべてが狙い変わらずプライドに命中してくれたようだ。

プライドが悲鳴を上げて仰け反った様子は、男たちに攻撃の機会が早くも訪れたことを伝えている。

「奴は俺に任せろ。お前たちは、彼女を頼む！」

それ以前に差し迫った状況であることを一目で悟ったのは、流石に経験を積んだ刑事だと言えるであろう。深紅に輝く身体 of 仮面ライダーアクセルは振り返らずに言葉を残して、まだ宙を疾走し続けているハードタービュラーから地面に向かって飛び下りた。

「よし。一度、こっちへ彼女を引き上げよう」

照井は土の地面へ見事に着地し、早くもエンジンブレードをプライドに振り翳している。頷いたWの半身であるフィリップが、両手に新たなメモリを挟んでスイッチを入れた。

「LUNA！
ジョーカー」

「JOKER！」

聞き慣れたガイアウイスパーが空にかすかな残響を乗せた直後、Wの腰に装着されたドライバーへ輝くメモリが滑り込んでいく。

「LUNA！
ルナ

「JOKER！
ジョーカー」

連続したガイアウイスパーとともにWの全身が輝き、サイクロン・トリガーからルナ・ジョーカーへとフォームチェンジした。

「つかまれ、未来！」

身体換装が完了したことを感触で確認した翔太郎は、遙か下方で今だ身動きが取れないでいる未来に向かい、右手を突き出した。幻想を司るメモリの力を得て黄色に輝く右腕がゴムのように伸び、地面から突き出た未来の上半身に勢いよく絡みつく。

「きゃっ！」

投げ縄で括られた羊さながらに半身を強く上に引つ張られ、未来が思わず悲鳴を漏らした。瞬時に即席の底なし沼から空中に吊り上げられた細身の身体が、低空で滑空してきたハードタービュラーに受け止められる。彼女は猛スピードで空を舞い続けるハードタービュラーの慣性によろけながらも、Wの隣にしっかりと足を踏ん張って着地した。

「左さんに……フィリップくん？」

「ああ。危なかったな」

昨日姿を目にしたばかりだが色が全く異なるWの顔を、未来が確認するように見上げてくる。翔太郎が表情を浮かべられない顔を頷かせると、彼女はようやくほっとしたようだった。

「ありがと、助かったよ。だけどこの腕はキモい」

安心ついでにもう余裕が出たのか、未来はWの輝く腕をしげしげと眺めた後に低い声で言った。早速の憎まれ口を耳にした翔太郎が、思わず彼女を支える腕を離してしまいそうになる。フィリップが慌てて押さえなければ、未来はハードタービュラーから振り落とされていただろう。

「あん？助けてもらったくせに、いちいち文句言っな！それにいくらタフだからって、女に無茶は禁物だぜ」

「全く。無茶は翔太郎だけで十分だ」

「うるせーよ！」

未来をたしなめた翔太郎にフィリップも同意したが、二人の意図するところは異なるようで、Wの中で二つの人格が軽いじゃれ合いを演じている。傍からは随分器用な真似をしているように見えるW

に、未来は疑問を投げ掛けた。

「それにしても、どうしてここがわかったの？」

「あんたは並みの男じゃ手に負えないじゃじゃ馬だからな。見張りをつけといて正解だったってわけだ」

翔太郎が視線を宙に走らせると、その隅に大きな昆虫の形をした影が映り込んでくる。

フィリップの母であるシユラウドから託されたメモリガジェットの一つ、スタッグフォンが役目を終えて手元に戻ってきたのだ。これは、目標を定めておけば追尾して逐一情報を知らせてくれる機能を持つ優れたツールで、今や翔太郎の探偵業には欠かせない。これで昨日の夕方から、こっそりと未来の周囲を見張っていたのである。未来はしかし、翔太郎から暴れ馬扱いされたことに慥然とした顔で抗議した。

「じゃじゃ馬って誰のこと？あんたこそ、いちいち言多いんだってば！それに、あれは誰なの？仮面ライダーって、一人じゃないわけ？」

彼女が地上でプライドと既に戦闘状態に入っている赤いアーマーを纏った姿を見やると、今度はフィリップが答えた。

「彼は風都を守るもう一人の仮面ライダー、アクセルだ。照井竜の変身した姿だよ」

「え？照井って、昨日いたあの人だね。へえ、あのむっつり刑事^{デカ}が……」

部下から鬼刑事と畏怖の念を込めて呼ばれている照井がむっつりと評されたことに、翔太郎とフィリップは含み笑いを隠せない。表情が見えなくて助かったというのは二人に共通した考えだったが、アクセルの援護には一刻も早く入らねばならなかった。

「早く僕たちも行かなければ……飛び下りよう。しっかりつかまって！」

フィリップはプライドがアクセルの応戦に手一杯であることを確認し、ハードタービュラーを低空へと降下させた。未来に危険がな

いよう片手で身体を支えてやり、ハンドルから手を離して車体を蹴る。

Wと未来は膝を使つて着地の衝撃をうまく逃がし、C・SOLの敷地にゆつくりと立ち上がった。

「未来、あんたは早く建物の中に逃げろ」

翔太郎の声に促された未来が素直に頷き、仮面ライダーたちに背を向けて走り始める。背後を二人のヒーローがしっかり守ってくれる安心感があり、彼女は脇目も振らず目的のAWP棟へ疾走した。仲間が危機を脱したことを確認したらしいりユーが、安堵の溜め息をつきながら未来に音声を送ってくる。

『ヒロインのピンチにヒーローが登場ですか。まさに王道とはこのことで』

「誰がヒロインだつての！けどまあその通りかな、今のところはね」
声に出して答え、ポニーテールの長い髪を揺らし、未来は走り続ける。その幼さが残る顔に悪戯っぽい笑みが浮かんでいることを、Wとアクセルは知る由もない。

「また貴様か！どいつもこいつも、私の誇りを傷つけるような真似を……」

アクセルに続き突如現れたWへ、プライドが怒気を露にして吐き捨てる。

紅き鎧に守られたアクセルが持つエンジンプレードは切れ味が鋭いだけでなく、その重さで鈍器としての破壊力も持つ恐るべき武器である。斬りつけられたダメージは少なくとも、喰らった分だけ響いた衝撃はプライドの身に確実に蓄積され始めていた。

「お前は風都で発生している器物損壊、及び傷害事件の容疑者だ。観念するんだな」

「それ以前に……俺たちは仮面ライダーだ。自分勝手な理由で人を傷つける奴を、許すわけにはいかねえ」

エンジンプレードの剣先を一度下ろしたアクセルの横にWが進み出て、自らの矜持を口にした。

役者は揃ったのだ。

Wの中で翔太郎とフィリップが声を合わせ、黒い左手の指先を徐にブライドへと突きつける。

「さあ――お前の罪を数えろ！」

海風に二人の重なった台詞が乗り、余韻が消えないうちに仮面ライダーたちが猛然と走り出す。

先に攻撃態勢に移ったのはアクセルだ。三〇キロの重量があるエンジンブレードを軽々と両手に構え、敵を叩き斬らんと振りかぶる。当然、対するブライドも黙って斬られはしない。先に未来へ突きつけた水の剣をアクセルの斬撃に合わせて振るい、正面から受けて立った。

しかしドーパントとはいえ、元は普通の人間だ。アクセルが立て続けに繰り出す攻撃に、たちまち防戦一方へと追いやられていく。ブライドは堅固な外皮を持つドーパントのため、刃が激突しても火花を派手に散らすだけだが、重ねられていく衝撃はいつまでも耐えうるものではないのだろう。アクセルの動きを追い、攻撃を防ぐ水の刃の構えにも焦りが垣間見える。

アクセルは二年前から仮面ライダーとなり、今や歴戦の戦士となっていた。その彼の前では、ドーパントになって日が浅い者の稚拙な戦闘技術など砂の城も同然なのだ。

「おい、お前の相手はアクセルだけじゃねえぞ！」

と、横合いから律儀に声を上げて、Wが左の拳を叩き込んだ。

「痛つてえ！」

攻撃がまともにブライドの上半身を捕らえた途端、翔太郎が叫び声を上げて黒い腕を引っ込めてしまう。アクセルが得物でダメージを与え続けていることに、つい素手でも攻撃が可能な気がして打ち込んでしまったのだ。試しに、蹴りと突きを織り混ぜた連続攻撃を喰らわせてみる。

「邪魔だ、どけ！」

やはりそれも殆どの威力が削がれてしまっているようで、アクセ

ルとの斬り合いで必死になっているプライドにいとまやすく振り払われてしまった。

「やはり素手では無理なようだ。こちらで打撃ダメージを追加できる武器を持とう」

「ああ、わかつてる！」

フィリップの提案に頷いた翔太郎は素早くドライバーからメモリを抜き取り、新たなそのスイッチを叩いて滑り込ませた。

「ヒート
HEAT！」

「メタル
METAL！」

ガイアウィスパーがドライバーから溢れ、Wの姿が金属光沢を放つヒート・メタルのフォームに一瞬で変わる。同時に手元に出現したメタルシャフトを両手に構え、Wは再びプライドとの距離を詰めた。

Wの装備する武器の中でも高い攻撃力を誇るメタルシャフトが一闪され、強烈な打撃がプライドの肩に打ち込まれる。

「ぎゃっ！」

濁った苦鳴がと重量感を伴った衝撃音がドーパントから上がったのは、メタルシャフトが期待通りの効果を上げているからだろう。自らの攻撃に確かな手応えを覚えた翔太郎とフィリップがWの内で呼吸を合わせ、苛烈な連続攻撃を組み上げていく。

二人の精神と二つの色を持つWの猛攻が始まった。身の丈よりも長いメタルシャフトを振り回し、払い、突き、打ち込み、見事な技の連携をアクセルと共に敵へと浴びせていく。火花を散らしながら重い音を響かせ、金属の輝きを全身に纏って戦う彼らの姿は、陽光を跳ね返し、動きある複雑な旋律を風の中で奏でていた。

「おのれ！舐めるなよ、若造どもが！」

二人の仮面ライダーが放つ攻撃の雪崩に叩き込まれたプライドが、怒りに任せて吠えた。「プライド」のメモリの力に精神を飲まれているだけあって、誇りを傷つけられることが何よりも腹立たしいのだろう。堅固な外皮も、恐らく心を守る力の象徴として出現してい

るに違いない。

しかし二対一の戦闘で不利なことはわかっているだろう。プライド・ドーパントは背後に迫っていた噴水に左腕を突っ込んで水飛沫を跳ね上げると、新たな装備を一瞬で作り上げた。

「……水の盾か」

アクセルが眩き、新たにプライドの左腕に装着された円盤状の板に注意を向ける。

プライドが持つ水の剣は、どんなにエンジンブレードの攻撃を止めても欠けることがなく、折れてもいない。それと同じ強度を持つのだとしたら、少々厄介だった。

「奴の回避力が少し上がった程度だ。別に恐れることはない。それに、ただでさえ高い防御力を今更上げようとしているのは、もう僕たちに勝てないと自分から宣言しているようなものだ」

プライドは新たに作り出した装備で敵を攻撃して逆転を図るのではなく、自分がこれ以上傷を負わないようにして切り抜けようとしている。即ち、心理的には既に負けていることを認めているのである。隙あらば逃げようとしているのだと見ていいはずだ。

的確な相棒の分析に、翔太郎が意識の中で頷く。

生身の人間にはとても扱えない重さを持つ武器をバランス良く握り込み、Wが構え直した。

「ふん。いくら物質の硬度を操るとは言っても、所詮は戦いの素人ってことだ。照井、一気に決めるぞ！」

「ああ。こいつに全て吐かせるのは、取調室でだ！」

Wの傍らでアクセルがエンジンブレードを振り上げ、今度は二人同時にプライドへ挑みかかる。

プライドは背にしていた噴水から遠ざかると、左腕の盾でエンジンブレードの斬撃を受け止め、右腕の剣でメタルシャフトの打撃を弾き返した。一旦身を守ると決めたらその方向に集中できるのか、アクセルとWが勢いをつけて攻撃の連携を図っても、なかなかその防御を崩すことができない。

二方向から襲ってくる攻撃を別々の方向へ逸らすことに成功しがプライドが、更に素早く後ろへと退く。かと思うと、二人の仮面ライダーに背を向けて走り出した。

「やはり逃げるつもりか。しかし、そうはせん！」

距離を離しにかかっているのが明らかなプライドへ迫らんと、アケセルが土の地面を蹴って走り出す。

「翔太郎、逃がすな！」

「当たり前だ！」

予想よりも早く逃走に移り、しかもかなりの脚力を持っているらしいプライドの姿はたちまち小さくなっていく。慌てたフィリップが叫ぶとほぼ同時に、翔太郎はルナメモリを取り出してスイッチを叩いていた。

「^{ルナ}LUNA！」

Wが稼働状態になったメモリを素早く差し替えて、ハーフチェンジを試みる。

翔太郎は右半身が黄色に輝き、ガイアウイスパーの響きが残っているうちに、メタルシャフトが独特のしなりを持ち出したことを確かめた。ルナフォームの力を与えられたメタルシャフトは長さが自在に変化する鞭となり、逃げる相手を捕らえるには最適なのだ。

「待ちやがれ！」

翔太郎が怒鳴って、逃げるプライドに狙いを定めた時である。

何の前触れもなく、全身が真下に落ちたように視界の中心がぐんと下がった。

「おわっ！」

不意に襲ってきた感覚にバランスを狂わせ、翔太郎とフィリップが上げた声が重なる。

一呼吸するいとまもなく、今度は左右で色の違う肘が地面に当たった。いや、肘が当たったと思ったら、そのまま硬さを失った地面に腕がずぶずぶとめり込んでいく。今やWは身体の半分以上が地面に沈み、胸から上だけが突き出ている状態になっていた。まるで深

い沼で溺れ、沈みかけている様子さながらである。

「くそつ、こいつは……！」

Wが必死に土中の足をばたつかせて浮上しようとするが、いやらしい粘りがある地面に足首が絡め取られ、なかなかそれも叶わない。見ると、数歩離れた場所でアクセルも同じ有り様に見舞われていた。Wよりも重量があるアクセルは沈み行くのも早いようで、既に肩口の辺りまでが見えなくなっている。

二人の仮面ライダーは辛うじて武器を落とさなかったものの、今や頼りになる筈の装備ですら、突如として現れた底なし沼からの脱出を阻んでいた。

「私の邪魔をする者は、全員地の底で溺れ死ぬがいい！」

それでも何とかこの状況から逃れようとともがく二人に、大地にしっかりと立っているプライドの哄笑が響く。

彼らを巻き込んだ死を呼ぶ沼は、プライドが未来に迫った際に作り上げたのと同じものであった。

が、Wとアクセルを飲み込んだそれは大きさが全く違っていた。

プライドの能力が先に出現させた底なし沼は、せいぜい直径が二メートル程度しかなかった。一方今現在のそれは、どう見ても二十メートル以上の範囲に影響を及ぼしているとは思えない。ここから逃れたければ、頭まで没する前に身体中に纏いつく泥状の地面を移動するしかないのだ。

「くそつ！」

アクセルが吐き捨てて上に這い上がろうとするが、何しろ体重を支えてくれる地面が手の届く範囲に存在しないのである。溶けかかったソフトクリームのような地面で両手両足を使い、生き埋めにならないようにするだけで精一杯だった。

「畜生、これじゃ奴に時間を稼がせるだけだ！」

Wの中で翔太郎が齒軋りを漏らすが、少しでも手足の動きを止めれば地面に飲み込まれることは必至で、とても攻撃やフォームチェンジする隙がない。この地形を作り出しているプライドがある程度

離れば元の地面に戻るかも知れないが、それではもう遅いのだ。

このまま、みすみす敵を逃がしてしまうのか！

二人の仮面ライダーが、敵の能力を甘く見ていた己に対する怒りと後悔の念に支配されかかる。

が、それがまだ早かったことを、彼らは数瞬の後に知ることになった。

大地があるべき姿を取り戻しかけ、人間を取り込むのを思い止まったかに見えたその時、プライド・ドーパントは一発の銃声とともに弾き飛ばされたのである。

銃声というよりは、破壊音が衝撃音と言ったほうが相応しいだろうか。辺りの空間をとてつもなく重い鈍器で殴りつけ、激しく揺さぶった音は、それほどにまで大きかった。

「お……のれ、何者だ！」

軽く数メートルはあらぬ方へと吹っ飛ばされたプライドが、呻きながら立ち上がるとする。

あの発砲音の大きさと、かなり大型の銃器で弾丸を撃ち込まれたのは確実だ。それが命中したのに、まだ起き上がるとするプライドの頑丈さとしぶとさは、今まで仮面ライダーたちが倒してきたドーパントの中でもトップクラスだろう。

そこへ再び射撃音が響き、プライドの上半身から大きな火花が迸った。

「ぐわあっ！」

立ち上がったところにまた鉛弾を叩き込まれ、灰色のドーパントは仰け反りながら更に後ろへもんどりうった。

土中に全身の八割が没していた仮面ライダーたちが、地面の硬度が戻ってきたことに気づいたのはその時である。手足の動きを止めても、それ以上は身体が沈まなくなっていたのだ。

「翔太郎、今のうちにハードタービュラーを呼ぶんだ！」

Wの中でフリリップが叫ぶ。

彼の呼びかけに呼応して、付近に潜んでいたスタッグフォンが飛来してきた。今度は自然な硬さを取り戻しつつある地面に腕をがちりと捕捉されそうになっていたが、力づくで右腕を引き抜き小さく旋回するガジェットを掴み取る。

上空で待機しているハードタービュラーを呼び寄せるコードを素早く打ち込むと、数秒もしないうちに聞き慣れたエンジン音が接近してくるのがわかった。滑空してくる機体を確認したWがメタルシ

ヤフトを突き出し、ハードタービュラー本体へ鞭と化した武器を勢いよく巻きつかせる。

速度を落とさずに飛翔するハードタービュラーは、命綱を絡ませた主人の身体をいともたやすく土中から空中へと引き抜いた。

「照井、つかまれ！」

そしてハードタービュラーから吊り下げられた状態で、Wはアクセルも救出するつもりだった。

仲間である翔太郎の叫びに、まだ地面から抜け出せないでいたアクセルが手を伸ばす。猛スピードで飛び続けるマシンに揺られる不安定な態勢でいながらも、その紅く輝く腕をしっかりと掴み上げたのは、長きに渡って共に戦い続けてきた男同士ならではの呼吸と言えるだろう。

勿論、変身し超人となった身は決して軽いとは言えず、二人分の体重を支えねばならないWの負担は大きい。普通の人間であれば腕が抜けるほどの衝撃と重量に襲われながらも、何とかプライドの能力の影響がないであろう地表までの距離を堪える。

彼等がマシンの慣性に負け、プライドの遙か後方へ引きずられるようにしか着地できなかったのは、無様だと責めらねばならないものではない。

「いつてて……カッコ悪い」

ところが、決めるべきところを決められないのはハードボイルドの流儀に反すると考える翔太郎は、無意識のうちにぼやいていた。メタルシヤフトを元の棍状に戻して立ち上がると、同じようにアクセルも立ち上がったところだった。彼は小さな呻きは漏らしていても、特にきまりが悪そうな様子はない。

「無事か？照井竜」

歩み寄るWの中からフィリップが声をかけると、アクセルが頷いて見せる。

「ああ。しかし、さっきの銃声は……」

そこへ、また先と全く同じ銃撃音が轟いた。

刑事である照井も銃を持っているが、警察に籍を置く者が携帯を許されている拳銃とは、音の質も大きさも桁違いだ。空そのものを突き破るような衝撃音は、少し離れた場所からであれば雷鳴と聞き間違いかねないほどである。

「おい、あれは……」

いつも冷静な態度を崩さないアクセルが、珍しく驚きを隠さずに言葉を途切れさせた。

尋常でない仲間の様子に、Wも同じ方向へ視線を向ける。

そこには足元を狙われたらしいプライドが体勢を立て直す姿と、その数十メートル先にぼつんと黒い人影があるのが判別できた。よく見るとその人影は、小柄な者の身の丈ほどもあるアサルトライフルを抱えているように見える。

それだけではない。

かの姿は、Wやアクセルと同じく異形であつた。

肌が出ている場所はどこにもなく、全身が黒に近い蒼の鈍い輝きに包まれた、鎧のようにも見える立ち姿。頭からは細い角が後方へ四本突き出しており、一見したところは精巧に作られた人型ロボットのようにも見える。しかし油断なく構えている姿勢にはどこことなく人間臭さが滲んでおり、全てが人工のヒューマノイドが動いているとは思えなかった。

そこから思い浮かんだことはアクセルもWも同じであつたが、驚愕を抑えられず口に出したのはWであつた。

「まさか……俺たち以外にも、まだ仮面ライダーがいたつてのか？」

翔太郎が発した呟きが届いているのか、仮面ライダーたちの視線の遥か先に立つ鎧姿が顔を向けてくる。

身体と同じ金属の造形に包まれた顔には何の表情も浮かべていないが、敵意や殺気は感じられない。それどころか、プライドに向けて構えていた巨大なアサルトライフルの銃口を下ろして頷いてさえいる。後は任せるから今のうちに攻撃しろと、促しているようにも見えるのだ。

考えてみれば、あの正体不明の誰かがプライドに発砲して脱出するための隙を作ってくれたのだ。今の段階では、少なくとも敵ではないだろう。

「今は奴の正体よりも、プライドを倒す方が先決だ」

「……そうだな」

あの蒼い鎧姿についてあれこれ詮索するのは、後でいい。フィリップの言葉に、翔太郎は我に返っていた。

改めてWがプライドに向き直る。プライドは高い防御力を誇る厄介な相手だが、あの巨大な銃器の弾丸を複数喰らって、それが効いているのだろう。明らかに浮き足立っているのは、二方向に気を配る余裕がない証拠だ。

とは言え、下手に接近してまた地面を底なし沼にされるのも厄介である。それにあの硬い身体へ確実に攻撃を叩き込むなら、物理攻撃では埒があかない。そうなると、取るべき手段は自然と限定された。

「奴の硬い外皮を通して直接ダメージを与えるには、実体を持たないもので攻撃するのが一番有効だろう」

「奇遇だな。実は俺も、そう思ってたところだ」

離れた場所から、決定打となるメモリブレイクを喰らわせるためのベストフォーム。

意見を一致させたフィリップと翔太郎は、新たなメモリを掲げてスイッチを弾いていた。

「トリガー・
TRIGGER！」

青色に光ったメモリがWのドライバーに吸い込まれると、左半身がメタルからトリガーフォームに換装され、右胸にトリガーマグナムがセットされる。他の武器に比べて小さくとも強力な飛び道具である銃のグリップを掴み、Wはドライバーから抜き取った青いメモリをトリガーマグナムのスロットに装填した。

「トリガー・
MAXIMUM・
DRIVE！」

マキシマムスロットからトリガーマグナムへとメモリの力が注ぎ

込まれ、マキシマムドライブが発動した証であるガイアウイスパーが響く。

ガイアメモリを砕くことができる、仮面ライダーにとっては最も強力であり、ドーパントにとっては最も忌むべき攻撃。

即ち、メモリブレイクである。

技を喰らったことはなくても、ガイアメモリの力が凝縮されたトリガーマグナムの銃口を見れば、ドーパントの神経を嫌でも刺激してくるのだろう。先に物理攻撃を受けていたせいもあってか、プライドは逃げようにも身体が萎縮して動くことを許してくれないようだった。

「トリガー・フル・バースト！」

翔太郎とフィリップの雄叫びとともに、幾つもの輝ける光の弾がトリガーマグナムから撃ち出された。青と黄色、二つの色を帯びた実体を持たない弾丸が交差し、やっとのことで逃げ出そうとしているプライドに恐ろしい正確さで迫る。いくらドーパントが動こうとも、光弾は獲物の後をどこまでも追っていくのだ。悪に無慈悲なトリガーマグナムは、敵に潰走を許さない。

Wが放った必殺の弾丸は、全てがプライドの身体に引きつけられるかのように命中した。

プライド・ドーパント、つまり心をメモリの毒に汚染された永峰が、断末魔の凄まじい絶叫を迸らせる。が、それも地球の力を集約するガイアエネルギーが引き起こした爆発にすぐさま消され、絶鳴はごく短く響くに終わった。

辺り構わず炎が逆巻いて破壊音が叩きつけられる中、弾かれたプライドのガイアメモリが宙へと浮き上がり、甲高い音を立てて砕け散る。

永峰の身体から力の源だったガイアメモリだけが排出され、破壊されたのだ。

今まで張り詰めていた気力が一気に失われたせいだろう。爆音の余韻の向こうで、未来に襲いかかる直前の姿に戻った永峰が崩れる

ように倒れた。

敵が力を失ったことを見届けて、ようやくWとアクセルが力を抜く。

普段の戦いであれば早々に変身を解除するところであつたが、今はまだそうはいかない。彼等は最早立つこともままならない永峰から、自分たちの背後へと視線を走らせた。

二人の目が向く先には、先と変わらず黒っぽい鎧姿が佇んでいる。しかし一旦は下げられていた巨大アサルトライフルの銃口が、再び構えられていた。

敵はもう戦力を喪失したはずなのに、と同じことを考えに上らせたWとアクセルが、黒光りする銃口が狙いを定めている方向へ視点をずらす。

そこに、予想もしなかつた光景があつた。

永峰がうつ伏している地面の手前で、明らかに人間の姿とはかけ離れた外見を持つ者が立っている。メモリブレイク時の爆発で黒くなった地を踏みしめているそれは、紛れもなく別のドーパントであつた。

「お前は、ラスト……！」

「何？」

僅かに顔を上げて新たなドーパントの姿を見た永峰が呟いたのを、Wとアクセルは聞き逃さない。

暗い紫色で歪に曲がつた手足、全身に突き出た棘という外見を持つドーパント。永峰が口にした「ラスト」は、七つの大罪で色欲を示す名だ。自分が作つたメモリのドーパントだから、永峰も正体がわかつたのだろう。

だがラスト・ドーパントは、起き上がれない永峰にとどめを刺す訳でも、仮面ライダーたちに向かってくる訳でもない。それどころか、悠然とその場にいる一同に背を向けた。

「おい待て！」

去りかけるラストを追おうと、アクセルがエンジンブレードを翳

して走り出す。

その緊迫した声に、ラストが振り返った。振り向きざまに片腕を鋭く払うと、不気味な色をした腕一面に生えた棘が一齐に爆ぜる。

空気を切り裂いて四方八方に飛ぶ硬質の棘が全て、同じタイミングで破裂した。ごく小さな手榴弾が爆発したのと同じように、無数に割れた棘の欠片がアクセルとWに突き刺さろうとする。

「うおっ！」

鋭い金属片にも似た欠片の嵐に巻き込まれた二人が咄嗟に身を引き、防御態勢を取る。数秒の後に彼等が顔を上げた時には、ラストの姿は視界から忽然と消えてしまっていた。

「……くそっ、もう新手のドーパントが現れたというのか」

ようやくプライドを倒したと思ったのも束の間、早くも「七つの大罪」メモリが産み出したドーパントが現れた事実、アクセルが苦々しげな口調を隠さずに吐き捨てた。

「しかし……ラストは一体、何のためにここに現れたんだろう」

Wの内でフィリップが疑問を口にしたが、翔太郎は既に歩き出していた。さほど急がない歩調で、アサルトライフルをもう一度下ろした鎧姿に近寄っていく。それに気づいたのか、まだ誰なのかがわからない相手もWの方へ向き直った。

側まで来てみてわかったことだが、この深い蒼の鎧を纏った者はWやアクセルより一回りは小柄で、すらりとしたフォルムのロボットを目の前にしているかのような印象を与えてくる。そのため、先から撃ち続けられているアサルトライフルが余計に不釣り合いな大きさだと思えるほどだ。

が、態度は堂々としたもので、Wの後ろからアクセルが更に走ってきてても、全く動こうとする素振りを見せない。やはりこの者が敵だとは、翔太郎にはとても思えなかった。

「あんたも、仮面ライダーなのか？」

アクセルの到着を待たず、翔太郎が掠れた声を投げかける。

すると僅かな沈黙を挟み、マイクを通したような雑音を微かに含

んだ声が、四本角のヘルメットから発せられた。

「仮面ライダーねえ……生憎だけど、そんないいもんじゃないよ」
肩をすくめてかぶりを振るしぐさの自然さと人間っぽさが、人工物の極みたる外見の対極に現れて一際強調される。

アクセルとWの動きがぴたりと止まった。無機質なロボットのよ
うな身体から聞こえた紛れもない人間の女性の音声は、確かに二人
が聞いたことがあるものだったのだ。

鈍く輝く鎧に覆われた両手がゆっくりとヘルメットに被さり、バ
イザーらしき部分を開け、硬質な頭の守りを解いていく。全身鎧か
ら顔全体の装甲が解除されてヘルメットが脇に抱えられると同時に、
長い髪がばさりと宙を舞って金属製の肩に落ちた。

「あ……」

頭の武装を解除した人物の顔を見て何か言おうとしたWであつた
が、驚きのあまり言葉がうまく出てこない。

「私は道具だよ。人を殺すためのね」

ヒーローたちの驚きと戸惑いの視線をよそに、顔を晒した人物は
目を伏せて呟いた。

ロボットの如き鎧を纏い、巨大なアサルトライフルを操っていた
謎の人物。

それは、つい先刻までドーパントに追われていたはずの未来であ
った。

幕間 - 1 -

だんだんと訪れる時間が遅くなってくる夕暮れもとつくに迫り切った、午後七時。

仮面ライダーとしての姿を持つこともあり、普段あまり風都から出たことがない翔太郎であったが、今日は久しぶりに夜を別の場所で過ごすことになっている。

電車を乗り継いで辿り着いた先にあったのは、落ち着いてはいても夜の懷に抱かれるつもりがない、人工の光が溢れる街であった。

老いも若きも、男も女も皆が小綺麗な身なりで闊歩するメインストリート。

華やかだが行き過ぎないネオンで飾られた、洒落た雰囲気を漂わせるビル。

抑え目である一方で、心から空間そのものを楽しんでいることが伝わってくる低い声の会話。

翔太郎を包む空気に満ちた街の雰囲気を作る要素の一つ一つに、大人の夜を彩るスパイスが効いている。そのどれも、風都では馴染みが浅い洗練された香りを感じさせた。

彼が向かったバーもその例に漏れず、入り口であるビルの地下へ向かう階段からして都会的な空気を纏っている。間接照明がところどころに据えられた、小綺麗な廊下の突き当たりにある木製の自動ドアをくぐると、思ったよりも広々とした空間が彼を出迎えた。

「お……」

意識せずに、吐息とともに小さな声が漏れる。

磨き上げられた黒大理石の床にはバー全体の姿が映り込んでおり、その上を歩くバーテンダーやウェイターの影も忙しげなシルエットを落としている。壁際が深みがあるブルーの照明に照らされているせいか、ゆとりを持って並べられているテーブルやカウンターに付いている客の姿はあまり目立たない。客はそこそこ多いのにざわつ

いた印象がないのは、控え目な音量でジャズが流れているのと、声が響かないよう配慮されたインテリアになっているからなのだろう。いかにも流行に敏感な若い女たちが飛び付きそうな雰囲気のお店ではあったが、どっしりとしたカウンターやずらりと洋酒のボトルが並んだ木製の棚がほどよく使い込まれており、古き良き時代を思い起こさせるところは翔太郎好みだ。

今日ここへ自分を呼んだ女は流石に同業者なだけあって、知り合ってから日が浅い人間の好みも把握するのが早い。

と、彼が感心し、近寄ってくるウェ이터の様子を見つつ愛用の黒い中折れ帽に手を伸ばしたところで、後ろから誰かにひよいと目標をかつさらわれた。

「あ！」

翔太郎が間抜けな一声とともに空を掴んだ手を慌てて下ろし、視界の隅を掠めていった帽子を追いかけると、いつの間にかすぐ後ろに未来が立っていた。

「室内では、帽子を脱ぐのがマナーだよ」

十センチ以上は上にある翔太郎の頭から取り上げた黒い帽子をくるくる回しながら、未来は側まで来たウェ이터に目配せした。長めの黒髪を後ろでまとめたウェ이터とは知り合いらしく、先に立つて奥へ案内を始める後ろ姿に彼女はそのままついていく。

「今取ろうと思ってたところだ」

「遅いっつの。取るのは店に入る前。ハードボイルドを気取りたいんだったら、立ち振舞いは完璧にしなきゃね」

女にエスコートされるのは性に合わないが、仕方なくと言いたげに従ってきた翔太郎へ、未来は帽子を返してきた。

二人が案内されたのは店の一番奥にあるテーブルで、少しだけ他のテーブルより広めの間隔が取られている。さりげなく観葉植物の鉢や熱帯魚の漂う水槽で視線も遮られるようになっており、密談に向いた配置になっているようだった。

「色々気にしてたら、折角の酒が不味くなっちまうだろ」

「あんたがあんまりごちゃごちゃうるさいと、奢ってあげないよ？それに、ここは私が覇権にしているお店なんだから。私の顔に泥を塗るような真似したら、速攻で叩き出すからね」

互いにスツールに腰を下ろし、小さなテーブルを挟んで向かい合っても、翔太郎に睨みを効かせてくる未来の強気な態度は今までと全く変わらない。恐らくそれは、これからアルコールを口にし始めてもそのままなのだろう。

この洒落たバー「テンパランス」へ翔太郎が呼び出されたのは、プライドとの決着がついた翌日のことである。窮地を救ってくれたお礼に酒を奢ると、未来から申し出があつたためだ。

が、ただ一緒に酒を酌み交わすだけと互いに考えていないのは明白で、込み入った話になることは見えている。だから、未来もわざわざこんな位置のテーブルを押さえたのだ。

「ここはカクテルが売りなんだ。何を頼んでもいいよ」

それでも、笑顔を見せながら翔太郎にメニューを渡す彼女の顔に緊張は見えない。

見慣れない洋酒やカクテルの名前のびっしりとした並びを翔太郎が眺めている間に、未来はテーブルへ案内してくれた先のウェイトーを呼んでいた。

「私、ボストン・クレーラー」

「……バーボン。ストレートで」

メニューを見ずに自分のカクテルを注文した未来に続き、翔太郎が低い声を意識して告げる。ウェイターが下がったのと入れ替わりに、彼女は驚いた顔を翔太郎の近くに寄せてきた。

「ちよつと……そんな強い飲んで、大丈夫なの？」

「カクテルは女が飲むものだ。バーボンの癖がある香りこそ、ハードボイルドな一日を締め括るに相応しいってmondaze」

視線を目の前の女からわざと外して答えた翔太郎は、いつもの調子で軽く自らの作り出した空気に酔っている。彼の上司である亜樹子がいれば反射的にスリッパを飛ばしていたのだろうが、それがな

い今は完璧に決まったと思い込んでいるのだ。

映画の主人公が口にするような気障な台詞を臆面もなく言っただけの青年に、呆気にとられた未来が大きな目をしばたかせる。彼女が二の句を継ぐタイミングを計り損ねて沈黙したのを察したのか、ウェイターはすぐに二人の酒とナッツの皿を運んできてくれた。

馴染みの店ではこういったことに融通が利くのがありがたいと、未来はその心遣いに感謝してグラスを掲げた。そうでなければ、自分もあの「女子中学生」所長の如く突っ込みを入れていたに違いなかっただろう。

「まあいいや。助けてくれて、ありがとね」

「女を守るのも、男の仕事のうちだ。乾杯」

未来のボストン・クーラーがステアされたグラスと翔太郎のバーボンが注がれたそれが、高い音を立てて合わせられる。未来が炭酸の細かい泡が美しい、爽やかな香りのカクテルに口をつける様子を横目にしながら、翔太郎は琥珀色のバーボンを喉に流した。

途端、焼けるような刺激が口の奥を刺した。

香ばしい、と言うよりも慣れない者には焦げ臭く感じる強烈な香りと濃厚なアルコールが嗅覚の深くまで貫き、慌てて吸い込んだ空気までも、頭がぐらつくほど芳醇な風味に満ちているかのように錯覚させる。

結局翔太郎が「大人の男」に似合う酒に耐えられたのはほんの数瞬で、噎せるのを隠し切れず咳の連打に襲われた。

「……く」

気取っていた翔太郎が涙を浮かべて激しい咳に見舞われているのに、正面に座っている未来が吹き出す。店の雰囲気の手前、盛大に笑うわけにもいけない彼女は、口を片手で覆って必死に堪えていた。「おい、笑いすぎだろ！」

「……ご、ごめん……ちよつと、お腹痛い……くくく……」

咳の嵐から解放された翔太郎が顔を赤くして怒りと羞恥心を小声でぶつけるが、背伸びした物言いと本性のギャップがよほどおかし

かったのだろう。肩を震わせながら顔を伏せ、大爆笑の衝動に耐える未来の様子は変わらない。彼女は数十秒を費やしてようやく笑い声を治めると、目尻の涙を拭ってからウェ이터を呼び寄せた。

「彼にも、私と同じものを」

まだ笑いを口許に残している未来が飲んでいるのは、ボストン・クーラーなるカクテルだ。

果汁が入った甘ったるいカクテルなど男が口にする飲み物ではないと固く信じて疑わない翔太郎が、憮然とした表情を見せる。

「俺はカクテルは飲まないって言ったろ」

「まあ、そう言いなさんなつて。ガムシロップは入れずに甘さは抑えてるし、男の人の口にも合うよ。カクテルって言ってもラムベースだから、それなりにアルコール度は高いしね。ここは私の顔を立てると思つて」

未来は嫌味で言っているのではなく、あくまで翔太郎を宥めようとする穏やかさが窺える口調である。それに彼女が言う通り、自分は招かれた身なのだ。たまには女の顔を立ててやるのもまた、ハードボイルドに要求される懐の深さであると言えよう。

もつとも、ウェ이터が翔太郎の意見を最初から聞くつもりとしていなかったのには多少不満が残つてはいたが。

不承不承ながらも翔太郎がそれ以上の文句を口にせず未来との話を続けていると、ほどなく彼の新しい、背が高いカクテルグラスが運ばれてきた。好き好んで甘いカクテルを飲んでいるわけではないと無言の主張を顔に表しつつ、翔太郎が薄いグラスの縁に唇をつける。

すると、意外さで彼は目を見開いた。

ジンジャーエールにレモンを加えたささやかな酸味にしつこくない自然な甘さが加わり、それでいてしっかりとラムの風味も効いている。あまり名前を聞いたことがないカクテルだったが、これなら甘さが苦手な男の舌にも十分合うものだと言えた。

「どお？」

翔太郎の反応から答えは見えているだろうが、未来がいたずらっぽく微笑みを浮かべて聞いてきた。

「……正直、美味い」

「でしょ。良くないよ？食わず嫌いは」

素直な翔太郎の答えに満足気な未来が軽く頷くと、今日は下ろしている長めの髪がさらりと音を立てた。

こうなってからやっと、互いに落ち着いて話ができる状態になったと自覚できたのかもしれない。翔太郎は更にボストン・クーラーを一口すすって喉に残るバーボンの香りを流してから、未来の大きな黒い瞳をとらえた。

「で、俺に何か話があるんじゃないかねえのか。わざわざこんなところに呼び出してるんだからな」

「ん。まあね」

すると、今度は曖昧に答えた未来がハーフボイルド探偵から視線を逸らす。一秒にも満たない間だけ褐色の粒がひしめくナッツの皿に目を落としてから、彼女は呟くように言った。

「驚いたよね？私のあの姿」

顔を上げた未来の言い方に感情は込められていないが、その態度は翔太郎の出方を見る姿勢になっている。

それも無理からぬことであった。

昨日C-SOL内部でプライドと戦闘になり、あわや敵を逃してしまうというところで咄嗟に助けに入ってきた彼女は、仮面ライダーと見紛うばかりの姿に変貌しており、自らを「人を殺すための道具」と称した。その後手短かに語られた話で、彼女が極秘の軍事プロジェクトによって生み出された改造人間だという信じ難い事実が明かされたのだ。

改造人間、言い換えればサイボーグである。

架空の世界にしか存在しないはず、たとえ実在したとしても遠い将来の世界にのみ認められるとばかり思っていた者が今日の前で酒を飲んでいるなど、翔太郎は未だに実感が湧かなかった。だが、考

えてみれば自分たち仮面ライダーもまた、常識だけでは説明できない異物のようなものだ。それならば、現代科学の粋を集めて作られたという未来の方がまだ、存在そのものに説得力があるだろう。それに未来が持つ人間離れた戦闘能力についても、戦いに特化した身体に強化されているからだと言われれば納得がいく。

と、理屈でわかつてはいても、翔太郎の感情はクラス委員よろしく偉そうな口をきく若い女がサイボーグだということを、そう簡単に飲み込ませようとしてくれなかった。

その困惑した心を見透かすように、未来は翔太郎の顔からじつと視線を動かさない。彼は変に隠すことはせず、思ったままを言葉にした。

「……まあな。今でもまだ、ちょっと信じられないくらいだ。あんたが、その……サイボーグだなんて」

「それは、仮面ライダーのあんただってそうでしょ。左翔太郎」

やはり考えていたことは同じようで、幼さが残る顔に不似合いなほろ苦い笑いが、同じ酒をあおる未来の口許を横切っていく。少しだけ頬を上気させ、彼女は翔太郎が予想していた相談を持ちかけてくる素振りを見せた。

「頼みがあるの」

「……あんたの正体を他言するなってことだろ。心配するな。訳ありの身なのはお互い様なんだからな」

「ありがと。流石に、話が早いね」

バーの店内を流れるゆったりとしたジャズの調べに、似た者同士の男女の低い声が溶け込んでいく。

未来は翔太郎の嘘をつけない人柄を見抜いているのか、心底安心したような溜め息を漏らしていた。

「『A W P』、『間未来』、『プロトタイプ3』。この三つのキーワードで調べてみなよ。私の口から説明するよりも、客観的な情報の方が信頼できるでしょ」

長い髪と僅かな顔の皮膚だけを露出させた未来が仮面ライダーたちに託したのが、この言葉である。未来が去ってからすぐに風都へ戻った翔太郎たちは照井が取り調べが終えるのを待ち、深夜に調査を行っていた。

とは言っても、実際に「地球の本棚」に入れるのはフィリップ一人であるが。

「検索を始めよう」

留守番に徹していた亜樹子を加えた仲間たちが見守る中、いつもと同じように意識を集中させて真っ白な空間に意識を飛ばした天才少年が、教えられた三つの手がかりを口にする。

「キーワードは『A W P』、『間未来』、『プロトタイプ3』」

地平線の消失点から雪崩のように迫り、形を変えていく本と本棚が通り過ぎていく傍らで、フィリップは未来の思い詰めたような表情を思い出していた。

彼女が地球の本棚のことまで知っていたのは多少意外だったが、女に甘い翔太郎のことだ。Wの正体まで知られてしまったのだから隠すこともないと、ご丁寧にも教えてしまったに違いない。相棒が心優しいハーブボイルドなのは今に越したことはないが、異性の前で必要以上にいい格好をしたがるのは程々にして欲しいと、フィリップはたまに真剣に思う。

そう口に出さずにばかりうちに黒い表紙に白い機画学模様が描かれた一冊の本が絞り込まれ、彼の目の前に本棚ごと差し出された。早速厚みがあるその本を手にとると、「PROJECT」の文字が表紙に浮かんで固着する。

フィリップは矢継ぎ早にページを指先で弾き、読み取った内容がある程度纏めてから自身の言葉に置き換えていった。

「AWPというのは、Advance Warrior Projectの略だ。人工のパーツを埋め込んで肉体能力を強化した人間……つまりサイボーグに、従来なら考えられないような重武装をさせて兵器として利用する、軍と民間企業が共同で行っていたプロジェクト。ベースとなる優れた肉体を持つ個体を選別して改造し、装甲服を着せ、強力な専用武器を与える。完全武装したサイボーグの戦闘力は、軍隊でも精鋭を揃えた一個中隊に匹敵するほどだ」

本の中身を確認するフィリップの眉間に皺が寄る。読めば読むほど信じ難い事実が述べられていることがわかり、ふと手を止めてしまいうことも幾度かあったが、それでも仲間たちに伝えるために言葉を紡ぎ続けていく。

「AWPで作られたサイボーグは、これまでに三人存在するらしいコードネームとして彼らに与えられた名前は、プロトタイプ1から3。あるいは、プロトタイプの頭文字を取ってP1、P2、P3。試作品1号から3号というわけだ」

「……その、三番目に作られたのが未来さんだつて言うことなの？」
フィリップの耳に、外側の世界にいる亜樹子の声が響いてくる。彼は顎に指先を触れさせながら、更なる情報を求めてページに目を近づけた。

「そういうことになる。彼女はAWPの中で初の成功例とされた個体で、幾度かの実戦を経験し、そのいずれにも勝利して生き残ってきた」

「海外の戦場にでも派遣されていたのか？」

次に聞こえてきたのは照井の声だ。やや不安そうな色を含んでいた亜樹子のそれとは逆に、こちらは事実を積極的に受け入れようとする意思が見える。

ただ、フィリップが返した答えは恐らく予想と異なっていたに違いない。

「いや。彼女が戦った相手は、旧型サイボーグ二人だ」

「……何だつて？」

それは翔太郎も同じだったようで、感情を隠していない反応には純粋な驚きが表れているのがわかる。皆へ更なる事実を伝えるべく、フィリップはもどかしげに本の文字を追いつけた。

「プロトタイプ3以外のサイボーグたちは失敗作に当たる。彼らは廃棄処分の直前に逃亡したが、表立った行動を起こしたために抹殺命令が下されたとある」

「廃棄処分で抹殺つて……！」

「風都にもディガル・コーポレーションみたいな会社があるぐらいだ。業務命令で誰かを殺すことがあっても、驚くようなことじゃない」

絶句した亜樹子に、照井が重々しく告げる。彼も警察にいる人間なのだ。社会の暗部は、日常的に目に行っているのである。

旧型サイボーグたちの「表立った行動」が何であるかまではわからないが、もともと軍事用サイボーグとして開発されたような者たちだ。逃亡の際に誰かを傷つけるか、殺すかしたのだろう。あるいは廃棄処分にされた恨みを募らせて、関係者を襲ったということも考えられる。

サイボーグの実戦投入という大規模で画期的なプロジェクトであるにもかかわらず、この場にいる人間の誰一人としてAWPという名すら知らなかったのだ。恐らくプロジェクト自体が軍事機密扱いのため、逃亡した旧型サイボーグたちとの戦いは闇に葬り去られ、情報も公開されることなく封印されたのだろう。

「その命令に従って二人を殺したのが、未来だつてことか」

「殺したと言えば確かにそうだが……旧型サイボーグたちは逃亡後、一般社会にとって害を成す存在になり果てていたのは確かだろう。振り返りにしたと言った方が、しっくりくるのかも知れない」

翔太郎の呟きを言い換えて、フィリップが手にしていた本を閉じる。

未来が自らのことを蔑んだような冷酷な殺人機械なら、プロジェクトの詳細を知ってしまった自分たちを放ってはおかなかっただろう。だが、彼女は感情をちゃんと持っており、むしろ情に厚い性格だと言えるくらいだ。

その未来が、命令だからと言って平気な顔をして人間を殺せるとは思えない。

そこまで考えたフィリップは、意識せずに未来をフォローするような理屈を組み立てていたことに気がついた。自分も翔太郎に感化されて、甘い思考を持つようになってきているというのだろうか？
が、今度の事件の核となる「七つの大罪」ガイアメモリを使って生まれたドーパントは、単独で相手にするだけでもかなり厄介な相手になることの予測はつく。今まで以上に慎重に、且つ冷静に状況を見極めていかなければならないだろう。

もう仲間が待つ物理空間へ戻るつもりで、白い世界に一人佇む少年は言った。

「いずれにせよ、これではつきりした。間未来は人の手で作り出された、戦闘用サイボーグだ。ドーパントに対してもメモリブレイクが不可能なだけで、十分に戦える力を持つと言っていいだろう」

「……とまあ、これくらいだな」

翔太郎は昨晚フィリップが調査していた様子を思い出しながら、説明を終わらせた。彼の発言を一言も聞き逃すまいとして真剣な表情を保っていた未来が、息をついて頷く。

「そっか。そこまでわかってるんなら、変に隠す必要もないね」
アーモンドの欠片を摘まんでから、彼女はグラスに少しだけ残っていたポストン・クーラーを飲み干した。どうやら酒にはかなり強いらしく、グラスを下げに来たウェ이터にもう一杯同じカクテルを注文している。

翔太郎も、こちらはまだかなり残っていたカクテルを一気に流し込んで、やはり追加の一杯を去りかけたウェ이터に注文した。彼

もこの口当たりがいい酒を気に入りはじめているのだ。

「あんたのあの格好は、俺たちみたいに変身してなれるってことではないんだよね？」

「ああ、パワードスーツのこと？ 違うよ。あれ、着るのが結構大変なんだ。昨日は慣れた人たちに五、六人がかりで着せてもらったから、短く済んだけどね。それに比べて仮面ライダーの変身は一瞬だもんね。羨ましいよ」

速いペースでグラスを空けたのに、未来には酔いを印象づけるものが殆どなく、翔太郎の質問に答える口調もこれまでと同じだ。

対する翔太郎は喉元が熱くなっているのを感じていたが、この程度ならまだいけるはずだった。未来よりも酔っていると思われないよう平静さを意識し、質問を続けていく。

「あんたが持ってたあのでかい銃は？」

「あのアサルトライフルも、私の専用装備。ダンプカーを撃ち抜くくらいの威力があつて、もともとは装甲車とか戦車用なの。まさかあれが効かないとは思わなかったけど」

「あんたの話聞いてると、サイボーグが本当に軍用兵器として作られてるんだと感心するな」

翔太郎は前日に見た未来の黒に近いパワードスーツ姿や巨大なアサルトライフルを思い出し、視線を高い天井へと上げた。

「やめてよ。そういう言い方は……」

が、軍用兵器呼ばわりされた未来は、ストレートな言い方をする翔太郎のデリカシーのなさに小声で反論してくる。見ると、彼女は傷ついたような顔で俯きかけていた。

この女傑がてつきり怒って突っかかってくるものだばかり思っていた翔太郎は、不意打ちを喰らわされて慌てた。

「……済まねえ、気を悪くしたなら謝る」

「まあいいよ、あんたは間違ったことを言っただけじゃないし」

思いの外率直に謝罪の意を示した半熟探偵に、未来は本気で腹を立てているわけではないらしい。しかしあんなに悲しげな瞳を見せ

られたのでは、逆に翔太郎の気が済まなかった。

「いや。相手をきちんと思いやれずに傷つけるなんて、ハードボイルドの風上にもおけねえ。だから謝らせてくれ。済まなかった」

改めて、翔太郎が頭を下げる。

すると、未来は困ったようにそっぽを向いた。

「もうわかったってば。あんまり謝られると、私が翔太郎を虐めるみたいじゃない」

未来は未来で、翔太郎の基本姿勢である「ハードボイルド」を単なるポーズだと流しているところがあつたのだ。それを本気で貫こうとしている彼の真面目さを目にして、認識を改めさせられることになっていたのである。

本当にもう気にしていないことを明確に伝えるために、彼女は話題を他へ移すことにした。

「それにしても、あんたが最後にドーパントを倒した時は驚いたよ。あれだけ派手な爆発があつたのに、元の人間には傷ひとつないなんて」

「あれはメモリブレイクだ。ドーパントの身体にあるガイアメモリだけを破壊することができる。文字通り、俺たち仮面ライダーの必殺技なんだ」

未来の声の調子がやや明るいものになつたことも手伝つてか、顔を上げた翔太郎の話し方も若干軽くなっている。自分が持つもうひとつの人物像である仮面ライダーへ話が及んだことに、悪い気はしないのだ。

そして仮面ライダーの戦闘に関する特殊能力については、やはり未来も気になるところなのであろう。彼女は大きな瞳を丸くして嘆息を漏らしている。

「へえ。おかげで、うちの研究所じゃちょっとした騒ぎになつてるよ。ありえない方法で姿を変えて、科学だけじゃとても説明できないやり方で怪物を倒したって。今度来るときは、周りに注意した方がいいよ？是非とも研究させてくれって言う連中が、大勢いるから

ね」

「あのなあ。俺は研究材料じゃねえぞ」

「けど、変身やメモリブレイクなんかは、全く未知のテクノロジーだからね。あそこにいるのは、基本的に知的好奇心と探究心の塊みたいな人たちばかりだからさ。大目に見てあげてよ」

「……フィリップが大勢いるようなもんだと思っておけってか？」

未来が柔らかい笑顔を浮かべたところで、ウェイターが銀のトレイに並べた二杯のポストン・クーラーをサーブしてくる。話し続けたために乾いた唇をお気に入りのカクテルで湿らせ、未来は再び話題を変えた。

「でさ、永峰から何か新しく引き出せた情報ってないの？」

「健太の父親のことか」

この席を設けた理由の一つであろう、情報収集を開始した未来が頷く。

翔太郎は、永峰の取り調べを行った照井からある程度話を聞いている。未来も当事者の一人なのだから秘密にする必要もないと判断し、彼は徐に口を開いた。

「残念だが、奴も血眼になって山波勇雄を探してたくらいなんだ。居場所については何も知らないみたいだな」

やっぱりそうだね、と言いたげに肩を落としかけた未来に、翔太郎は続けた。

「だが、いくつかわかったこともある。永峰が健太の側についてたのは、山波が息子に接触しようとする可能性を睨んでいたかららしい。それと、山波は複数のガイアメモリを持っている可能性があるそうだ」

「複数って、どういうこと？あんなメモリを、山波は何本も手に入れているわけ？どうして？」

「おおお、落ち着けよ！それをこれから話そうとしたところじゃねえか」

考えてもいなかったことを耳にした未来が上半身を寄せて翔太郎

に迫ると、二人の顔が至近距離にまで近づいた。途端にボストン・クラーの甘さが残る吐息と、揺れる長い髪からふわりと女物のシヤンプーの微かな香りが広がり、翔太郎の嗅覚をくすぐってくる。

不覚にもどきりとした翔太郎は、なおも身を乗り出してくる未来から慌てて半身を離れた。彼女に動揺していることを悟られないように咳払いを一つ挟んでから、「七つの大罪」ガイアメモリについて簡単に説明する。

時折質問を返しつつ一通りの話を聞いたところで、未来は納得した様子で頷いて見せた。

「……そうか。そういう話なら納得がいくけどさ、山波は残りの六本のメモリを全部持つてるの？」

「照井が取り調べて聞いたところじゃ、山波は意外と抜け目のない奴で、残りのメモリ全てを持ち去った可能性が高いらしい。しかし、奴も逃亡中の身だ。金に困って何本かは手離したってことも考えられる」

ガイアメモリは風都において一本につき数百万で取引される闇のアイテムであり、一本だけでも売れば数カ月は生活できるだろう。

一方、他人の手に渡ってしまったガイアメモリは回収が極めて困難になる。

山波が研究の結晶とも言えるガイアメモリをそう簡単に手放すとは思えないが、可能性の一つとして考えておかねばならないことだった。

翔太郎は、現時点におけるもうひとつの懸念についても触れた。

「それに、最後に現れたあのラストってドーパントが誰なのか……今のところはまだそれとはつきりしねえ。山波かも知れないし、他の誰かっていう可能性もある。何故あの場にわざわざ姿を見せたのかもわかってねえんだ」

翔太郎の脳裏に、新たに出現したドーパントの不気味なシルエットが浮かぶ。

昨日の戦闘終了時に姿を見せたドーパントは、永峰にラストと呼

ばれたこと以外は詳細がはつきりしていない。照井は既に現場をざっとは調べていたが、砕けたガイアメモリの欠片が爆発に紛れて行方がわからなくなったことを除いて、特に変わった点もなかったということだった。

「いずれにしても、山波を探そうとしたら、必然的にドーパントが絡んでくるってわけなんだね」

「そうなるな」

未来が表情を曇らせてグラスを揺ると、中の透き通った氷が高い音を立てる。翔太郎は彼女の察しに同意し、警告の言葉を繋げた。

「だからあんたはもう手を引」

「それじゃあ、正式に依頼させてもらおうかな。鳴海探偵事務所のハーフボイルド探偵、左翔太郎に」

「……なに？」

が、翔太郎の口に自分の話で蓋をし、強引に割り込ませた未来のにんまり笑った顔を見て、彼の眉根に深い皺が刻まれる羽目となる。

「なにつて、聞いての通りだよ。山波健太の父親探しを手伝って欲しいって依頼。料金は交渉させてね。こっちも一応プロなんだから」

彼女に澄ました顔で一方的に話を締め括られ、当然の権利として翔太郎は反旗を翻した。

「おい！そんなこと……」

「見てわかったと思うけどさ。私はあんたたち仮面ライダーみたいに、ドーパントからメモリだけを取り出して壊す、なんて器用な真似はできないの。ドーパントを元の人間ごと殺すことならできるけどね。いくらガイアメモリを使ってるとは言え、私だって非戦闘員を殺すようなことはしたくない。犠牲は少ないに越したことはないんだから」

ところが未来はビジネスの顔を翔太郎に向け、この話が冗談ではないことを言葉とともに彼へと示して見せてくる。

それに、彼女が言ったことは理にかなっていた。

生身の状態でもドーパントと十分に渡り合える力を持っていると

は言っても、彼女はあくまで相手を殺すことしかできないのだ。翔太郎の心境としても、ここまで素の状態を知った未来にむやみな人殺しはさせたくない。

「だから協力して欲しい。ドーパント絡みの事件は、そっちが専門でしょ？ 戦闘が予想される場合は、力を借りたいんだよ」

言い方を変えてはあっても話の内容を重ねた未来は、再び正面からハーフボイルド探偵に向き合い、彼のまだ疑惑が混ざっている視線を受け止める。

その大粒の黒い瞳に、少なくとも妙な打算は見えなかった。彼女は純粹に、仮面ライダーの協力を求めているのだ。

「……人に頼みごとをするのに、いちいち態度がでけえんだよ」

「じゃあ、引き受けてくれるんだね？」

無愛想に翔太郎が返したが、その裏にある答えを見出した未来の声は僅かに高い調子になった。

「か弱い女性が困ってるのを決して見過ごさない。それが本当の男つてもんだ」

わざとそっぽを向いて流し目を作り、その先に未来を捉えた翔太郎であつたが、彼女はさり気なくそれをかわしていた。

「残念、私はか弱くないからね。それどころか仕事を分けてあげるんだから、感謝しなさい」

「ちえ、そういう可愛いげのない性格は損するぜ」

「生憎だけど、戦う女に可愛さは必要ないんだよ」

いたずらっぽい笑みを浮かべる未来は、相手を煙に巻くしたたかさはあっても陥れようとする悪意は感じられないだけに、性質が悪い気さえする。やはり舌戦においては、若き女所長の方が一枚上手だ。

そう認めざるを得ない翔太郎だったが、未来はまた声をやや潜めて仕事顔を覗かせ始めた。

「それで、他に何か新しくわかったことってもうないの？」

先のくだけた調子からもうビジネスモードに移行した変わり身の

早さにはいちいち面食らうが、ここでまた相手のペースに飲まれるのは頂けない。翔太郎はボストン・クーラーの減り具合を確かめると、こちらも声のトーンを落として、未来が求めているであろう情報を口にした。

「悪いが、俺が持つてる情報もこれぐらいだ。照井は、永峰の意識が戻り次第取り調べを再開するって言ってたけどな」

「……どういうこと？永峰は今現在、意識不明ってわけ？」

未来が細い眉をしかめると、翔太郎が頷いた。

「永峰は取り調べの途中、突然意識をなくして倒れた。それ以来一度も目を覚まさずに、今も風都セントラル病院に入院中だ。今までこんなケースは、俺も出くわしたことがない」

「ってことは、今までに倒したドーパントではそうはならなかったってこと？永峰が倒れたのは、身体の中のガイアメモリが破壊されたことと関係があるの？」

翔太郎の答えから推測した未来が新たな質問をぶつけてくる。彼女の頭の回転の良さに関心しつつ、翔太郎は説明を続けた。

「ああ。今まではメモリを使った人間は全身が衰弱したり、稀に記憶を失ったりすることはあったけどな。死ぬようなことはない筈なんだ」

「絶対に？」

「そうは言い切れない。メモリブレイクだって、百パーセント安全だと言える保証はないからな」

人の生命に関わることについてまで話が進むと、必然的に二人の話し方は重くなってくる。

これまでにメモリブレイクを受けてメモリが破壊されたドーパントたちは、人間の姿に戻った後に失神や心身耗弱のような後遺症が現れることは度々あったが、死ぬようなことはなかった。ただし、それも果たして全てがそうだと言い切れる根拠を、少なくとも自分たちは持っていない。

メモリに過剰適合した者やメモリの毒素に強く汚染された者は、

助からない可能性が少なからずあるようにも思えるのだ。

井坂真紅郎がウエザーメモリをブレイクされた時、彼の肉体はぼろぼろに朽ちて消滅した。

そしてマスカレイドメモリを使用している者に至っては、身体からメモリを取り出すことすら不可能でもある。

何が起こってもおかしくないと考えるべきなのだろう。

「それに今回使われているメモリは正規品ではなく、試作段階のものだ。完成品ではないだけに使用者に与える影響は未知数だと、フイリップも言っていた」

「そんな危険なメモリ、早く何とかするに越したことはないね。何とかして山波を見つけなきゃ」

翔太郎が素の状態で上らせた真剣な言葉に、ようやく未来も素直に同調した。

が、こんな店であまり長く仕事の話を、それも重々しく語るのは気が滅入る一方だと考えたのだろう。

またしても、未来の口調は一転して明るさを帯びたものに変わっていた。

「と言うわけで、共同戦線に乾杯」

彼女は自分のグラスを低く掲げ、テーブルに置きっぱなしになっている翔太郎のそれに軽く合わせてきた。

「おい、そこはもつと……こう、何て言うか……渋く行くべきところだろ！」

「やだなあ、翔太郎は若い女に渋さを要求するわけ？あんだこそ、そんなこと言ってるもてないよ」

ペースを乱されっぱなしの翔太郎がつけてきた注文に未来はしらっと、それでいて一、二を争うくらい心に響く一言をおまけにつけてくる。

「大きなお世話だ、このじゃじゃ馬！」

「うるさい、かっこつけハーフボイルド！」

店の雰囲気乱さないよう、二人は最低限の音量で互いに思い切

り悪態をついた。

彼らの手にするアルコールは、まだなみなみと残っている。

大人でありながら子どもっぽいや言葉遊びを続ける探偵と便利屋の夜は、長くなりそうだった。

春の空は薄く曇っていたが、弱く降り注ぐ陽光の心地よさは却って強調される。

復讐のことしか頭になかった以前の自分なら、愛用のバイクを運転している時でさえ、そんなことを感じる余裕はなかった。が、今はタンDEMシートに間もなく妻となる女性が乗り、自分の背に身体を預けてきている。

バイクの後部座席と言うのは、実は事故を起こしたときに最も死にやすい場所である。そのため照井は、亜樹子を乗せる時は普段よりもより神経を使うことにしていた。それでも時折彼女が

「竜くん、大丈夫？疲れてない？」

と声をかけてくれるので、一人で乗っているときよりも穏やかな気持ちでいられる。

本来ならば今日亜樹子を連れてくる必要はなかったのだが、「七つの大罪」ガイアメモリに絡んだ調査だと知った彼女と一緒にいくと言って聞かなかったのだ。

外見は未だに中学生に間違われるくらいでも意外と機転がきくところがあるし、男である自分が注意していれば大丈夫だろうと思うのは、鼻肩目になってしまふのだろうか。

などと照井が思考を巡らせていたところで、不意に車のクラクションが耳に飛び込んできた。見ると、待ち合わせ場所に指定された駐車場に停まった営業車の横で、見覚えのある細身のシルエットが手を振っている。その駐車場の駐輪スペースにバイクを停め、照井が亜樹子とともにヘルメットを脱いで車の方へと向かった。

「おはよ、照井警視。亜樹ちゃんも」

「おはよう、未来さん」

駐車場で待っていた未来の営業用と見える挨拶には、亜樹子にこやかに応えた。

未来は初対面の時と変わらずジーンズにカットソーとジャケットというラフなスタイルだが、彼女の背後にはぎこちないスーツ姿の青年が黙って控えている。彼はあまり冴えない顔色を長い前髪でカバーしているつもりだったが、却って表情が沈んだ印象になっているようだ。やつれたような細面なのに眼光だけが嫌に鋭く見え、それが照井の全身を値踏みするように眺めてきている。

「こっちは、うちの事務所の堀内。まだ怪我が治ったばかりであんまり動けないんだけど、今日の調査には同行するから。よろしくね」

未来から紹介された青年が軽く会釈すると、前髪の間から額に当てられているガーゼが覗いた。本来なら自宅療養せねばならないところを圧して仕事に出てきているのだらう。今の若者にしては根性がある奴だと、まだこちらに向けられている堀内の目を悠然と見返した照井は感心した。

「じゃあ、健太がいる施設までは俺が案内しますから……」

あまり声のトーンを上げずに言ってから振り返り、堀内が皆の先に立つ。未だ病み上がりであることを隠せない堀内に従って、残る三人の男女も健太のいる児童養護施設を目指して歩き始めた。

未来が鳴海探偵事務所へ正式な依頼をする意思が示された翌日、一同は早速もとの依頼主である山波健太のもとを訪れることにしていた。とは言っても健太はまだ五歳の幼児であるため、彼がいる児童養護施設の職員に話を聞くことが主な目的であったが。

照井たちが待ち合わせをしていたのは未来の事務所からも施設からも程近い駐車場で、風都からはかなり離れた土地である。風都以外でドーパントが出没するようなことがあれば混乱は避けられないだろうとの判断から、照井も今回の件に手を貸すことにしていた。

が、今日はメインで動く筈の翔太郎の姿が見えない。未来はその理由に勘づいてはいたが、念のため照井に確認を取った。

「翔太郎は一緒じゃなかったの？」

「左は二日酔いで起きられないらしい。フィリップがついているか

ら心配ないだろうが、動けるようになるまでもう少しかかるだろう」

未来と亜樹子に挟まれて歩く照井が会話相手の方を向きもせずに答えると、たちまち未来がばつの悪そうな表情を上らせた。そこへ照井が横目で視線を流し、言葉でも突っ込みを入れてくる。

「昨日の晩、左は君と飲んでいたそうだな」

「……仕方ないでしょ。まさか翔太郎があそこまで弱いなんて、思ってたなかったんだもの」

赤い革ジャケットを纏ったこの若き警視は普通に話したつもりなのだろうが、それでも未来はまるで取調室で詰問されているように感じて落ち着かない。ために、彼女もついふてくされたような態度を取ってしまう。

昨日未来と翔太郎がバーで酒を飲んだのは確かで、互いにとくに成人に達しているのだから、それ自体が別に咎められるようなことではない。ただし問題はその後で、酔い潰れて動けなくなった翔太郎を未来が担いで鳴海探偵事務所まで送り、終電車を逃した彼女はやむなく朝まで事務所にいたのだ。

翔太郎は未来が始発で帰った後もベッドで頭痛と胸焼けに苦しんでおり、二日酔いの状態など初めて目にしたフィリップが興味津々で看病を続け、まだ完全に回復せず今に至っている。

照井がそのことを知ったのはここに来る直前のことで、子どもじみた行動に呆れた冷たい目を未来にも送り続けることになったのである。

「君が酒豪なだけだ」

「カクテル三杯くらい、普通でしょうが。翔太郎が弱すぎるだけだつての！」

過度に飲む女など異性ではないと言いたげな照井の態度に、未来は憮然として言い返す。

初対面時の落ち着いていた印象とは違ってストレートに感情を出している女所長に、照井は少なからず意外さを覚えていたが、それは顔に出さず淡々と話を変えた。

「ところで、君の部下には今回の件をどこまで話しているんだ？」
実質的な仕事の話を持ち出した照井に、未来は声の調子だけ何とか整えて答えた。

「私と仮面ライダーの正体を除いて、一応全部は話したよ。彼も実際にドーパントに襲われた身だからね。ちゃんと信じてくれたみたい」

低いトーンで一息に話した未来は、前を歩く堀内には聞き取れないように配慮しているようだった。

彼女が部下である堀内に伝えたのは、風都にドーパントなる怪人がいること、彼らの正体がガイアメモリという魔のアイテムを使った人間であること、ドーパントと戦う仮面ライダーたちがいることである。そして今回襲ってきたプライドが既に倒されていることやその変身前の人間、つまり永峰のことについても全て伝えた。今の時点でわかっている健太や父親のことについても、時間が許す限り詳しく説明している。堀内が知らないのは仮面ライダーの正体と、未来が軍事用サイボーグであることぐらいだろう。

未来を驚かせたのは、堀内が思いの外すんなりと事実を受け入れてくれたことである。絶対に素直に信じてはもらえないだろうと覚悟していたところを、肩透かしを喰らった気分だった。堀内に全ての事情を伝えたのは今日ここに来る直前の事務所でのことだったため、状況をきちんと理解できるのに少し時間がかかるかも知れませんがと言われた程度である。

彼はどちらかと言えば神経質で細かいことを気にするタイプだと思っていたが、実は肝が座った豪胆な人物だったということなのだろうか。そうだとしたら、自分の人を見る目がまだまだだ。

未来が猫背気味で前を歩く堀内の後ろ姿に目をやったところに、照井を挟んだ向こう側から亜樹子が小声で話しかけてきた。

「堀内さん、本当にガイアメモリを持っていないのよね？」

「多分ね。もし山波に一度でも接触してるなら、間違いなく私の耳に入ってる筈だから。それがないってことは、ガイアメモリを手

入れる機会なんてなかったんだと思う」

亜樹子につられた未来も小声で返す。

昨晚、翔太郎を鳴海探偵事務所まで送り届けた未来がタクシーで帰ろうとするのを引き留めたのは、こちらも女所長である亜樹子であった。金銭的な苦労などを知っている身のため、余計な費用をかけるぐらいなら事務所に泊まればいいと促したのである。

この女子二人はそうして話し込むうちに随分と打ち解け、友達同士のような間柄になりつつあった。亜樹子は年上である未来に敬称をつけているものの未来はそうでなく、それでもあまり違和感を感じさせないのは、女子という生きものの不思議なところだろう。

「所長！」

彼女らがまだひそひそと話を続けていると、突然堀内が振り返って走ってきた。そのまま未来のジャケットの袖を引き、数歩前まで引つ張っていく。彼の顔を見ると、いかにも一言物申したいような目付きになっていた。

今まで強引な行動に出ることがなかった堀内に驚きながらも、未来が先に言葉を発する。

「何？」

「どうして、よりによって警察の奴なんか連れてきたんです？一緒にいたら、絶対こっちの足を引つ張るだけなのに」

未来と並んで再び歩き出した堀内は、どこか咎めるような棘を言い方に含んでいる。もともと便利屋と警察などの公的機関は相性が最悪なだけに、彼も悪いイメージしか持っていないに違いない。

未来は不満を隠そうともしない若い部下を宥めにかかることにした。

「言いたいことはわかるけど、彼はドーパント犯罪が専門なんだよ。この先もしドーパントが襲ってきたりしたら、私たちじゃ対処できないでしょ」

「大丈夫ですよ。その時は、俺が所長を必ず守って見せますから」堀内は力強く頷いて見せたが、彼の青白くひよる長い身体と辛気

臭さを拭えない雰囲気では、全くもって説得力がない。それに、彼のスーツの下にはまだガーゼや包帯が残っているのだ。

「あのねえ。あんたはついこの前怪我させられたばかりだし、まだそれも完治してないじゃない。もしドーパントが現れたら、後は照井警視に任せておけば大丈夫だって」

餅は餅屋と言うように専門家に任せるべきだと、未来はごく一般的な意見を述べたつもりであつた。

「随分とあいつのことを買ってるんですね。この前来た探偵もときもそうみたいだし」

「彼らには、ちゃんとした実績があるんだよ。だから信用できるんだって」

なのに部下の青年の声音は急に冷え込んだようにトーンを落とし、負の感情がそこに集中したかのような気さえた。

恨み節を思わせる重さと暗さを見せた堀内を、あくまで理屈で納得させようと未来が説明を続ける傍らで、彼は目を逸らして呟いた。「けど、いつも所長の側にいるわけじゃない。ちよつとは俺のことも頼ってくださいよ……寂しいじゃないですか」

「いや。頼るつて、私はあんたの上司なんだし。新人のあんたに頼るわけにはいかないでしょ」

「……けど、所長は女性なんだ。なのに」

どうやら堀内は頭でわかつてはいても、感情が許さないらしい。説得にも一番困るケースである。

それにしても、彼が自分のことを頼って欲しいなどと言い出したのは予想外だ。これまでは何かと未来のことをあてにしてばかりいたのに、入院中に余程の心境の変化でもあつたのだろうか？

とは言え、やはり未来にそのつもりは全くない。年齢も経験も、そして体力的な面においても、自分の方が堀内を圧倒しているのである。まだ新人の彼に余計な期待をかけるのは、まずは目の前の仕事を一人前に果たせるようになってからの話だった。

未来が頭を掻きながら堀内を傷つけない言い方を探っていたとき、

元気のいい子どもたちの喧騒がその場に一同の耳に聞こえてきた。

「おにいちゃん！」

その中で、はつきりとこちらに向けられた嬉しそうな声が近寄ってくる。

堀内に案内された若者たちは、健太のいる児童養護施設のすぐ手前まで来ていた。入所している小さな子どもたちは丁度自由時間だったらしく、たまたま堀内の姿を開いた門扉の外に見つけた健太が外へと走り出てきたのだ。

「よお、健太。そんなに走っちゃ危ないぞ？見舞い、ありがとな。元気だったか？」

堀内もぶつからんばかりの勢いで駆けてくる健太に歩み寄ると、笑顔で小さな身体を受け止めてやっていた。そのまま手を繋いでやり、連れだって施設の庭へと入っていく。

堀内の背には先を感じられた陰惨さはもう見えなかったが、未来には彼のついさっきと今しがたの態度とが違いすぎるのが気になった。

「どうかしたのか」

追いついてきた照井がもの言いたげな未来に声をかけるが、彼女は首を横に振った。

「うつん、別に何も」

堀内が未来のことを知らないように、未来もまた堀内のことをよく知らない。いちいち他人に話すこともないだろう。

照井と二人の女所長は、高度経済成長期には孤児院と呼ばれていた施設に入っていた。コンクリート造りの建物は大きくないものの比較的新しいようで、暗さは感じられない。庭にはジャングルジムや砂場のような遊具もあり、隅の方で健太と堀内が遊んでいるのが見える。

他に遊んでいる子どもたちにぶつからないようにしながら、一同は二人の側へ歩いていった。

「あらあ？今日は健太くん、ご機嫌ね。こんなに笑ってるのを見るの、久しぶりだわ」

彼らが健太に声をかけようとしたタイミングで、若い女性職員がにこやかな笑顔を作ってしゃがみ込み、視線の高さを合わせていた。「うん！堀内のおにいちやんが来てくれたから」

本当に嬉しそうな健太の声が弾けると、側に立つ堀内が小さな頭を撫でてやる。

「健太。お父さんは絶対に兄ちゃんたちが見つかるからな。それまで、いい子で待ってるんだぞ」

「ほんとう？ぼくが いい子でいれば、みつけてくれる？」

「ああ。男と男の約束だ」

力強く頷いた堀内が親指を立てて見せると、健太も小さな右手で同じしぐさを返してくる。

二人のやりとりに微笑ましさを感じたらしい亜樹子が表情を緩ませるが、逆に照井と未来の表情は複雑さを帯びていた。

健太の父親はガイアメモリを持って逃亡しているのだ。それを使っていないという保証はどこにもなく、一度でもドーパントの姿になっていれば、精神は確実に汚染される。その影響は時間の経過とともに強くなり、最終的には人間らしい心が全て蝕まれるのがガイアメモリの恐ろしいところだ。

それは堀内も知っているはずなのに、彼の根拠がない自信の源は一体何なのだろう？

父親を探し出すという、まだ五歳の依頼主との約束。 ささやかながら真剣な願いが叶わぬものと理解した時、幼い心がどれだけ傷つくのか定かでない。だから今のうちから「必ず」「絶対など」という言葉を使うべきではないと、二人は思うのだ。

「よおし！じゃあ、お姉ちゃんも一緒に、三人で遊ぼうか？」

亜樹子が次に言うべき言葉を探しあぐねている二人の前に進み出ると、こちらもかがんで健太と同じ高さに視線を合わせた。重苦しい空気にならないよう、気を遣ったのである。

亜樹子とは初対面だった健太は一瞬驚いた表情を浮かべたが、すぐに満面の笑顔で頷いた。

「うん！」

堀内と亜樹子に挟まれる形で手を繋いだ健太は、二人を砂場の方へと引つ張っていく。照井たちの側を離れる直前、亜樹子は残る二人に素早く目配せをしていた。この間に職員たちから話を聞いておけというのである。

健太の背中をにこやかに見つめながら立ち上がった先の若い女性職員に、未来が声をかけた。

「健太くん、このところ元気がなかったんですか？」

「ええ。担当の永峰が急に辞めてしまつて、塞ぎ込んでいたんです。堀内さんが来てくれて助かりました。あの子が笑ってくれて、本当に良かったわ」

「そんなに沈んでたんですか？」

「ええ。お母さんがもう亡くなつていて家族がお父さんしかないということとは、あの子なりに理解してるんです。そのお父さんも突然いなくなつてしまつて、代わりによく面倒を見てくれていた永峰さんも、いきなり会えなくなつてしまつたんですもの。自分がまたひとりぼっちにされたと思つたらしくて、見ていられないくらいに悲しんでたんですよ」

その時の様子を思い出したらしい女性職員が、辛そうに目を伏せる。

「そうでしたか。こちらでも、堀内がなるべく面会に来られるように調整しますから」

「そうして頂けると、本当に助かります。あの子、堀内さんがいつかお父さんを連れて来てくれるつて、心から楽しみにしてるんですよ。堀内さんのことも大好きなようですよ」

エプロン姿の女性がほつとしたような様子を見せると、却つて未来の心が鈍く疼いた。自分たちが健太の父親を本当に五体満足な状態で連れて来られればいいと思うが、どうしてもそう断言できない

ことが胸の奥に刺さって抜けないのだ。

そして照井に至っては、「七つの大罪」ガイアメモリ使用者が現在どのような状態にあるか知っているだけに、余計に気が重い。彼が今朝風都セントラル病院に電話して聞いたところ、担当医師からは未だ昏睡状態にある永峰に回復の兆しは見えず、恐らく今日明日が山だろうと宣告されたのだ。永峰と山波の作ったガイアメモリ使用者全員がそうなるとは言えないまでも、そうならないともまた言い切れないのである。

しかし、警察でドーパント犯罪を専門に扱う部署の人間という立場にあり、ここにいるメンバーの中でも一番積極的に事態の解決に当らなければならぬ自分が、不安そうな表情を見せるわけにはいかない。

照井はいつものような鉄面皮を意識して、未来の知り合いらしい女性職員に質問を投げかけた。

「それ以降、何か変わったことは？不審人物がうろついているのを見かけたとか」

「いえ、特には……あの、失礼ですが、こちらの方は？」

その緊張した問いかけが詰問のように聞こえたのだろう。若い女性職員は気圧されたように答え、次に不審そうな目を照井に向けてくる。赤い革ジャケットを纏った警視は無言で内ポケットから警察手帳を引っ張り出し、桜田門が見えるように示して見せた。

「まあ……失礼しました。けど本当に、特に目につくようなことはないんです」

一言だけ答えると、女性職員は照井に軽く頭を下げてそそくさとコンクリート造りの建物へ入っていった。

その後、五人の男女が入れ替わりで健太と遊びつつ職員たちに話を聞いて回ることを繰り返したが、健太の父親に関する情報は何一つ上がってこなかった。二年前に健太がここに預けられて以降、父親は数えるほどこしか面会に来ていないというのだから、手掛かりが何一つないのも無理からぬ話だろう。

庭の一角にある花壇の縁に、照井と亜樹子が並んで座っている。二人は複数の職員たちに手分けして話を聞いていたが、やはり手応えがある情報はなく、彼らはどちらからともなくため息を漏らしていた。

「あーあ、結局手がかりはなしってことね。でも、私も早く健太くんのお父さんを見つけてあげたくなくなっちゃった」

膝の上で頬杖をついている亜樹子は、花壇で咲き誇る色とりどりのチューリップから元気に遊ぶ子どもたちの方に視線を移した。

その中に未来や堀内、健太が一緒にいることを確かめ、照井も口を開く。

「間に値切られて、渋々引き受けたんじゃないのか」

「うーん？最初はそうだったんだけど……何だか、未来さんとかの姿を見ているとね。別にお金がもらえるだけでいいかな、って気がしてきたの」

視界の中を忙しく動き回る大小の人影をぼんやりと眺めている亜樹子は、本心からそう考えているようだった。金銭のことに通常の大阪人より更に三倍はうるさい彼女に、このような発言は非常に珍しい。照井の驚きを特に気にした様子は見せず、亜樹子は手持ちのバッグから折り畳んだ画用紙を取り出して見せた。

「さっきね、健太くんが描いた家族の絵、汚しちゃうかも知れないからって預かったの。健太くん、外以外ではそれをいつも持ち歩いているんだって。よほど、家族が恋しいんだなってわかるんだ。

健太くんのお父さんのこと、たくさん聞かせてもらっちゃったし」

彼女が画用紙を広げると、自然と隣の照井が覗き込んでくる。

スケッチブックから破り取ったと見える白い画用紙には、クレヨンで白い服の男性が真ん中に一番大きく描かれ、その両隣に小さく、もう一人ずつの人物が描かれているのがわかる。多分、真ん中の男性と見えるのが父親の山波勇雄なのだろう。

子どもらしさが溢れる一枚の絵を照井と一緒に眺めていた亜樹子が、懐かしそうに目を細めた。

「それに私も、お父さんとずっと会えない時間が長かったから。だから、健太くんの寂しさがわかる気がする……多分あの子、お父さんから本当に愛されてたんじゃないかなって思えるの。じゃなければ、あんなに幸せそうにお父さんのことは話せないはずだから」

そう亜樹子は亡き父のことを思い出しているようだが、悲しげな色はその表情にうかがえない。手元の絵と健太が遊ぶ姿を交互に映している黒い大きな瞳には、むしろ優しさと暖かさが満ち溢れている。

亜樹子の父、鳴海壮吉は翔太郎の師匠である一方、仮面ライダースカルという戦う男の顔も持っていた。しかしハードボイルドを地で行っていても、壮吉は亜樹子にとってただ一人の父親であり、その愛情は今でも宝物として心の奥に輝いている。健太もまた自分と同じく、優しい父の思い出を大切に持っているのだらうと、亜樹子には思えるのだ。

照井も、まだ庭の隅を見つめている亜樹子の視線を追った。

そこでは相変わらず健太が高い声ではしゃぎ、時折「お父さん」と言っているのまで聞こえてくる。遊び相手になってやっている未来と堀内に、家族自慢でもしているのだらう。

おとうさん。

自慢げに両親のことを口にする子どもの笑顔は、本当に光り輝いて見える。

幼き日の自分と同じように、大切な家族との暖かな思い出に包ま

れている健太もまた幸せなのだ。

少なくとも、今は。

人の役に立つ立派な仕事をするために白衣を着た父が頑張っているのだと、純粹に信じている今は。

「山波は、子どもの絵でも白衣を着てるんだな」

「それぐらい印象が強いってことよね」

健太の描いたクレヨン画を見つめて自然と漏らした照井に、亜樹子が頷いた。子どもは家族の絵を描くとき、普段から持っている一番強いイメージをそのまま形にする。健太にとっての父といえば、やはり白衣姿なのだろう。

思えば照井自身も警官だった父のことを子どもの頃から誇りに思い、広く大きな背中に憧れ、将来の自分の姿をそこに見出だしていた。そして、この世で一番頼もしく思えた紺色の制服を必死に思い出し、誰よりも素晴らしい父の姿をクレヨンで夢中になって描いたものだ。

だからこそ自分は、父を含む家族を惨殺した井坂深紅郎に対して激烈な憎悪を向ける復讐の鬼と化した。井坂が死んだのは幾人もの人々から幸せを奪った当然の報いだと言えるが、もしあの男が誰かの親であつたなら、恐らく自身の選択した行動も違ったものになっていただろうと、今の照井には思っていた。

自分は親から残される苦しみと、奪われる悲しみを知っている。

同じ辛さを、また誰かに味わわせたくないのだ。

健太は永峰にも表面上のこととは言えよくなついていたが、その永峰が心身を回復する見込みは低い。仮面ライダーたちは既に一度幼い子から家族を奪っているも同然だと言えなくもない。できるのなら、立て続けに誰かを失う過酷な運命の渦に健太を突き落とすような真似はしたくない。

だがそのためには、山波がドーパントだった場合にメモリブレイクを使つてはならない。

何と言つても「七つの大罪」ガイアメモリは試作品故に、何が起

きるか予想がつかないところがある。迂闊なことをすれば、使用者を死に至らしめる可能性も排除できないのだ。

そしてもし取り返しがつかない事態に陥ったら、自分たちはあれほど父を恋しがっている健太に何と詫びればいいのか？

照井に、答えが出せる筈はなかった。

最愛の家族を失った者の苦しみは、自身が一番よく知っているのだから。

あんな思いをするのは、もう自分一人だけでたくさんだ。

照井が抱いている願いは自然と隣にいる亜樹子、つまり近いうちに家族となる女性に向けられた。

「所長……いや、亜樹子」

「え……ええええええええっ？な、な、なななな何、竜くん？」

照井の口から突然名前を出された亜樹子は、一瞬自分が呼ばれたのだと思わなかったらしい。大きな目を二、三度しばたかせると、あたふたしながら耳まで真っ赤にしてどもった。

動揺のあまりすっかり挙動不審になっている婚約者であるが、照井のまなざしは真剣そのものである。

亜樹子は大きく息を吸って呼吸を落ち着かせると、未だかつて熱くなつて跳ねそうな手足の力を抜き、改めて彼と向き合った。

「俺たちに新しい家族が増えたら……寂しい思いはさせないよう最大限に努力しよう。君も、自分と同じ思いを子どもにさせたくはないだろう？」

普段の照井の人物像からすれば考えられないような台詞が、低い声に乗ってすらすらと述べられてくる。いつもは少しでも気恥ずかしいことを口にするときは視線を外す癖があるのに、今の彼は言葉に熱い思いを込めながらも、瞳は優しく微笑んでいる気さえした。

これまでに殆ど見たことがない照井の表情を目にした亜樹子は驚いたが、それよりも嬉しさの方が勝っていた。

こんな人が家族になってくれる。

純粹な喜びが彼女の心の底から溢れ、思わず赤い革ジャケットに

包まれた逞しい胸に飛び込みたくなった。が、流石に人目を憚ってその衝動を堪えると、亜樹子は照井の大きな手に自分のそれを重ねてそつと頷いて見せた。

「……うん」

微笑みながら小声で返してきた亜樹子の、これまた普段と違ったしおらしい姿を認めた照井の口許がほころぶ。

「あつれー？ おうおう、白昼堂々とまあ、見せつけてくれちゃって婚約者同士はあつついねー」

そこへ、無遠慮な声が割り込んでくる。

口調は完全に少年のからかい調子であつたが、声音は女性のそれだ。言うまでもなく、未来である。彼女は慌てて離れる二人のすぐそばに佇み、にやにやと意地の悪い笑いを浮かべていた。

一体いつから観察していたのだろう。気配を悟らせないのもサイボーグの特殊能力だと言うのなら、彼女はとんでもなく悪趣味な女だと、照井は本気で悪態をつきたい気分であつた。

「何かあつたのか」

しかし表面はあくまで平静を取り繕い、健太のところから戻ってきた未来に問いかける。

「健太くんがそろそろ薬の時間で中に戻るから、さつき預けた絵を返して欲しいんだってさ」

「薬って、健太くんは風邪でもひいてるの？」

その場の空気をごまかすために激しく咳払いをしていた亜樹子も、照井に倣った。

「ううん。多分、持病の薬だと思うけど……ああ、そう言えばまだ話してなかったんだっけ」

言い淀んだ未来の表情に翳りがさす。

彼女は山波と昔同僚だった生沢から聞いた話を手短に説明した。健太が先天性の病を患っていること、父親が恐らく治療法を見つけるため、ディガル・コーポレーションに移ったことが主たる内容である。

「健太くん…… そうなんだ。それで治療法を見つけるために、お父さんがわざわざ仕事も変えてまで……」

黙って話に耳を傾けていた亜樹子がぼつりと漏らすと、照井も重い口を開いた。

「しかし、そこまで息子を大切に思っている父親が何故、突然蒸発したんだ」

「実は、私もそこが一番引つ掛かってるんだ。ガイアメモリの開発に携わっていたんだとしても、家族に対する思いが変わるわけじゃないんだろうし……」

照井が自分と同じ疑問を抱いたことに頷き、未来も同調する。

「もしかしたら、隠れて健太くんの薬を作ってるんじゃないかな？ ガイアメモリを持って逃げたのも、永峰にメモリを悪用させないためだったとか」

「けどそれなら、逃げる前にメモリを壊せば済むことだったんじゃない？」

未来が亜樹子の希望的推測を論理でやんわりと打ち消すと、照井が二人の意見をまとめて見せる。

「恐らく、メモリを手離せない理由が何かあったんだろう。健太の薬を作るにしても、ガイアメモリがどうしても必要だったのかも知れない」

「そっか…… けどとにかく、健太くんのお父さんがメモリを使っただけならいいね。私は今のところ、それだけが心配よ」

婚約者の青年が言うことに異論がない亜樹子は息をついて、曇り空を見上げた。それにつられて、未来も流れ行く雲に視線を走らせる。

亜樹子が言う通り、山波がメモリを所持していても精神を汚染されていなければ、まだメモリを破壊するように説得する余地がある。彼を見つけて健太が元気であることや父親を恋しがっていることを伝えられれば、何とかできるかも知れない。

先に亜樹子が広げていた、健太が描いた家族の絵を山波に見せる

のも効果的だろう。健太に聞いて借りることができれば、試してみるのもいい。

未来がまだ砂遊びに興じている健太と堀内の方に目を向けて、聴覚の感度を上げる。二人の遊びがひと段落したところで声をかけに行くつもりで、彼らが話していることを聞き取るためだ。

が、予想していなかった物音が彼女の鼓膜にとらえられた。子どもたちが上げる独特の甲高い叫びと職員たちの落ち着いた声が混ざり、通りを行き交う人々のせわしげな足音が過ぎていく中に、不規則な風を切る鋭い音が挟まれているのだ。

未来の手術によって強化された耳は、通常の人間が持つ聴覚の五百倍まで感度を引き上げることができる。それは戦闘や仕事の際にも大いに役立つ身体機能であり、様々な音を聞き分けてきたが、こんな音は初めて聞く。鳥の羽ばたく音にしては大きすぎるし、リズムも微妙に違うのだ。

「どうしたの？」

「静かに！」

もう一人の女所長が表情をこわばらせていることを不審に思っらしい亜樹子が訊ねたが、未来は緊張した低い声で制した。もう一度聞き耳を立ててから、更に調子を押さえて告げる。

「この音……やばいよ、何か来る。ドーパントかも」

「え？ええっ？私、何も聞こえないわよ！」

思ってもいなかった警告を耳にした亜樹子が耳をそばだてて辺りを見回したが、彼女にはドーパントの気配など感じ取れないらしい。しかし未来が出任せでそんなことを口走る筈がないことを知っている照井は、やはり緊張した面持ちで花壇の縁から腰を浮かせた。

「堀内！健太くんを――」

張り詰めた様子で声を上げながら、未来が二人の方へ駆け寄ろうとする。

その細い身体が数歩踏み出したところへ、一抱えはあろうかという炎の柱が上空から落ちてきた。

耳をつんざくような子どもの叫びがあちこちから上がり、施設の庭は一瞬で阿鼻叫喚の地獄の様相を呈した。突如として叩きつけられた炎のつぶてがあちこちで地面に火柱を立て、その合間を必死で逃げ惑う小さな影を、職員たちが追いかけている。

幸いなことに炎に直接巻かれた子どもや職員はいないようだが、炎の弾は上空から断続的にばら蒔かれており、今や庭の三割以上に火炎が広がる状態となっていた。

空から降ってくる火の塊自体の大きさは大人の拳程度だったが、それが地面に接触するとたちどころに激しく燃え上がり、火柱は大きなものだとも未来の背丈ほどの高さにまで達していた。一旦上がった炎は地表の可燃物を巻き込んで燃え、更に広い範囲へと熱波を及ばせていく。

その中で健太を腕に抱いた堀内が身体を硬直させ、呆然と立ち尽くしていた。

「し、所長……」

炎を掻い潜って駆けつけてきた未来の姿を認めた堀内が、ようやく掠れ声で呻く。未来は炎の照り返しで頬を赤くしながらも、二人の無事を確認してから微笑んで見せた。

「二人とも大丈夫？早く、建物の中に！」

何が起こったのかまだわからないでいる健太は、自分を抱きしめてくれている青年の首にしがみついているが、堀内ははっと我を取り戻して未来へ問い返した。

「で、でも所長は？」

「私は大丈夫。さ、早く！」

言うが早いか、未来は照井たちのいる一角へと取って返そうとする。

「そんな、俺も……！」

堀内の悔しげな色を滲ませた声を背に受けても彼女の小さな背中
は振り返らず、灼熱の炎の間をすり抜けていった。

照井と亜樹子は、庭でパニックを起こしていた子どもと職員たち
を何とか建物の方へと下がらせたところだった。亜樹子は炎のすぐ
側にいながらも、懸命に人々を安全な場所へ誘導するために声を張
り上げて走っていたが、彼女の臨機応変さはこういう時に本当にあ
りがたい。そのお陰で、照井はこの騒ぎを起こしている犯人に注目
するだけの余裕を持っていた。

上空を飛翔し炎の雨を降らせていた何者かが、ゆっくりと地上へ
と舞い降りてくる。

その姿は、炎と同じく赤い輝きに包まれた異形であつた。人間と
同じ手足と胴体があるようだが、刮目すべきは背中で燃え盛る一對
の炎の翼、そして鋭い嘴を備えた一對の首である。青白く見える
瞳がこちらを向いただけで、耐え難い炎熱を叩きつけられたような
熱さを感じる。

まさに双頭の不死鳥フェニックスと形容すべき怪物であつた。

「何よこれ……私、聞いてない！」

「やっぱりドーパントだつたんだ。人間の足音とは違うし、変だと思
つたんだよ」

ドーパントを睨みつける照井の後ろで亜樹子が愕然とし、戻つて
きた未来は舌打ちを漏らす。

先に未来の強化された鼓膜が捉えたのは、ドーパントが持つ翼と
空気との摩擦音だつたのだろう。炎を纏う翼なだけに、聞いたこと
がない音を立てていたのだ。

「所長！堀内と一緒に、子どもたちを建物の奥へ避難させてくれ！」
何かを求めるようにゆっくりと庭を眺め回しているドーパントか
ら目を離さずに照井が指示すると、亜樹子が頷いて走り出した。見
たところ、このドーパントが発する炎は特殊なものではなく、可燃
物が無い場所にはさほど燃え広がらないように見える。コンクリー
トの施設内にいれば、ドーパントに侵入されない限りある程度の安

全が確保できるだろう。

亜樹子が炎をうまく避け、庭にいる人々を先導している様子を視界の隅で見守りながら、照井と未来の二人は前に進み出た。焦げついた砂が足元でくすぶり、薄い煙が上がる中、炎の熱が彼らの身体の要所を焦がそうとする。

「どういうことなの？この前C・SOLで見たドーパントと、全然違うじゃない！」

「確かに全く別のドーパントだ。とにかく、ここで暴れられたら被害が大きくなりすぎる」

厳しい表情で吐き捨てた未来と照井の脳裏に、節くれだった手足と紫色の身体を持つラスト・ドーパントの姿が同時に横切っていた。プライドに変身していた永峰が倒れた際に姿を現し、その名を呼ばれていたドーパントとは別の個体。しかし、これも「七つの大罪」メモリのいずれかから生み出された怪物に間違いないだろう。

今しがた使われた炎を操る能力も、簡単に人を焼き殺せるくらいの威力がある。変身しているのが誰であれ、早く取り押さえるに越したことはない。

今だ庭を見回すばかりでいる炎のドーパントの動に注意を払いながら、照井は右手に握った深紅のガイアメモリのスイッチを叩いた。
アクセル
「ACCELER！」

ガイアウイスパーが炎が作る上昇気流に舞い上がると、光のベルトが照井の半身を回り、アクセルドライバーの形となって具現化する。

「変……身！」

彼がドライバーにの中心にアクセルメモリを差し入れてハンドルを握り、アクセルを振り切った。

地球の力を貯えたドライバーの中心からエンジン音とともに輝きが溢れ、細身の体躯に散っていく。まばゆい光は照井が内に秘めた情熱を映した真っ赤な装甲となり、彼の全身を包み込んだ。力強いエネルギーが四肢に満ち、戦うための気力が筋肉にほどよい緊張感

を行き渡らせる。

照井の姿を変貌させた光が全て形となった後には、重厚な鎧に身を包み、大振りの剣を携えた一人の戦士――仮面ライダーアクセルが、仁王立ちとなっていた。

「むっ？」

至近距離で新たに出現したエネルギーの存在を感じ取ったのだろう。ドーパントが持つ四つの目が動き、アクセルと未来の姿を炎の生け垣の向こうに見つけ出していた。

敵の注意を引いたことを察したアクセルが踏み出して、エンジンブレードを構える。形は背後に立つ未来を庇う態勢となっていたが、アクセルは振り向かず到低く言った。

「君も早く変身しろ！」

「は？できるわけないでしょ！あんたらみたいに一瞬であの姿になれるわけじゃないし、第一スーツは持ってきてないんだから！」

さも当然のように変身という非現実を要求するアクセルに、未来は咄嗟の反応で怒鳴り返していた。

「全く、使えない女だな。それならせめて援護しろ！」

「……悪かったね。あんたに言われると、すごいムカつくんですけど！」

勝手な文句を垂れたアクセルに悪態をつき返し、未来はショルダ―ホルスターから愛用の拳銃であるグロックを抜いた。アクセルのような熱から守ってくれる装備を持っていないため、ドーパントに接近するのは危険と判断してのことだ。

彼女が銃を構えた気配を確かめてから、アクセルが地に渦巻く炎を突っ切って走り出す。たちまちドーパントとの間合いが詰められていくが、当のドーパントは逃げる素振りも、迎え撃とうとする構えも見せない。

それどころかその場から動こうともせず、迫り来るアクセルに指先を突きつけて嘲笑した。

「お前は仮面ライダーアクセルだな。警察の犬が、縄張り以外の場

所を荒らしに来たか」

ドーパントの声はフェニックスの双頭から同時に発されており、しかもそれぞれ微妙に高さが異なっている。まるで二人の人物が全く同じタイミングで話しているように聞こえて独特の響きが伝わり、奇妙さが強調されることとなっていた。

「ドーパントの影があるところに、俺たち仮面ライダーは姿を現す。弱い者を傷つけようとする貴様たちを許すわけにはいかない」

しかし、アクセルは不気味な声のあからさまな挑発に乗るような弱い男ではない。足を止め、敢えてエンジンブレードを下げた上で、堂々と受けて見せる。

むしろアクセルを驚かせたのは、初めて相対したはずのドーパントが仮面ライダーの存在を知っていたことだが、もしこのドーパントに変身しているのが山波ならばそれも不自然ではない。ただ、その確証は欲しいところだった。

「私は……この怒りを鎮めるために動くまでだ。邪魔をするのなら、誰であろうと容赦はせん！」

異様な和音を奏でる声でドーパントが叫ぶが早いか、背中の翼を振って炎のつぶてを前方に投げつける。

小型の隕石よろしくばら蒔かれた燃え盛る球を、猛然と駆け出したアクセルがエンジンブレードで次々と叩き落としていった。重く厚い刃が振られる度、砕かれた炎が細かい火の粉となって散り、アクセルの周囲を舞っていく。

その後ろからは、未来が狙いすました弾丸をドーパントの赤く輝く巨体目掛けて何度も放っていた。乾いた破裂音が熱を孕んだ空気を打ち、無慈悲な鉛弾が幾つも空を裂いて飛来する。その隙間を縫うように走るアクセルはたちどころに敵へと肉薄し、エンジンブレードの一撃を喰らわせんと刃を鋭く引いた。

だがドーパントは、二人の即興コンビネーション攻撃が開始されたと悟るや否や、再び宙へと駆け上がる。不規則な赤い輝きを放つ異形の影はエンジンブレード攻撃を空振りさせると、鋭く空中で旋

回し更に高度を上げた。今やドーパントは目視で軽く十メートル以上の高みにまで飛び上がっており、既にアクセルの攻撃範囲外だ。
「空だからって、安全とは限らないんだよ。サイボーグをなめるな！」

その様子を目にした未来が不敵に呟き、グロツクの銃口を空に向けて構える。地上と違い殆ど遮蔽物のない空中で、ドーパントは格好の的だった。サイボーグの彼女は人間と桁違いの動態視力を持っており、片手で銃を撃つても反動で手が跳ね上がることもなく、極めて正確な射撃が可能なのだ。

とにかく敵を地上に落としてやろうと、翼を狙った未来がグロツクの引き金を絞り、連続した射撃音を響かせた。

ところが上空のドーパントは、まるで弾丸が飛んでくる軌跡を予め知っていたかのように急激に飛翔速度を上げた。

いや、早くなったと言う形容は相応しくない。

ただの人間の身ならぬアクセルや未来が意識を集中させてその動きを追っても、どう動いたのかが殆ど判別できないほどの移動速度であった。恐らく、常人には瞬間移動したとは思えないほどの素早さだろう。

当然のことながら、未来が撃ち込んだ弾丸は全て、虚しく見当違いの方向へと飛んでいっていた。

ドーパントがまたも急旋回し、今度は地上に向かって一気に降下する。

「今だ！」

輝く巨体が着地すると見たアクセルが炎の中を走り、エンジンブレードを振り翳す。が、ドーパントは一瞬地面を蹴って弾みをつけただけで、軽々とアクセルの頭上を跳び越して襲い来る刃を避けた。そこへアクセルとは異なる方向に走る未来が構えるグロツクが連続で火を吹き、様々な角度から弾丸を叩き込もうとする。

しかし全弾が敵に掠りさえもせず避けられたことは、未来の顔を驚愕でこわばらせることとなった。

「ちょっと！何なの、この速さは！」

常人の500倍の視力、野生動物を遥かに凌ぐ反応速度と動態視力を誇る未来の攻撃が相手の速度に追いつけないなど、信じ難い事実である。拳銃という武器の命中精度が低いことを差し引いても、弾道を瞬時に見切るなど、それこそサイボーグ並みの能力がなければ不可能なはずだった。

ドーパントは怪人とは言え、ベースは戦闘のイロハも知らないただの人間に過ぎない。それを戦闘用サイボーグを凌ぐ肉体の持ち主に变化させるとは、ガイアメモリとは何と恐ろしい物体なのだろう。「二人がかりでも全く追いつけないだろ？」

未来が動揺しながらも射撃を続ける中、アクセルも高速移動を繰り返すドーパントを追って斬撃を浴びせ続けたが、やはりただの一度も命中しない。飛び道具と剣の合体攻撃でも全く歯が立たないなど、アクセルにとっても予想外であった。

「ふん。仮面ライダー……それに、実験体風情のP3めが。お前たち如きに、私の邪魔ができると思うか！」

一旦距離を離して地面に着地したドーパントが嘲りの言葉を二人に投げつけて、背中の中翼を一閃させる。

刹那、その中から広がった炎が無数の小さな弾に分かれて殺到してきた。

「うおっ！」

「きゃっ！」

アクセルと未来は自身の身を守るために別々の方向へと素早く飛び退ったが、彼らの前方には二メートルを超える火柱が厚く立ちただかっていた。

「くそっ、これでは近寄れん！」

燃え盛る炎に視界すら阻まれたアクセルが悪態をつく。

敵の姿が見えないのは未来も同じであったが、彼女は使えなくなった視覚という偵察機能の一つを補うために、意識を集中させて聴覚のレベルを引き上げた。火が燃えるノイズを小さくするよう調整

し、地面を何かが擦る音と話し声のみをフィルタリングして拾うようにする。

すると、予想もしていなかった眩きが未来の耳を打った。

「健太……健太はどこだ」

「え……！」

ドーパントは間違いなくそう言っていた。

意外さに息を飲んだ未来が、数歩離れた位置に立つアクセルに向かって声を張り上げた。

「まずいよ、あいつの狙いは健太くんだ！」

「何だと？」

「ごうごうと音を立てている火の壁の向こうから、アクセルの引きつった声が聞こえてくる。」

身を焦がすほどの熱波に顔をしかめつつ、彼女がもう一度叫んだ。

「今、名前を呼んでるのが聞こえたんだよ！」

厚く高い炎の壁の向こうへ邪魔者を追いやったドーパントは、施設のポーチへと迫っていた。高温を発する巨体が一步踏み出す度に熱波が撒き散らされ、一気に気温が上昇する。

アクセルや未来が戦っている様子を不安そうに眺めていた子どもや女性職員たちは、異形に恐れおののいて悲鳴を上げ、玄関の奥へとなだれ込んでいった。

「健太……私の研究を完成させるには、私と同じ遺伝子を持つお前が必要だ。どこにいる、健太！」

「えっ？」

建物の中へ駆け込む人の流れにいた亜樹子と健太が、ドーパントの言葉を耳にして足を止めた。止まってはならないと思いながらも、逆らえなかったのだ。

自分と同じ遺伝子を持つ健太が必要。

逃げる人々に目を走らせているドーパントは、今確かにそう言った。

加えて、研究を完成させるとは一体どういう意味なのか？

健太の父は、ディガル・コーポレーションでガイアメモリの開発を進めていた研究員だったはずだ。行方不明になってからも開発にのめり込んでいたのだとしたら、当然実験も重ねていただろう。

亜樹子と堀内に、嫌な予感が走る。堀内にしがみついている健太にはドーパントが言ったことを理解できていないらしいことが、まだ救いと言えるだろうか。

が、固まっている三人の中に健太の姿を見つけたドーパントの言葉が、その僅かな希望を打ち砕くこととなった。

「健太……健太！暫く見ないうちに、大きくなったな。我が息子よ。父さんだ。こっちへおいで」

心なしか我が子との再会を喜び、懐かしむ響きが混ざったように

聞こえる声はしかし、やはり双頭から発せられる怪人のそれである。やはりあのドーパントは、健太の父親である山波勇雄に間違いない。

しかも彼は健太を研究材料として確保するために、自ら姿を現したのだ。今までずっと父を恋しがっていた健太のことを思うと、考えうる限りで最悪のシナリオだった。

「やだ！やだよお！ちがうよ、おとうさんじゃない！」

しかし、炎を纏った双頭の怪物に人間とは異質な声で父親だと言われても、健太が信じられるわけがない。まだ幼く小さな男の子は堀内にしがみつき、真っ赤な顔を歪めて泣き喚くばかりだった。

「何よ……まさか本当に、あのドーパントが健太くんのお父さんだつて言うの？」

「くそっ……」

驚愕に不快さを滲ませて呻く亜樹子の横で、健太を抱きしめている堀内が歯噛みする。

ゆっくりと歩み寄ってくるドーパントは、健太の小さな背中につすぐ腕を伸ばしている。狂ったように泣き続ける健太の痛々しい様子など、まるで意に介していない。その様子に業を煮やしたらしい亜樹子が、緑色のスリッパを片手に立ち塞がった。

「ええ加減にしい！それ以上近寄ったら許さへんで！」

「あつ、ちよつと！」

勇ましいが、亜樹子の行動は浅慮極まりない。

彼女は堀内が止める間もなくドーパントに殴りかかったが、構えられたスリッパはドーパントの身体に触れることなく遠ざかった。

「熱っちちちち！」

甲高い悲鳴を上げて飛び退いた亜樹子が振っているスリッパは火こそついていなかったが、ぶすぶすと音を立ててくすぶり、薄い煙すら上げている。ドーパントが瞬時に身体を加熱させたのだ。

少女のように見える女性が慌てふためく様子などまるで無視したドーパントは、堀内と健太にじりじりと迫り続けている。身を縮こ

まらせた堀内は武器も持つておらず、それ以前に恐怖と緊張に縛られた身体が言うことをきいてくれない。成す術なく後ずさり、大声で泣き叫ぶ健太を決して離すまいとするだけで精一杯だった。

「どうしたんだ、健太？まさか本当に、父さんの顔を忘れてしまったのか？」

「こわい……こわいよ！おにいちゃん、助けてよお！」

怪物にどれだけ父親だと言われても、信じられるわけがない。ドーパントが伸ばす手をひたすら怖がる健太は絶叫し、堀内の腰にしがみつくばかりである。

「健太、お父さんと一緒においで。元気になりたくないのか？お父さんの言う通りにすれば、お前は強い身体に生まれ変わることができる。もう死ぬのを怖がることもなくなるんだぞ。だから、一緒に来るんだ」

健太の泣き声が、ぴたりと止んだ。

ドーパントの声が、途中から人間の肉声に変わったのだ。

頼りにしている青年の腰から涙でぐしゃぐしゃになった顔を上げ、健太は恐る恐る後ろを振り返った。

「おとうさん……ほんとに、おとうさんなの？」

それが誰よりも会いたいと願っていた、記憶の中の父と同じだということがわかったのだろう。幼い少年の声は震えていたが、落着きを取り戻し始めているようだった。

「そうだよ、健太。長い間待たせて、本当に済まなかった。やっと、お前を迎えに来られたんだよ」

ドーパントの口調が更に感情を滲ませたものとなり、堀内と健太の間近まで近寄っていく。

健太はゆっくり身体ごとドーパントの方へ振り返り、ふらりと堀内から離れようとしたが、青年はその小さな肩をしっかりと押さえていた。

「その声……まさか、あんたは……？」

「やめてよ……最悪じゃない、こんなの！」

堀内の小声に、愕然とした亜樹子の眩きが被さる。

いくらあのドーパントが健太の父親で、病気を治してやるなど甘いことを言っているとしても、本音は実験材料が欲しいということだけに間違いないだろう。もし本当に健太を純粋な愛情から迎えに来たのなら、ドーパントの姿で訪れるわけがない。自分本来の姿を息子に見せることすら忘れてしまうほど、山波の精神が汚染されている証拠だ。

が、幼児にそんなことが読めるはずもなく、このままではやすやすと健太をさらわれてしまう。

「くそっ……くそっ！」

堀内は青い顔でぐくぐと膝を震わせながらもドーパントを憎悪がこもった目で睨みつけ、スーツのポケットに片手をつっ込んでいく。その中にお守りでも入れているのか、亜樹子が遠目から見ても手を固く握りしめているのがわかるほどだ。

たとえ本当の父親であっても、こんな化け物に健太を渡すわけにはいかない。なのに、自分はこうすることもできないのか――

堀内の悔しさで満ちた表情は、言葉を発しなくてもそう語っている。

亜樹子が気弱そうな青年の悲しい怒りを見た時、不意に不規則な風の流れが四方八方から起こり、熱風が渦巻いた。吹き荒れる突風に二人分の男の声が乗せられ、周囲に散らされる。

「ジョーカー・サイクロン・キック！」

竜巻を纏い、上空から飛び込んでドーパントに蹴りを浴びせたのは、ようやく駆けつけてきた翔太郎とフィリップ、つまり仮面ライダーWであった。全フォーム中で圧倒的なスピードとパワーを誇るサイクロン・ジョーカーから繰り出された強烈な技を喰らい、ドーパントが悲鳴を上げて弾き飛ばされる。

地面に鮮やかに着地したWは、体勢を整えてからドーパントが派手に倒れ込んだ方を指した。

「子どもにまで手を出そうとするんなら、男の風上にも置けねえ奴

だ。俺たちがきつちり……」

「アホお！来るのが遅すぎだつちゅーねん！」

台詞を決めようとしたWの頭に、亜樹子のスリッパの一撃がクリンヒットする。

「痛っ！」

小気味よく響いたコミカルな打撃音に続きを中断させられ、翔太郎が声を荒げる。

「何すんだよ、亜樹子！」

「ごたくはいいから早く何とかしてよ、酔っぱらい！」

「もう酔っぱらいじゃねえ！それに、そんなこと言われなくなつて分かつてらあ！」

憤慨しつつも普段のペースを取り戻した亜樹子を残し、Wがまだ炎の残る庭へと駆け出していく。

翔太郎は少し前まで頭痛と吐き気が酷かったが、今はWに変身して激しく動き回っても、亜樹子の一撃を頭にお見舞いされても全く平気だ。全く起き上がれないほど辛かった二日酔いが時間の経過とともにけろりと治ってしまうのだから、人間の身体とはよくできたものである。

たとえそれが治療と称されてフィリップに無理やり飲まされた、唐辛子が大量に入った激辛スープのおかげだとしても、である。

隅の方まで吹っ飛ばされたドーパントが立ち上がったところで、二人で一人の仮面ライダーは立ち止まった。

火があちこちで燃える施設の庭を見渡すことは困難で、先に来ているはずの照井や未来の姿はそこに見つけられない。とりあえずは、単身で戦うしかないようだった。

「くそっ、二日酔いのお陰で出遅れちまった。また新手が出たつてのかよ！」

「ああ。この間僕たちが見たラストとは、どう見ても別の個体のようだ。炎を操るドーパントか」

数メートル隔てて対峙する格好となり、翔太郎とフィリップは改

めてドーパントの姿を確認した。

「ふん。何かと思えばもう一人の仮面ライダー、Wか。まさか貴様までが現れるとは思っていなかったな」

またもWの蹴りを喰らっていた炎のドーパントだが、口調は平然としており、さしてダメージを受けているように見えない。物理攻撃に対して高い耐久力を持つ相手だと見ていいだろう。

「こいつ、また俺たちのことを知ってるドーパントか」

「ということは、ベースの人間がミュージアムの関係者の可能性が高い。タイミングから考えても、恐らく山波勇雄に間違いないだろう」

翔太郎の呟きに、フィリップが冷静な分析を返す。

「遅いぞ、左！」

そこへ、炎が鎮火しかけた場所をすり抜けたアクセルと未来が走ってきた。

火で照り返しを受けて赤い顔をした二人とも息は多少荒いが、目立った傷はなく疲れた様子もない。これなら十分、協力して戦えそうだ。彼らが元気であることを見て取ったWが片手を挙げて応えて見せる。

「ああ、悪いな。その分、借りはきっちり返すぜ！」

アクセルとWが並んで構えると自然と未来がその後ろに立つ格好となったが、周囲を炎で囲まれたこの状況では、生身の彼女は分が悪そうだった。この場は取り敢えず後ろに下げた方が無難であろう。

「未来さん。君は、あきちゃんたちを頼む」

そう判断したフィリップが未来に促すと、彼女は頷いて建物の方へと走っていった。見たところ彼女は火傷を負っておらず、服や髪も焦げたところはない。直接戦えないことにも不満を漏らしていない未来に、後方の守りを任せて正解のようだった。

「ここで戦い続けるのは、被害が大きくなる可能性が高い。とにかく、何とかして奴を追い返すことを第一に考えねばならん」

「同感だ。ここは女、子どもが多過ぎるからな！」

ドーパントを睨むアクセルの案にWが賛同の意思を示し、彼らは同時に地面を蹴って走り出した。敵の巨体へまっすぐに突進した二人のヒーローが、気合の声とともに挑みかかる。

ドーパントはアクセルが鋭く払ったエンジンブレードを半身になつてかわすと、続くWの拳を片手で受け流して勢いを殺いだ。Wが振り返るよりも早くその背に肘を落とし、アクセルの胸板には蹴りを見舞う。打撃攻撃を受けた二人は前後から同時に上下段へ刃と蹴りを叩き込もうとしたが、またしても避けられてしまい、勇んだ攻撃は虚しく宙をすり抜けた。

それから先は同じことの繰り返しで、二人の仮面ライダーの同時攻撃を以てしてもドーパントにダメージを与えることは叶わない。しかしそれはドーパントも同じであり、ヒーローたちに大きな痛手を被らせることはできないようだった。

「おかしい。この狭い場所では、奴のスピードが全く活かされないのに、何故場所を移そうとしないんだ？」

一旦間合いが離れた時、相手の特徴を既に見抜いていたフィリップが疑問を口にした。

「奴の狙いは息子の健太だ。どうあってもここから連れ出すつもりでいるんだろう」

「何？ガイアメモリを狙って来たんじゃないってのか」

照井の言葉に翔太郎が意外そうな反応を示すと、彼らの眼前に佇む双頭の赤き巨体は不気味な嘲笑を漏らした。

「ふん、貴様らには到底理解できまい。あの子をあんな身体でこの世に送り出してしまった、私自身に対する怒りなど……だから私は、あの子を絶対に死なない肉体に作り変える。ガイアメモリを使えば、それが可能なのだからな！」

呟くように言うと同時に、ドーパントの姿が仮面ライダーたちの目の前からかき消えた。

二人はドーパントのスピードに目が追い付かずそう感じ、敵が遙か頭上を飛び越して背後に回ったことに気づくのに数秒を要した。

「しまった！」

その先には健太と堀内がいる。

アクセルとWが自らの迂闊さを呪って走り出したとき、着地したドーパントは無力な幼児とその身を抱きしめている青年に迫り切ろうとしていた。

が、異形なる巨体と掴みかかろうとする腕に怯えて一步も動けなくなっている二人の前に、小さな影が鋭く割り込んだ。瞬間、乾いた破裂音の衝撃が空気を叩く。

「所長……」

すぐ目の前に突如として現れた未来の後ろ姿を目にし、堀内が驚愕の表情を凍りつかせて呟いた。

彼女が放った弾丸はドーパントの胴体に狙い違わず命中していたが、予想通りと言うべきだろうか、目で見てわかるほどのダメージを与えられたように見えなかった。

だが、臆せずにグロックを構えた右手はなおも連続でトリガーを引き続け、休む間もなく鉛弾を撃ち出し続けている。

一見すると愚かかつ無謀とも言える行動に、ドーパントがむっと唸って立ち止まる。未来は素早く空の弾倉をグロックから取り出して投げ捨てると、新たなそれをポケットから取り出した。

「騙されちゃだめ！あいつは、健太くんのお父さんなんかじゃない。悪い奴なんだよ！」

そして銃弾が詰まった鉛箱をグロックの台尻から装填し、再び右手に構える。

「何だと？」

背後に護る二人を振り返らずに言い放った未来の言葉に顕著な反応を見せたのは、アクセル――照井である。思いがけず足を止めた彼は、怒りに燃える瞳でドーパントを睨む未来を何も言わずに凝視したようだった。

「……おねえちゃん？」

堀内の腰にしがみついていた健太が泣き濡れた顔を上げ、未来

の背中を見つめる。

「とにかく今は、お兄ちゃんと一緒に下がって。悪い奴は、お姉ちゃんたちがやつつけるから！」

しゃくり上げている健太を安心させるため、未来は僅かに顔をドーパントから逸らして彼に力強い微笑みが見えるようにした。その意図を汲んだ堀内が、健太に覆い被さるようにして抱きしめ、玄関の奥へと下がっていく。

「あの子は、父親の私を間違いなく恋しがっている。なのに、貴様はその想いを壊そうと言うのか？」

「黙れ！てめえの子どもを手につけようとするなんざ、他人以下だつてんだよ！」

憎悪を剥き出しにした未来が怒鳴るが、彼女はサイボーグであっても仮面ライダーではない。そんな小娘一人は大した脅威でないと踏んだドーパントが、今度は未来を業火に巻こうと腕を振り上げる。しかしその攻撃は、横合いから横殴りの雨のように襲いかかってきた光の弾丸に阻まれた。

「君はドーパントに対して有効な攻撃手段を持っていない。無茶はやめるんだ！」

いつの間にかサイクロン・トリガーフォームにチェンジしたWが、トリガーマグナムをドーパントに撃ち込んで彼女を救ったのだ。

冷静さを保っているフィリップの声に耳を打たれた未来が我に返り、大きく後方へ跳んで間合いを取る。

「こいつをくれてやる！」

その隙にアクセルがエンジンメモリを取り出し、スイッチを弾いた。

「ENGINE！」

特徴あるガイアウィスパーが上がるとほぼ同時に、エンジンブレードのスロットを開く。小さな隙間に地球の記憶を滑り込ませようとした。

刹那、つい数日前にメモリブレイクを受けて昏倒し、今日明日の

命とも知れぬ身となった永峰の姿が脳裏を横切る。

アクセルの指先は一瞬だけ躊躇するように跳ね上がって動きを止めたが、すぐにメモリをセットした。

赤き鎧の仮面ライダーが力の源を内に収めたエンジンブレードを構え、刃先をドーパントに向けてトリガーを引く。

エレクトリック
「ELECTRIC！」

長大な剣から稲妻にも似た青白い光が散り、歪な軌跡を空中に描いてドーパントへ飛ぶ。アクセルが刹那の逡巡の後に選んだのは、メモリを使用者の体内から強制的に取り出して砕くメモリブレイクではなかった。

「ぐっ！」

攻撃方向が読み辛い利点を持つ電撃はドーパントに間違いなく命中し、体表に火花を散らした。が、正面からまともに喰らったはずの敵は僅かに呻いてよろけただけに留まっていた。

「くそっ、効いてねえぞ！」

「思ったより手強いな」

これで戦意を喪失させられると見ていたWが齒噛みし、感情を乗せずに呟いたアクセルがエンジンメモリを抜き出す。

「こんな攻撃もあったとは、面白い。どんどん技を使え。その方が、次の戦で私が有利になるのだからな。もっとも、貴様らにこの次があればの話だが」

「こいつ、ふざけやがって！」

見え据いた挑発に乗った翔太郎がドーパントの前に躍り出て、接近戦を挑みかかる。

確かに技を使わずに戦うとすれば近接格闘しかないが、それにしても翔太郎はいささか気が短すぎる。

「照井警視！今の、もう一回やって！」

頭の隅で考えつつ加勢しようと踏み出したアクセルを、いつの間にか側まで来ていた未来が呼び止めた。

「何？どういうことだ」

不信感が表に表れた声でアクセルが問い返すと、未来が無造作に手を顔の横まで上げた。

彼女の細い指先から白い光が細い線となって迸り、ばちばちと音を立てて火花を散らしている。先にエンジンブレードで発生させた現象と全く同じであった。

「私が力を貸すから。早く！」

彼女の意図を読み取ったアクセルが無言で頷き、再度エンジンメモリを武器のスロットに装填する。

「エレクトリック ELECTRIC！」

今一度響いたガイアウイスパーは、ドーパントと打撃の応酬を演じているWの聴覚にもたらされていた。電撃はこのドーパントに対して大きな効果は持たないとわかっているのに、再度同じことを試みるなど、照井らしくない行動だ。

Wのボディでフィリップが考えたその時、未来の鋭い警告が飛んできた。

「翔太郎、フィリップくん！よけて！」

今度は反射的に翔太郎が横へ跳び、ドーパントとアクセルが対峙する格好となる。

突然離脱したWに驚いたドーパントに身構え直す隙を与えず、エンジンブレードが発するまばゆい閃光が宙を走り、一瞬で獲物を捉えた。

一直線に伸びた電撃が持つ高エネルギーが一瞬で目標を打ち据え、破壊音と青白い爆発とがドーパントを襲う。異形の巨体で幾つも爆ぜる光も、尋常ではない。数も大きさも、先にアクセルが喰らわせた電撃の倍以上はある。

「ぐおっ！」

初めて、ドーパントの二つある口から苦鳴が上がった。

小さな稲光にまわりつかれたドーパントの全身は焦り、薄い煙さえ上げている。電撃が確実に効いたことを見届けた未来は、照井が構えるエンジンブレードの刃に触れさせていた掌を離れた。

ドーパントは相当なダメージを負ったようだが、無理もない。

未来が体内に蓄えた電池から指先に埋め込まれている電極に集められる電気は、高圧電流にも匹敵する強さを持つ。それをエンジンブレードが放つ電撃に上乘せして相乗効果を狙ったのだから、大概の生き物ならば感電による即死も免れないはずだ。

それを短時間とは言え耐え抜いたのだから、ドーパントの生命力は恐ろしく強いと言えよう。

「おのれ……健太は、我が息子は必ず取り返す。絶対に諦めんぞ！」
相手が倒れなかったことを受けてまだ臨戦態勢を保っていたアクセルと未来であつたが、煙の中で奇妙な和音の恨み節を口にするドーパントの言葉は、どう聞いても捨て台詞だった。幾らか弱まった炎に守られた怪物が、未だ構えを解いていない戦士たちを一睨みしてから両足をたわめ、空へと駆け上がる。

自然界にはありえない不規則な風切り音を残しながら、ドーパントはビルの谷間へと姿を消した。

敵の姿がどんどん小さくなるにつれ、地面でしぶとく燃えていた炎もみるみるうちに鎮火していく。火を燃やし続けるのも、あのドーパントの能力の一部だったのだろう。ようやく静けさが戻ってくる兆しがはつきりして、一同は安堵の溜息を漏らしていた。

「どういう仕組みかよくわからんが、あんな攻撃方法があつたのか」「エンジンブレードの電撃に彼女の持つ電流を上乘せして、威力倍増を狙ったのか……なるほど」

翔太郎とフィリップは周囲の状況を確認しながらWの中でアクセルと未来の連携攻撃のことを思い返していたが、当の彼女は徐々に鎮まっていく足元の炎をもみ消して吐き捨てていた。

「何さ。父親の自分が健太くんをひとりぼっちにしたくせに、私たちから取り返すだなんて人聞きの悪い」

ドーパントが去り際に残した一言がよほど気に障ったのか、彼女の口調はやけに苛立っているように聞こえる。

「おい」

だが、荒っぽい所作で火を消している若い女の腕に、輪をかけて雑に手をかける男がいた。

変身をWよりも先に解除した照井が未来の隣へ歩み寄って彼女の細い腕を乱暴に引き、押し殺した口調で言った。

「君はあのドーパントが健太の父親ではないと、あの子に向かって確かにそう言ったな。やっと父親が見つかったと、そう喜びかけていたあの子に」

照井の話し方はゆっくりとしたものだったが、瞳は爛々とした怒りの感情を湛え、肩が震えているのがわかるほどだ。

意識して話さなければ、感情が爆発しそうになっているのだ。

「……言ったよ。それに何か問題があるの？」

大人の男さえ怯ませるほどの圧力を持つ視線を真正面から受け止めた未来の言い方も、普段より重い。温度の低い声と言うべきか、何人も内に踏み込んでくることを許さない、冷たい拒絶感をそのまま音にしたような声であった。

照井には、未来の考えていること全てが理解不能だった。

理解不能と言うよりも理解すべきものではないと、自分の中の理性と感情とが同時に囁いた気すらした。

どんなに姿が変わっても、血の繋がった家族という存在は絶対のはずだ。

まして、自分という存在をこの世に生み出してくれた親を否定するなどありえない。

誰よりも自分を愛してくれる、親という人間。

健太は長らく離れていた父をようやく見つけて、認識しようとしていた。

それをこの女がぶち壊しにして、あまつさえあの幼い子の真実を見ようとする瞳まで否定した。

他人が涼しげな顔で親と子の絆をめちやくちやにするなど、絶対に許されるべきではないはずだ！

「ふざけるな！貴様、どういつつもりで……」

言葉の半ばで照井は反射的に未来のジャケットの襟を掴み上げ、愛らしい顔に拳を叩き込みんと腕を振り上げた。

「待てよ照井！何やってんだ！」

突然怒りを爆発させた照井の様子を目にして慌てたのは、Wを始めとする仲間たちである。

変身を解除していなかったのが幸いし、駆けつけたWが未来を殴ろうとした照井の拳を間一髪で掴むことができた。

「やめて、竜くん！一体どうしちゃったの？」

そして、全力で走ってきた亜樹子が照井と未来の間に割り込む。

今にも泣き出しそうな不安定な顔で見上げてくる亜樹子から目を逸らし、照井が未来の襟を掴んだ手を離れた。

亜樹子はやや呼吸を荒くしている婚約者を落ち着かせようとしてそつと手を握ってやったが、照井の目は離れていった未来を睨んだままだ。

彼女はゆっくりと足を進めて更に数歩離れると、振り返って若き警視の顔を見返した。

歳の割に幼く見える顔に輝く大きな瞳はただ、照井の突き刺すような視線を受け止めている。

異形が去りし地に残されたのは、相容れることを良しとせぬ若者たちの激しい感情であった。

一同の棘を孕んだ空気は、そのまま鳴海探偵事務所まで持ち込まれていた。

照井と未来は互いに一言も言葉を交わさず、隣に立とうとすらない。二人の間を隔てている胃が痛くなるほどに張り詰めた緊張感、翔太郎やフィリップの口まで重くさせていた。

新たなドーパント、しかも先日見たラストとは別にかなり手強い個体が現れたことや、その正体が健太の父親の山波であること、そしてその目的が息子であることなど、精神的にずしりと来る事実が今日だけで数多く判明した。その上、未来と照井の仲が一気に険悪になったのである。まだ元気を辛うじて保っていられるのは、子どもである健太ぐらいのものだった。

機械用のオイルと金属臭が漂うガレージに時折彼の笑い声と、相手をしてやっている亜樹子や堀内の声が響いてくる。時間はそろそろ夕方五時を回ろうとしていたが、健太はドーパントの再来襲に備えて鳴海探偵事務所で預かることにしたのだ。

「ずっとこのまま黙ってても、何の解決にもなんねえ。これからどうするかを決めねえとな」

ガレージでコンクリートの冷たい壁にもたれていた翔太郎が、力を抜いていた背筋を伸ばす。

彼は未来と照井の様子がおかしいことに今まで口をつぐんでいたが、いつまでも黙っているのは性に合わなかった。

「賛成。全く以て、建設的じゃないしね」

リボルギャリーの内部に降りる階段付近に佇んでいた未来も、翔太郎の意見に同意を示して見せる。彼女はついさっき、戦える者だけで今後を話し合うために秘密の場所に初めて案内されていた。最初の数分程度は物珍しそうに周囲を見回していたが、これが初めて発した一言である。

徐々に発言できる空気を取り戻している場に従って、壁際の作業デスクに座っていたフィリップも立ち上がった。

「あのドーパントは、怒りという言葉は何度か口走っていた。恐らく『ラース』メモリを使用して変身したんだろう」

天才少年はいつものようにマーカーを手にしてホワイトボードまで歩み寄ると、癖のある字でメモリの名前や特徴を書き込んでいった。

「確かそれも『七つの大罪』の一つだったよな」

マーカーがボードの表面を滑る音に首を傾げた翔太郎の声が重なり、フィリップが説明を続けていく。

「憤怒を表すのがラースだ。そしてメモリの使用者は、健太の父親である山波英雄に間違いない」

フィリップは更にメモリの特徴の横へ使用者の名前と目的を書き込み、ぐるりと円で囲って見せた。

「ラースの狙いは、息子の子太だ。奴の言葉からも、息子を不死の肉体の持ち主に作り替えるという目的が明らかになっている。そのためにはガイアメモリが必要だったこともはっきりした」

そして彼は、事件の鍵となるドーパントの目的とその実現手段の関係を線と矢印で結びつけ、わかりやすい図解にした。

相棒がホワイトボードに描いた図を確かめながら、翔太郎が指を顎に当てて状況の整理にかかる。

「不死の肉体に作り替えるって、一体どういうことなんだ？」

「ガイアメモリは、使用者の細胞レベルで作用する効力を持つ。その特性を応用して、肉体の構造をそっくり変えるんだろう。ただし本当にそんなことが可能かどうかは、誰にもわからないはずだ……よしんば成功したとしても、人間とは全く異質な生命体になる危険性が高い」

黒のインクで描いた図を示しながらも、フィリップが説明する声には張りが無い。

翔太郎にミュージアムから助け出される以前、自分はガイアメモ

りを何も感じることなく作り続けていた。今口にしたことも全て、その頃に得た知識から導き出した結論である。当時は人間を使った実験も当たり前であり、失敗例もその過程で多々目にするがあった。

まともな感情を持つ人間ならばとても直視できないことをやってのけていた、意思を持たず決断もしない、ただ生きていたというだけの存在。

それこそが鳴海壮吉から償うよう諭された園咲来人の、つまりフィリップの罪である。

自分と向き合うためにも、事件を真正面から冷静に見つめて分析し、害をなすドーパントと戦わねばならない。

しかしいくら恩師からの言葉とは言え、彼にとってのアキレス腱となる家族の問題について触れるのは、いささか過酷な要求だと言えよう。ガレージの薄暗さのせい、普段より一層優れないフィリップの顔色を見るにつけ、翔太郎はそう感じざるを得ない。

心配そうに相棒を見やる翔太郎の側まで歩み寄ってきた照井が、平坦な調子で質問を投げた。

「そんなことが可能なのか」

「確実なことは僕にもわからない。ミュージアムでも、そんな類いの実験がされた記録はないんだ。ただ一つ言えるのは、極めて危険ということだ」

額に指先を当てながら溜め息をついたフィリップが、軽く頭を振ってから再びホワイトボードに向かう。低く抑えた声に、マーカールが継続して文字と簡素な図柄を描き続ける摩擦音が被さった。

「ガイアメモリは遺伝子に干渉して、肉体を作り替える。しかしその力の大きさに人間が長く耐えられないことは、君たちも知ってるんだ。それをあんな幼い子どもに、しかも不完全なメモリを使うとなれば、何が起きるか予測がつかない」

「最悪の場合はどうなる？」

「肉体が耐えきれずに死ぬか、一度の変身でメモリに全てを食い尽

くされたドーパントになる。その場合、恐らく二度と人間に戻れない。心も身体も」

仲間のうちでガイアメモリに一番詳しい少年が出した残酷な推測に、残る三人の男女が息を飲む音が閉鎖空間で大きく上がる。

続いた照井の短い質問にフィリップが答えた頃には、ホワイトボードを細かい字がびつしりと隙間なく埋めていた。もう書き込める場所がなくなっただけ、彼はマーカーに蓋をしてポケットに収めてから自らが描いた複雑な図を指でなぞっていく。

「ガイアメモリの技術を転用した場合は、人間を使った実験が不可欠だ。恐らく山波は、最初に自分の身体で実験したんじゃないだろうか。奴は、自分と同じ遺伝子を持つ存在にこだわっている。息子を求めているのも、多分自分だけでは飽き足らなくなったせいだろう……」

フィリップの説明は、やはり最後の方がひどく苦しげである。小さな声で言葉を終えた彼は、ホワイトボードから下ろした指先を追って視線も床に落とし、俯きがちになっている。

「奴の汚染の度合いはそこまで高いのか？」

もつとも若い仲間の身を気遣う視線を見せてはいたが、照井の問いは続いた。

「あそこまで手強いドーパントだ。汚染というより、ガイアメモリと融合する手前だと言っていると思う。人間としての正気なんて、もうとつくに失われているだろう」

疲れた様子で、フィリップが作業用の椅子にどすんと腰を落とす。丈の長いパーカーに半身を隠すようにして椅子の背へ身を預けた少年は、目を閉じて再び深く息をついた。

「しかし、山波は健太を助けるのが目的だったはずじゃねえのか」
翔太郎が怪訝そうな表情を見せると、今度は未来が口を挟んでくる。

「あの様子じゃ、とてもそうとは思えないよ。死の危険がある実験に自分の子どもを使おうなんて、正気の沙汰じゃないもの。人体実

験を思いつくだけでも、かなり気が狂ってるけどさ」

嫌悪感も露に吐き捨てた未来は、語気も荒い。本気でラース・ドーパントに腹を立てているらしく、大きな黒い瞳に強い感情が宿っているのは、この場にいる皆が嫌でも感じさせられた。

険しい表情を崩さない未来に一瞬だけ視線を向け、憔悴した印象のフィリップが翔太郎に応えておく。

「最初の頃は、息子のため必死にやっていたんだと思う。が、今は違うと考えたほうがいい。本来の願いが自分の感情や欲望と混ざり合って、『死なない身体の人間を作る』ことに執着しているんだ」
「本来の願いと感情が……そこに『ラース』のメモリが関係しそうだな」

宙を睨み、翔太郎がきつく腕を組んだ。

七つの大罪の一つ、「ラース」は激しい怒りを表す。

今はドーパントになり果てた山波を突き動かしていた原動力の根底にあるのが、自身に対する強い怒りだったのではないか。息子に先天性の病という重い枷を与えてしまい、助ける手段をなかなか見つけられず、ミュージアムに都合よく使われるだけの不甲斐なさを、心底から恨んだのではないのだろうか。

その上ミュージアム残党の追手である永峰がドーパントとなって襲ってくるのであれば、頼りにできるのが手元のガイアメモリしかなかったに違いない。メモリが司る力である強い怒りを常に感じていたのであれば、メモリの能力を引き出すのは容易かったと同時に精神の汚染も早く進む筈だ。

基は子を想う親の愛情故の感情だったのかも知れないが、それがメモリの毒によって歪められてしまったのだ。今は見る影もなかった山波の姿ではあるが、その根底に潜む問題は、善悪の二元論で語れる単純なものではない。

翔太郎が姿勢を変えずに考えを巡らせていると、未来が再度口を開いた。

「つまり……山波は、ただ単に実験動物として健太くんを欲しがっ

てるってことになる？」

彼女の口調は疑うというよりも、確認のそれである。答えたのは、フィリップのはっきりしない声であった。

「可能性は高い……ガイアメモリを開発していた者なら、あれがどれほど恐ろしいものなのかを知らないわけがない。まして、自分の子どもにあれを使おうなんて、思うはずがない」

フィリップが小さく発する言葉は、殆ど独り言のように聞こえる。内容は未来の確認に対するものであったが、発言自体は誰に向けたものでもないらしい。

肉親にもガイアメモリを使わせていた父、琉兵衛が今の山波と重なるのだろう。

フィリップには二人の姉がおりガイアメモリの使用者であったが、二人ともがそのために人生を大きく狂わされ、若くしてこの世を去るという悲しい結末に終わっている。そしてその渦中に叩き込まれていたフィリップが死ぬほど苦しんでいた姿は、恐らく翔太郎も一生記憶から消すことができない。

相棒の少年が殆ど無意識下で呟いたのは、きっとそうあって欲しかったという願望だったのであろう。

見るからに辛そうな彼の様子に、翔太郎の胸は鈍く疼いていた。

「そんなこと、許すわけにはいかないよ。やっぱり、何とかしてあのドーパントを倒さなきゃ」

フィリップの言質を取って気持ちを固めたらしい未来が、翔太郎の同意を求めて視線を送ってくる。事情を知る者としてはごく当然とも言える行動を取ろうとする彼女に、さしあたって反対する理由はない。半熟探偵は頷いて見せると、事務所に出るドアの方を向いた。

「ああ。何があっても止めるべきだ」

「待て！」

足を進めようとした翔太郎の前に、不意に赤い影が鋭い声と共に割り込んできた。普段であれば真っ先に動こうとしてもおかしくな

い人物の行動に、翔太郎の返す声が裏返りかける。

「何だよ、照井？」

至近距離で向き合うことになった男の名を口にした翔太郎は、そこにまた意外なものを見つける羽目となった。

若き警視たる照井の顔はフィリップと同じく疲れ果て、色を失いかけていたのだ。

「……永峰が死んだ。ここに来る途中で連絡を受けた」

彼が重い口を開いて告げた事實は、「七つの大罪」ガイアメモリをメモリブレイクで碎かれた人間の末路であり、これから進もうとしている道が棘のそれであることを示すものだった。

勢い込んでガレージから出ようとしていた翔太郎と未来の動きが止まり、双方の顔に驚愕の色が広がっていく。

「永峰って、あの『プライド』だった奴か？」

照井が無言で首を縦に振り、翔太郎の言葉を肯定する。

二人の仮面ライダーはこれまでの戦いほぼ全てでメモリブレイクを使い、ドーパントを倒してきた。

ドーパントの体内からメモリを強制排出させて粉碎し、基になっている人間の命を危険に晒さないこの技があるからこそ、彼らは安心して戦うことができていたと言っている。誰かの命を奪うことなく、ある意味安全に街の平和を守ることができるのだから、実にうまくできた仕組みである。

しかしそれが覆されたのだ。

何本ものメモリを取り込んでいたウェザー・ドーパントや、メモリブレイクの後に自ら炎に身を投じたテラー・ドーパントを除き、Wもアクセルも人を死に追いやったことはない。

それだけに、永峰が死亡した事実は重く青年たちの胸にのしかかった。

「それ……メモリブレイクされたから？」

一瞬で沈黙に支配されたガレージで未来だけが冷静に問い返したが、照井は答えない。

「これまでに俺たちが倒してきた相手に、心身に後遺症があっても死んだ奴は誰もいねえ。純粹な戦闘で負ったダメージがー」

「永峰も、未完成の『七つの大罪』メモリを使った人間だ。何らかの因果関係がある確率を捨て切れはしない」

翔太郎が未来の言葉を否定しようとするよりも早く、フィリップが可能性を肯定する。

ガイアエネルギーもそれに属するガイアメモリの性能も、まだま

だ未知のテクノロジーなのだ。その第一人者である天才少年が言う通り、全てをあり得ないこととして切り捨てるわけにはいかなかった。

未来が息をつき、一同の動揺を隠せない顔をぐるりと見渡す。

「メモリブレイクされたら、使用者は死ぬかも知れないってわけ？」
彼女が独り言のような呟きに、照井がきつく腕を組み、ホワイトボードの方に足を進めながら言った。

「だから、今回は迂闊に動くべきではない。何か別の方法を見つけから行くべきだ」

「おい……お前、それを本気で言ってるのか？」

有事の際には体を張って街を守らねばならない使命を帯びた照井らしからぬ発言に、翔太郎がぎょつとして駆け寄る。いくら決定打となる手段が見つかっていなくとも、まずはドーパントの居場所を突き止めて何とか追い散らしておくべきだと、翔太郎は考えていた。そして当然、照井もそれに同調すると思っていたのだ。

「けど、このまま健太くんがさらわれて実験台にされるのを、黙って見てられないじゃない！あいつ、また今夜のうちに襲ってくるかも知れないのに」

翔太郎と同じことを考えていたらしい未来が、照井に棘のある表情を向ける。

「そうは言っていない！ただ、不確定要素があるメモリブレイクを使うべきではないと……」

「メモリブレイクできないんじゃない、また同じことの繰り返しだよ。もしその間に、健太くんが本当のことを知ったらどうするの？」

具体的な代案を出せず、しかし感情的な態度で返してくる照井の曖昧な物言いに、未来は苛立ちを覚えているようだった。的確に追及してくる若い女の声が決してヒステリックな印象でないだけに、照井も何とかはつきりした答えを返そうとして、じっとガレージの床を睨んでいる。

「しかし……」

「だがそれでも、山波は健太の父親だ。僕たち他人が、そこへ立ち入ることは許されない」

が、言いかけた照井の言葉を繋いだのはフィリップであった。

どんな姿になろうと、子どもにとっての父親は父親なのだ。

フィリップー園咲来人の父である琉兵衛は、秘密結社ミュージアムの支配者であり、恐怖を司るメモリ「テラー」の使用者だった。父が変身したテラー・ドーパントがどれだけ風都の人々を苦しめ、悪魔の毒素で街を染めたかわからない。

だがそれでも琉兵衛は来人にとってたった一人の父親であり、自分をこの世に生んでくれた人物であることに変わりはない。

幼き日の記憶の中、姉や母と穏やかで優しい日々を過ごした父。強敵としてWの前に立ち塞がり、血を分けた息子や娘をも野望に利用しようとした父。

そのどちらも否定できなかったからこそ、フィリップは心が引き裂かれるほどの苦しみを味わったのだ。

彼は家族が他人を悲しませる苦しみと、家族そのものを失う悲しみを両方とも知っている。心に感じている痛みは、照井以上かも知れない。

まだまだ未完成な心に抱えられた傷の大きさを、翔太郎が相棒の悲痛な面持ちに見つけた時である。

未来の、冷徹とも言える声が鋭く空気を打った。

「……あんなの、人の親でも何でもなしよ。まだ被害が大きくないうちに何とかしなきゃ」

低い声が、一気に場の温度を急降下させたと錯覚するほどであった。

照井が顔を上げ、フィリップが息を詰まらせ、翔太郎が眉の端を跳ね上げる。三人の男たちの集中する視線を受けても、彼女は落ち着いた態度を崩さなかった。

「健太くんに勘づかれる前に、事を収める必要があるんだよ。自分勝手な親を持つことは不幸だけど、その欲の犠牲になるのはもっと

不幸なんだから。親は子どものことを第一に考えるのが自然なはずなのに」

未来の言葉の一つ一つが、フィリップの心を鋭く抉っていく。

親が子どものことを第一に考える。

世間ではそれが一般的であり、生き物の本能だ。

なのに、琉兵衛はまさに自分の欲のために家族を犠牲にした。

いや、ガイアエネルギーに取りつかれることさえなければ、父は優しい父のままでいたはずだったのだ。

フィリップが子どもだった頃の思い出の中にいる、穏やかな微笑みをくれた父。

父を狂わせ、家族を引き裂いたガイアエネルギー。

父の望みを叶えるために、ガイアメモリを作っていた自分。それを、フィリップは何も疑うことはなかった。

自分がミュージアムから脱出したのがそもその間違いで、ずっとあのままなら自分が不幸だなどと思わなかった？

父をガイアエネルギーの外に弾き出したことが、父にとって本当に幸せなことだったのか？

一体、どこから何が悪くなったというのだろうか？

今までに刻まれた記憶が心の奥底からとめどなく湧き上がり、様々な光景の渦が押し流そうとしてくる。その濁流に吞まれてわけがわからなくなり、ともに考えられない。

頭の芯に鈍く重い痛みを感じたフィリップは、額に手を当てて小さく呻いた。

「……俺はフィリップに賛成だ。家族の絆を、他人である俺たちに壊す権利はない」

照井の掠れた声が、痛みに顔を歪めるフィリップの耳に辛うじて入ってくる。

それに対する未来の姿勢はしかし、更に攻撃的になっていた。

「照井警視、あんた警察でしょ？犯罪者も人の親なんだからって、黙って見過ごすっての？とても警察の台詞だとは思えないね」

「何だと？」

社会的な立場のことにまで口を出され、さしもの照井も聞き捨てならなかったのだらう。努めて冷静に振る舞おうとしていたらしい声に、明らかな感情が戻り始めているのがわかる。

ここでまた二人が意見を対立させ、まとまりを欠くことは避けねばならない。

頭痛に襲われていても今だ醒めた頭脳を留めていたフィリップが、浅く早い呼吸のもとで言った。

「……メモリブレイクを使えば、死の可能性が……」

「そんなの関係ない。殺すしかないなら、そうするまでだよ」

苦痛を堪えて絞り出した少年の意見を、未来が冷酷な言霊の刃でばっさりと斬り捨てる。

再び照井とフィリップ、そして翔太郎の表情が凍りついた。

が、未来は男たちの様子などまるで気に留めずに先を続けていく。「むしろ健太くんは、父親がそんな状態になつてることなんか知らない方がいい。そうすればあの子の中には、父親が大好きだった頃の優しい思い出だけが残るもの。何も知らないあの子が傷つけられる前に、どうしようもない親をさつさと……」

そこまで平坦な調子で口を動かしていた未来の声が、唐突に途切れた。ひゅつと息が漏れる高い音上がり、赤い影がガレージの床を大きく踏み鳴らして小柄な女に迫る。

「貴様あ！もう一度言ってみろ！家族を無理やり引き裂くような真似は、俺が――」

目に燃え立つ怒りをたぎらせて未来の胸倉を掴んだ照井が、今まで必死に抑えていたであろう感情を露にして叫んだ。

手の甲に筋が浮き、指が白く見えるほどにきつく握りしめられた拳を振り上げ、未来の横っ面に叩き込まんとする。

「やめろ照井！お前、女の顔を殴るつもりか！」

そこで驚きのため思考が一時的に停止していた翔太郎が我に返り、慌てて仲間の手首を後ろから掴む。

照井は家族全員を惨殺された十字架を背負わされている故、肉親を蔑ろにするような発言に特に過敏であることは否めない。とは言え、女に手を上げるのは流石に度が過ぎている。翔太郎も、ここまで怒りを爆発させた照井の姿は久しく目にしていなかった。

「私を殴って気が済むんなら、好きなだけ殴んなよ！家族は大事かも知れない。だけど、親の言うことに子どもが黙って従わなきゃならない理由なんて、どこにもないんだから！」

だが、今だ照井にジャケットの襟を掴まれている未来は微塵も臆することなく、きつと照井を睨み返していた。彼女の大きな瞳は、今にも殴りかかろうとしている男の苛烈な視線と怒声を正面から受け止めるだけの強さを湛えている。それは、先の発言が決して浅はかな感情から導かれたものではないことを裏付けていた。

あんなのは親じゃない。

最低の親が殺されようが、何の罪もない子どもには関係ない。

以前から度々見受けられた家族の絆を否定する未来の言葉は、恐らく彼女の心の底にまで根を下ろした生き方の一部なのだろう。多分彼女自身、親をかけがえのない存在だとは感じていないに違いない。でなければ、自分を産み育ててくれた者に対して、そこまでマインスの思考を持つとは思えないのだ。

この女の考えることを自分に分かることができないだろうし、恐らく一生歩み寄ることもあるまい。

未来は対極の存在であり、理解の外側にいる人物なのだ。

それを悟った瞬間に照井の腕から力が抜け、乱暴に彼女の襟元から手を離す形になったが、本音は意識せずに零れ出ていた。

「……家族の絆が、偽りだとも言っのか。親が子どもを愛し、子どもが親を慕う純粋な気持ちのことを」

自分の想いが正しいことを未来に認めさせたいという気持ちがかどこかに残っており、それが表面に出てしまったのだらう。

氣勢を削がれた形となった照井の気落ちした様子に、未来の応え方も温度を下げたそれとなる。

「一途に家族を信じていられる自分は、幸せ者だつてことを自覚しなよ。家族だつて絶対じゃない。子どもには何の罪もないのに……子どもの存在そのものが、親のものってわけじゃないのに。子どものことを一人の人間だと思わなかった親のせいで、私は……」

「もうやめろ、二人とも！」

唐突に、フィリップの悲痛な叫びが未来の話を遮る。

今まで戦闘においてすら冷静さを保ち続けていたフィリップから突然進った絶叫に、思わず未来がびくりと身体を硬直させる。反射的に振り返った彼女が見たのは、切れ切れの息を苦しげに漏らし、肩を震わせる少年の痛々しい立ち姿だった。

「僕の前でもう、家族の話はやめてくれ……」

俯いたフィリップの表情は長めの黒髪に覆われて窺い知ることとはできないが、押し殺した揺れる声はやり場のない悲しみに彩られている。

未来の言ったこと全てが、フィリップの心と身体に突き立つようだった。胸の内側が鈍く激しい波のような痛みに襲われ、呼吸すらままならない。涙はいくら堪えようとしても喉の奥からせり上がってくるような気がして、耐えられなくなっていた。

「フィリップくん……」

「……済まなかった……」

未来が嗚咽を堪えられないフィリップを気遣わしげに見やり、照井がうなだれる。

三人が三人とも、家族に対する考え方と感じ方が異なっているのだ。これ以上大声を上げて感情をぶつけ合っても、互いを傷つけて溝を深くするだけだ。

真っ先にそれを理解したのがフィリップだった。

彼は弱く首を横に振ると、ふらふらとした足取りでリボルギャリの内部へ下る階段に足を引きずっていく。

「僕は、メモリブレイクせずとも何とかする方法を探す。きっとどこかに、突破口は残されているはずだ」

彼の不安定な声は、まだ涙が完全に乾いていないことを感じさせた。しかしそれでも「地球の本棚」に入り、自分でやれる最大限の努力をしなければならぬという強い意思があることを同時に印象づけてくる。

家族を失う悲しみと家族から奪われるやりきれなさ、両方を知っているフリリップだからこそ、何とかしなければならぬという焦燥感に襲われるのかも知れない。今まで生きてきた短い人生の罪を償うためとは言っても、精神的にまだ未成熟なところを多々残している少年には酷く辛いだろう。

この場にいる人間で唯一、具体的な発言をしていない翔太郎はぼんやりとそう考えた。

自分は家族の暖かさは知っていても、失う悲しみや理不尽さへの怒りは感じたことがない。恐らく自分が何か言っても、中身の伴わない空っぽな言葉は、皆の心に届いてはくれなかったに違いない。

自分が役に立てないことがわかっていただけに、この上なくもどかしかったが、今の翔太郎は沈黙を守る以外に取る術を見つけれなかった。

胸に重い空気を抱いたまま口を閉ざす自分に誰かが視線を送った気がして、彼は目にかかる前髪をどけながら顔を上げた。

「私は一人でも、あのドーパントと戦うよ。あの子の未来を、きつと守って見せる」

すると誰とも目を合わせずに呟いた未来が、翔太郎にも背を向けたところであつた。大股でドアに向かい踏み出した彼女の小さな背を、翔太郎が追いかけてようとする。

「あつ、おい！」

彼が伸ばした指先が細い肩に触れる寸前、ドアが荒っぽく閉められて呼びかけた声をも寸断した。

「放っておけ！あの女も、ドーパントがどこにいるかわかりはしない。俺たちは、他の方法を探さなければ」

やはり照井は、あくまでメモリブレイクを使わずに戦う姿勢を貫

くつもりでいるらしい。赤い革ジャケットを纏った若き警視が仲間を叱り飛ばすように制し、冷静さを取り戻した目を階下のフィリップへと向ける。

しかし翔太郎は、勇ましく言い放って去った未来の表情を横切った寂しげな影を見逃していなかった。

叩きつけるようにして開いたドアから事務所内へと走り出てきたのは、意外な人物であった。伏し目がちになった顔の両側にポニーテールの長い髪が被さり、濃い陰となつて表情を隠している。

「あれ、未来さんだけ？みんなは？」

健太にメモリガジェットを見せて遊んでやっていた亜樹子がソファから声をかけると、ドアに背中を預けていた未来が頷いた。

「……ああ、ちよつとね。今日は先に帰ろうかと思つて。ここはみんながいてくれれば大丈夫だろうし」

力なく答えた彼女は、無理やり笑顔を作つて見せているとしか見えない。声に全く張りがなく、瞳からも活力が失せているのだ。恐らく、リボルギャリーの中での作戦会議で場が荒れたのだろう。

つい今しがたまで続いていたらしい作戦会議は、主に照井の主張により戦える者だけで行われていた。鳴海探偵事務所を預かる身である亜樹子は当然の権利として参加の意思を示したが、健太と堀内を二人だけで事務所内にいさせることに不安があつたことと、照井からはつきりと却下されたことがあり、不参加とならざるを得なかった。

以前の亜樹子なら無理にでも自分の意見を通していただろう。しかし照井と婚約してからは、彼の意思を尊重し時には身を引くことの必要性も心得ていた。今回の作戦会議のことも、何か思うところがあつてのことなのだろうと判断して出しゃばるのを止めたのだ。

それにしても、今まで威勢の良かった未来が沈み込むとは、一体何があつたというのか？

「きょうはもう、あそんでくれないの？」

健太も手元のフロッグポッドから顔を上げて、元気がない未来へ視線を向けた。彼女はもう一度笑って見せると、健太の座る古いソファの前まで来て床に膝をつき、幼い少年と目の高さを合わせる。

「うん……お姉ちゃんね、急なお仕事が入っちゃったの。だから、ごめんね」

その低く優しげな声が急に震え、白い頬を一粒の涙が伝い落ちた。
「どうしたんです、所長」

慌てて指先で涙を拭った上司に堀内が心底から驚いて立ち上がり、亜樹子も目を丸くする。が、同性である亜樹子は過剰に相手を心配させてしまっているという印象を避けるため、一呼吸置いてから普段よりも落ち着いていた口調を心がけて言った。

「……未来さん、何があつたの？」

未来は軽く鼻をすすったが、亜樹子の質問には答ええない。カメラも内蔵されているであろう、サイボーグの女性の瞳は一瞬だけ戸惑いの色を浮かべた。

「おねえちゃん、泣いてる？」

「うん……ちよつと、皆と喧嘩しちゃったの。みつともないよね。」

お姉ちゃん、大人なのに」

が、未来が健太の声を再び耳にしたときには、それはすぐに引込んでいた。代わりに正面にいる一同から視線を外て自嘲気味に笑い、長い睫毛に宿る滴を乱暴に拭い取る。

そこへ、小さな手が伸ばされてきた。

健太の子どもらしくぷっくりとした指が未来の頭のとっぺんに乗せられ、ぎこちない動きで明るい茶色の髪を撫でていく。小動物が仲間をいたわる時を思わせる健太の行動に驚いた未来が、正面に向き直った。

「ぼくが『よしよし』してあげるから、泣かないで。おねえちゃんが泣いてると、ぼくも泣きたくなっちゃうよ」

健太は、心から未来のことを心配してくれていた。

ここに自分が連れて来られた理由もはつきりとはわかっておらず、まだ五歳の幼児である健太の心は不安でいっぱいのだ。なのに他人を、それも大人を気遣う芯の強さがある。何とも見上げた男の子ではないか。

「健太くん……」

「おとうさんが、ぼくにもよくやってくれてたんだ。ぼく、すごくうれしかったんだよ。だからおねえちゃんにも、やってあげるね！」
瞳を見開いた未来に名前を呼ばれた健太が無邪気に笑い、自分よりも大きな頭をゆっくり撫でる。

ソファーから下りて背伸びをし、懸命に相手を慰めようと頑張る健太の姿に、未来は目を細めて口許をほころばせた。先とは異なる、皮肉の色がない優しい笑顔だった。

「そっか……ありがと、健太くん。おかげで元気が出たよ。お姉ちゃんはお仕事に行ってくるから、みんなの言うことをよく聞いて、いい子にして待ってるんだよ」

「うん！」

大好きな女性が活力を取り戻したことを口調から察したのだろう、健太が元気よく頷く。未来は健太の頭を髪がくしゃくしゃになるほどぐりぐりと撫で返し、勢いをつけて立ち上がった。

「じゃあ、私はこれで失礼するから。亜樹ちゃんには、また改めて連絡するよ。ごめんね」

「あ、うん……」

未来が背負う空気に硬い緊張感があることが感じられ、口を挟むのが憚られた亜樹子が気圧されたように返事を返す。

「待ってください、所長。仕事なら、俺も一緒に行きます」

「ごめん、他の人にやらせるわけにはいかないの。あんたはここで、健太くんと一緒にいてあげて」

堀内は早くも出口のドアに向かいかけた上司の背を追おうとしたが、こちらにはもう感情を隠した応えが返されるのみであった。異を唱えようとした彼から視線を外して古ぼけたスチールのドアを開け、彼女は足早に去っていく。

「所長！」

堀内がまだ怪我の完治していない片足を庇いながら駆け出し、慌てて黒いジャケットの小柄な背中が消えたドアを開けて外に飛び出

す。

亜樹子も反射的に腰を浮かせたが、ガレージへ通じる扉と二人の男女が出ていった玄関、そして健太の顔で視線を一巡させて思い止まった。あの様子では自分が行ったところで状況は変わらないだろうし、それ以前に未来が涙を見せていきなり去った理由もわからないのだ。

そして何より、健太をここに一人でいさせるわけにはいかない。

亜樹子は溜め息をついて、ソファーに再び腰を落とした。

せめてガレージの中で何があったのかだけでもわかれば、思い詰めた様子の未来にも声のかけようはあっただろうと思わざるを得ない。一体何の意図があつて、照井は自分を作戦会議から外したのだろうか。仮に同席していたとしても役に立たないのだから、健太の面倒を見させる方がましというネガティブな理由だとも言つのだろうか？

亜樹子が不満で無意識に口を尖らせ、膝の上で頬杖をつく。

彼女の刺々しさに、健太も口をつぐんでしまった。

それから健太が眠気を訴えてくるまで気まずい沈黙の中で過ごすこととなつたのは言うまでもなかったが、幼い子どもである健太がすぐに寝入ってしまったのは不幸中の幸いだったと言えなくもない。彼もあの異常な体験で疲れていたのだろう。事務所内に一つしかないベッドが占領されたことに、翔太郎やフィリップも文句は言えない筈だ。

そして翔太郎が先の未来と同じように何か思い詰めた様子でガレージから出てきたのは、それから優に数十分程度経った後である。

健太をベッドで寝かしつけていた亜樹子が、ドアが立てる無機質な音に振り返った。

「あ、翔太郎くん」

「未来は？」

深い眠りに落ちた健太に毛布をかけてから立ち上がった亜樹子に、翔太郎は開口一番に訊いた。

「仕事があるからって、帰ったわよ。堀内さんは彼女のことを追いかけて行っただけ……未来さん、泣いてるみたいだった」

事務所であつた小さな騒動についてしらっと説明しながらも、亜樹子はやはり何かあつたのだらうと言いたげな顔である。

翔太郎も、あの気の強い未来がまさか泣いていたなどと思つてもみなかつたらしい。僅かに動揺した素振りを見せた彼の眼前に、亜樹子がずんずんと詰め寄ってくる。

「ねえ、作戦会議で一体何があつたの？私にも説明してよ」

翔太郎に迫り切つた亜樹子は、いつものように納得が行くまで決して引き下がらない押しの強さを伺わせる。相手の顔を下から上目遣いで見上げてくるが、媚びるのではなく、明瞭な意思を持つて睨んでくる潔さがある目だ。翔太郎が未来を気にかけているらしいこともあり、自分も何とかしたいという気持ちが強いのだろう。

が、翔太郎は迫力を湛えた亜樹子の大きな瞳から視線を逸らした。「いや……別に何でもねえよ。ちよつと意見が合わなかっただけだ」「何でもなくて、未来さんみたいな人が人前で涙見せたりするの？どうして、私にだけ教えてくれないのよ！それとも何か、私に聞かれると都合が悪い話なわけ？」

不自然にはぐらかすなど、嘘をつけない翔太郎らしくない。何か隠しごとをしていることを瞬時に見抜いた亜樹子の声が甲高さを増し、数十センチも離れてない彼の上半身へ更に身を乗り出させる。

「そ、そんなんじゃないやねえよ。ただ……」

翔太郎は近すぎる距離を少しでも離すため後ろへ仰け反りながら、歯切れの悪い口調で言葉を途切れさせた。まともに顔を合わせてこない半熟探偵の様子に、亜樹子は真っ先に思い当たったことを口にする。

「竜くんから、私に話すなって言われてるんだ」

凶星を突かれたのであろう。真正面を向くまいとしている翔太郎の視線が、たちまち落ち着かなげに泳ぎ始める。

やはりそういうことだったのか。

どんな理由があるにせよ、仲間の一人である自分だけを除け者にするなど、到底了承できるわけがない。そもそも、この鳴海探偵事務所の所長たる者が何も知らないでいいわけがないのだ。

それとも、夫となる竜は妻たる存在を信用できない、力のない存在だとも思っているのか？

ますます納得がいかない。

「いいわよ。そういうことなら、本人から直接聞くから」

亜樹子は懔然とした表情を隠しもせず翔太郎に言い放ち、間髪入れずに市松模様の床を大股で踏み鳴らしながらガレージへのドアへ向かった。

「だあー！ちよ、ちよつと待て！話すから、今そっちに行くなって

……」

小柄な所長の細腕で強引に押しのけられた翔太郎がしどろもどろに叫び、細い肩に手をかけようとする。

追い抜きざまに大声を上げられたことに、今度は亜樹子が慌てた。急いで翔太郎の口を片手で押さえ、口の前で人差し指を立てて見せる。静かにしろ、と目力のみで命令した。

「しーっ！」

亜樹子に強く顔を押さえられ、鼻まで塞がれた翔太郎は息苦しさにしたばたともがいていたが、彼女の行動の意図を悟り幾度も頷いて見せた。二人がおそろおそろ、事務所の隅に置かれたベッドへ視線を向ける。

幸い健太が目を覚ました様子はなく、規則正しい穏やかな寝息が聞こえてくるだけだった。

ほっと肩から力を抜いた亜樹子が、再び翔太郎の顔を睨む。

「もう、最初からそうしてよね！所長のこの私が、何も知らないわけにいかないんだから」

彼女はそこで初めて、翔太郎の肺活量が限界に近づいていたらしいことに気がついた。

酸欠直前の真っ赤な顔から小さな手が外れた途端に静かな事務所

内でぜいぜいと荒い呼吸音が響き、それが暫し続くこととなった。

かもめビリヤード場のドアの横に立つ翔太郎と亜樹子が話の終わりに持ったのは、やはり沈黙であった。

翔太郎がガレージであった出来事を一通り話す間、亜樹子は殆ど口を挟んでこなかった。いつものうるささに反して口数が極端に少なくなると、却って不気味な感触を煽られる気がする。

彼は時折吹きつけてくる春の夜風が前髪を乱そうとするのを気にしつつ説明していたが、ずっと頭から離れてくれなかったのは「亜……所長にここであつたことは話すなよ。他人のことで、彼女に余計な気遣いをさせたくはないからな」という、照井の真面目くさった言葉だった。

そのことまで伝えておくべきかと翔太郎が迷った時である。

亜樹子が鳴海探偵事務所の看板がかかる壁に背を預け、視線を遠くしながら呟いた。

「そっか、家族のことで……竜くんもフィリップくんも、身寄りを失くしてるものね」

ぼつりとこぼした亜樹子の反応は、翔太郎にとって意外なものであった。今までの彼女であればまず自分の存在が無視されたことに怒り、照井の余計な気遣いに怒り、人に氣を使わせてしまう自分自身に対して怒っていたであろうことが容易に予測できたからだ。

しかし今の亜樹子は照井の判断を受け入れ、仲間一人一人のことをきちんと理解して感情をコントロールしている。それだけ照井の存在が彼女の中で大きいということなのだろう。たいした化けっぶり、もとい成長ぶりということか。

一人の男によってここまで変わるのだから、まこと女とは恐ろしいものである。

という感想をうっかり口にしそうになってしまった翔太郎だったが、何食わぬ顔で発する言葉を今まで持っていた疑問にすり替えた。

「……しかしわからないのは、どうして未来があんな態度を取るからだ。あいつ、健太の父親が……山波博士がドーパントだってわかってから、人が変わったみたいになりやがって」

未来が翔太郎に見せてきた姿は、誰かの上に立つ者として合理性と論理性を重んじ、非常時にも冷静さを保つことができる芯の強い人間というものである。そんな女性が泣くほど感情的になるなど、あまり想像できないのだ。

が、同性のこととなるとよくわかるらしい亜樹子が、翔太郎の腑に落ちていなさそうな顔を見やって言った。

「多分、未来さんも、家族のことで何かあったんじゃないかな。話を聞いてみる必要があると思うけど」

「だが、あいつは誰かとともに話ができるような状態に見えなかったんだ。こっちの言うことに聞く耳を持つかどうか……」

亜樹子の視線が宙を泳いで見えるのは、未来が涙を堪える姿を思い出しているからなのだろう。

そして大人の女性の仮面が外れた彼女の姿を目にして、何とかしてやりたいと思ったに違いない。社会的な立場も同じということも手伝ってか、亜樹子の口調には単なる同情ではない思いやりが込められているようだった。

「未来さんは、今誰も回りに味方がいない状態よ。私、放っておいていいとはとても思えないの」

そこで亜樹子の視線がちらりと翔太郎へと向けられて、すぐまた宙へと戻る。彼女の瞳が向いた先では、白くライトアップされた風都タワーが夜風を受けて闇の中から浮かび上がっていた。

「私たちの中で家族の問題を何も抱えてないのは、翔太郎くんだけじゃない？だから、一番未来さんと話をしやすいのも翔太郎くんだけって言う気がするけどな」

「俺が？」

回り続ける巨大な風車にぼんやりと視線を向けていた翔太郎が、思いもよらない言葉に驚きを見せて隣にある横顔の方を向く。

「うん。翔太郎くんなら、未来さんが家族絡みのことで何を言っても、個人的な感情を挟まなくて済むでしょ。一番公平に考えることができるもの」

そこで一旦息をついてから、うら若き乙女たる所長は半熟探偵の目を正面からとらえた。

「それに、未来さんは仕事に行くって言ってたのよ。この状況で今から仕事って言ったら、ドーパントを倒しに行く他はないよ」

「……迷ってる時間はないってわけか」

亜樹子に真面目な顔で鋭く指摘され、ガレージから出る直前に交わした言葉が翔太郎の脳裏によみがえってくる。

「未来が本当に山波を殺すしかない判断しているなら、躊躇なく殺害するだろう」

作業机の真後ろに当たる壁際に佇んで考え込んでいる相棒へ、フイリップがキーボードを叩く手を休めずに言葉を投げ掛けた。作業用端末のディスプレイに浮かんだアルファベットと数字の羅列を忙しげに目で追いながら、天才少年は更に続けていく。

「彼女は軍事用として開発されたサイボーグだ。戦闘用の訓練を日常的にこなし、実戦も経験している。誰かの命を奪うことに対して、心理的なブレーキはかからないと見ていいと思う」

「しかし、未来はあれほど情に厚い女だ。そんな奴が簡単に誰かを殺すなんて、俺にはどうしても思えねえよ」

正確だがひどく無機質なフイリップの分析に、翔太郎は荒い語気を隠さず反論した。

確かに未来は戦うために作られた存在かも知れない。だが、根は温かな血の通った人間であることに間違いなかった。仕事を覚えたての部下や幼い子どものような弱者を見過ごせない優しさを持つ彼女は、自身で蔑んでいたような「人殺しのための道具」などでは決してないはずだ。

が、未来の強さに隠れた本当の姿を翔太郎ほど深く知らないフイ

リップにとって、彼女はただの意見が合わない他人でしかない。そして翔太郎は、いつものように好ましくない習慣に巻き取られているだけに見えるのが当たり前である。

「翔太郎、彼女に個人的に肩入れするのはやめたまえ。女と見れば甘い顔するのは、君の忌むべき悪癖の一つだ。一体何度騙されれば学習するんだ？」

情にほだされない場所から醒めた瞳で全体を見渡す方が客観性に優れ、正しく事実を判断するのにうってつけた。君はいつも相手の感情に飲まれて同調するから、似たような失敗ばかりを繰り返す。ふと作業の手を止めて振り返ったフィリップが淡々と述べた後にそうつけ加えているような気がして、翔太郎は必要以上の大声を出すことになった。

「うるせえ！俺は、ただ……」

「お前が彼女を何とかしたいなら、別に止めはしない。しかし、どうやって言い聞かせるつもりだ」

そこで、フィリップの横についていた照井が徐に口を開いた。

赤い革ジャケットを室内でも脱がずにいる若き警視は既に落ち着きを取り戻しており、先に未来との口論で見せた激情はどこにも見えない。諭すような態度を取ってくる彼と比較すると、感情的になっているのは翔太郎の方であることが明らかであった。

照井から市民の安全を守る者として自らを律している姿を見せられ、翔太郎が口ごもる。

「そ、そりゃあ……」

「あいつは俺たちと相容れない、全く別の信念に従って動いている。そんな奴をどうにかするのは、至難の業だ。迂闊なことをすれば、余計に焚きつける羽目になるぞ」

照井なりに未来の性分を分析した結果なのだろう。確かに彼の言う通り、未来の言動からは彼女が世間一般の通念とは異なる思いを胸に抱いていることがわかる。それが皆に等しく受け入れられるものではないということや、彼女自身が誰にも理解されないことを覚

悟しているらしいことも。

しかしだからと言って、未来を周囲にただ一人の味方もない状況に突き落とすなど、翔太郎には我慢ならなかった。それに彼女はやり方にこそ問題があるものの、健太を救いたいと言う願いをいんでいるのは同じなのだ。

そして彼女の選んだ道が致命的に間違っており、悲劇しか招かないというのであれば、誰かが止めねばならないのではないか？

彼女を止めるために走るこそが皆の思いをひとつにまとめ、より良い方向へ結末へと収束させる鍵となるのではないか？

ただし、そんな不確定要素の多い手段には皆を納得させるだけの確実性はゼロである。

何とかして未来を助けてやりたい。

一人孤独な戦いを挑もうとしている女戦士の味方でいてやりたい。今の翔太郎には敢えてそれを実行に移すメリットを説明する言葉はなく、あるのはそんな漠然とした感情だけであった。

「それでも……そんなことは、これから考えりゃいい。ここでじっとしてられるかよ！」

だから、翔太郎は想いに従って走り出した。

ガレージから事務所へ通ずるドアを開けると、ベッドの前にしゃがみ込んでいる亜樹子の小さな背中が見えた。

ついさっきまで交わしていた男たちの会話を頭の隅で聞き返していた翔太郎に、緑色の物体が迫った。

「あたっ！」

小気味良い音を立てて額に衝突したそれは軽く、何度も経験した覚えがある衝撃を伴っている。彼はつい、いつものように声を上げた。

「人を助けるのに迷うことあらへん。男らしゅうないっちゅうねん！早よ行き」

翔太郎が反射的に閉じてしまった目を開くと、ドーパントに対し

てさえ使われることもある専用武器のスリッパを構えた亜樹子が出た。歳上の翔太郎を丸出しの関西弁で叱り飛ばすような態度は相変わらずの図太さだが、今はその姿勢が頼もしく見える。

「未来さんを助けられるのは、翔太郎くんだけなんだよ。しっかりしー！」

つけ加えて、それだけでは終わらないのが亜樹子の長所だ。半熟探偵の背中を歯切れのいい言葉と明るい笑顔で押し、自分は他の仲間と共に戦うつもりでいるのだろう。

亜樹子には、未来のことを翔太郎に任せれば事態をより良い方向に導けるという確かな信頼があるのだ。それに応えるため、もう何も迷う必要はない。

「ああ。ありがとな、亜樹子」

翔太郎は力強く頷き、亜樹子が笑顔で応えてくるのを確認してからビルの中へと取って返した。

愛用の中折れ帽と、メモリガジェットたちを共にするためであった。

オフィス・ユースフルの社用車を停めた駐車場に至る中程にある公園で、堀内はようやく未来に追いついた。小走りでもかなり早く進んでいく未来に堀内が追いつくのはなかなか大変で、すっかり暗く静かになった公園では彼の荒い呼吸音が目立っていた。

「待って下さいって、所長！俺も一緒に……」

「だから、危ないんだって言ってるじゃない。あんたは怪我だってまだ治ってないんだし、相手はあのドーパントって言う怪物なんだから」

長い前髪を振り乱している堀内に呼び止められた未来は一旦足を止めて振り返ったが、言い放った口調は厳しい。控え目な街灯に背中から照らされている未来の表情は、五歩程度離れた位置に立つ堀内にはよく見えず、彼は叱られているかのように錯覚した。

自分は少しでも役に立とうとして未来を追いかけてきたのに、ど

うしてそこまで強く拒まれなければならないのか。

実は彼女は、自分のことを役立たずであるが故に避けたいだけではないのか？

何かにつけて怪我のことを盾にしてくる未来に、堀内の暗い感情がぶつけられた。叫び声とも取れる若い男の声が、闇に包まれてひっそりと静まり返った公園に響く。

「こんな怪我なんか、どうってことはないですよ！それを理由にして、俺を邪魔者扱いするのは止めてください！」

「邪魔者？とんでもないよ。それ以前の問題なんだから」

しかし、彼の期待した答えは未来から返ってこなかった。

彼女の非情とも思える一言は、殆ど抑揚が見られない無感情な冷たさに彩られていて、それがまっすぐに堀内の胸を突き刺してくる。青年は、目の前の女上司が自分という存在を完全に無視したような気すらした。

「……俺がいても、所長の足を引っ張るだけってことなんですか」
息苦しさを感じた堀内の顔が自然と下を向き、喉の奥から辛そうに掠れた声が絞り出される。

「あ……ごめん、そういう意味で言ったんじゃないよ。でも、今度ばかりは本当に危ないんだよ。私だって、あんな奴を相手にしながらあんたを守り切れる自信がない。危険な目に遭うのは、上司の私だけで十分でしょう」

部下を傷つけてしまったことに気づいた未来が、話し方を和らげた。

しかし、やはり堀内を拒絶するという意思が動いていないことは明白だ。

いくら未来が上司とは言っても、肉体的に男より劣る女であることに変わりはない。性別が異なる以上、守る者と守られる者という古来からの常識が覆ることもないはずだった。

「でも、所長は女性じゃありませんか。俺は男なのに……」

「堀内。あんたこそ、そんな風に男女で分けて考えるのは止めなよ。」

立場上で上にいる奴が下を守るために戦うのは、当然のことなんだからね」

当然堀内は未来が改造人間であることは知らなかったため、純粹に未来のことを想つての発言なのであろう。だが、未来が彼の怪我のことを気にかけるのと同じくらい性別にこだわっている堀内の考え方は、この戦いにおいて皮肉にも通用するものではなかった。

「俺は……所長のこと、守りたいんです。貴女をこれ以上危ない目に遭わせたくない。それに男が女を守るのは、それこそ当然じゃありませんか」

未だ食い下がってくる堀内は、すぐるような目付きで未来の顔を凝視してくる。

しかし何と言われても、未来はこの青年の申し出に応じることはできないのだ。

彼と共に戦う道を選べば自ずとサイボーグであることが知られ、パワードスーツや専用武器のような軍事機密の流出を招くことになる。心を鬼にしても、堀内のひたむきな意思を突っぱねねばならなかった。

「ありがと、その気持ちは嬉しいよ。けどさ、これは男女の区別で片付くような仕事じゃないんだよ。残念ながら私は守るための責任と立場と、それに見合うだけの力を持つてるから……」

それでも未来はなるべくやんわりとした言葉と反感を持たれない態度を意識し、撥ねつけると言うよりは説得するような気持ちを込めて部下を諭そうとした。

「力なら、俺だって！」

ところが、ジャケットのポケットに片手を突っ込んだ堀内が突然未来の方へと踏み出してきた。

普段大人しい彼が何かのきっかけで突然乱暴な態度を取ることはあったが、それに行動が伴ったことは今までにない。豹変した部下の攻撃的な行動と激情に警戒した未来が、咄嗟に素早く後ずさる。

未来が最初に歩みを止めた位置まで踏み込んで顔を上げた堀内で

あつたが、街灯に照らされた未来の白い顔に浮かぶ悲しげな色に、そこで足を止めざるを得なかった。

「本当に、その気持ちは嬉しいんだけど……ごめんね。けどさ、あんたは自分しかできないことがあるって分かってるでしょ？ 健太くんは、誰よりもあんたに一番なついてるじゃない。あの子の側にいてあげて欲しいんだ。ひとりぼっちになった、あの子を支えてあげてよ。お願いだから」

寂しげな表情を瞳に宿したまま、未来は部下の前髪に半分隠れた目を見つめている。彼女は堀内を突き放したわけでも、見捨てたわけでもない。ただ、一緒には行けないということを訴えているだけだった。

これ以上、誰かを巻き込むわけにはいかない。だから力のある自分が何とかする。そしてどんな理由があっても、誰かが傷つくことを避けるためには人を受け入れるわけにはいかないという、辛い気持ちもわかって欲しい。

年齢よりも幼顔の女上司が無言の声を発すしてくるのを、堀内が無視できよう筈がなかった。自分の我を通せば彼女をもっと困らせ、余計な危険に晒してしまう可能性も高まるのだ。

本当に未来のことを考えるのであれば、自分が無茶を言うべきではない。加えて、最初からそのことに気づくべきだった。

今更ながらに、自分の浅はかさが重い後悔の念となって堀内の胸を黒く満たそうとする。彼は消えに入りそうな声で、短く呟いた。

「……はい……」

「ありがと。明日の朝には必ず無事に戻ってくるから、みんなや健太くんと一緒に待っててね」

その一言とともに堀内から先の狂気じみた気配と身体力のみが消えたことを確認し、心なしかほっとした様子で未来は頷いて見せる。去り際に彼女が残した笑顔は街灯の光の下で優しく輝いたかのようで、堀内はその小さな後ろ姿が公園の闇の中に消えていっても、暫くぼんやりと佇んでいた。

たつぷり数分は過ぎようかというところで、彼はようやく鳴海探偵事務所へ戻るに思い至ったが、やかましい足音が近づいてくるとに気がついた。

わずらわしげに振り向くと、体当たりと間違うほどの勢いで細身の影が遊歩道を突進してくるのがわかった。

危うくぶつかる手前で、堀内がその人物を避ける。

「おっとお！……って、堀内か。未来がどこに行ったか知ってるか？」

ほぼ同じタイミングでひらりと身をかわした相手の声と、中折れ帽を愛用している気障ないでたちに、堀内は覚えがあった。

何日か前に入院していた病院を訪れ、今日も施設にひよろりとした少年とともに忽然と現れた、探偵風情のいけ好かない男だ。

第一知り合つて間もないのに、苗字を呼び捨てにしてくる馴れ馴れしさも気に食わない。加えて、未来ともたった数日で酒を飲み交わす仲にまでなったことも憎たらしい。

それに、どうしてこの男までが未来を探しているのか？

急に、堀内の中にぴりぴりとした憎悪が込み上げてきた。

「……お前たちのせいだ」

「あ？」

質問に答えずじつと睨んできたかと思うと突然お前呼ばわりしてきた堀内に、翔太郎が怪訝そうな顔をする。

「お前たちさえないなければ、俺も所長も巻き込まれずに済んだかも知れないのに。もしあの人に何かあつたら、俺はお前たち全員を訴えてやるからな！」

長い前髪の間からきつと見開いた目で睨みつけてくる堀内は、ただならぬ情念を大きくはない瞳に揺らめかせていた。その暗さと熱さは翔太郎に対してというよりは、自分の思い通りにならない全てへと向けられているようだった。

堀内の言うことは勿論、一理ある。

故に翔太郎は咄嗟に返す言葉が見つからず、感情のままにぶつけ

られてくる彼の言葉を受けるしかない。が、逆に堀内は言い訳を返してこない翔太郎にそれ以上何も言えなくなり、却って怒りのやり場がなくなったらしい。首を振って前髪を流した後にもう一睨みしてきた視線には、理不尽なまでの憎悪が込められているのがわかった。

それでも激情に任せて殴りかかりたりしないのが、堀内の臆病なところだ。大股で翔太郎の側を通り過ぎると、貧相なスーツ姿の背中は公園の入口へと向かっていく。恐らく、健太の世話をしに事務所に戻るつもりでいるのだろう。

堀内の様子が普段と違うことが気になったが、翔太郎はすぐにそのことを頭から追い出してスタッグフォンを取り出した。ベストのポケットに手をつ込んで未来の名刺を探り当ててから街灯の下まで行き、頼りない明かりで携帯電話番号を確かめてからスタッグフォンのボタンに指先を走らせる。

だが、スタッグフォンから聞こえてきたのは『お客様がおかけになった電話は現在、電波の届かない場所にあるか電源が入っていないためかかりません……』という無機質な女性のアナウンスだった。予想はしていたものの、翔太郎は舌打ちしたい気分を独り言でこまかした。

「まあ、出るわけねえか……」

軽い溜息をついてから、翔太郎が片手でスタッグフォンのボタンを素早く押していく。空いた手でバットショットをポケットから取り出して電源を入れると、二つのメモリガジェットはほぼ同じタイミングで形を変えて空中へと飛び上がった。

「未来を探せ。頼んだぞ！」

翔太郎が空中を旋回している小型メカたちに命令すると、主人の意を理解した小さな部下たちは、すぐさま闇の中へ空を切って紛れていった。

金属光沢に包まれた手のひらに、メタリックブルーの携帯電話が握られている。

その液晶画面に表示された地図の中央に位置する赤い点は、かれこれ数時間は微動だにしていなかった。GPSを誤魔化せるような細工を仕込むのは、たった数時間では困難なはずだ。赤い点が示す電波の発信源であるラース・ドーパント、つまり山波が一箇所に留まっている可能性は極めて高いと見ていいだろう。

「やっぱり……ずっとここから動いてない」

携帯電話を手にした未来が、ヘルメットの内側で呟いた。電話本体を握りつぶしてしまわないよう、慎重にパワードスーツ脚部の隠し収納庫へ滑り込ませる。

身体の全てをチタン合金のパワードスーツに包み、身の丈ほどもある一二・七ミリアサルトライフルを携えた彼女は、武装した高性能ロボットさながらであった。鈍く輝くスーツは黒に近い紺色で、流線型が多用された滑らかなフォルムには無駄がなく、機敏な忍者を思わせる印象がある。

しかし細身の未来がいともたやすく着こなすこのスーツは、最新技術を結晶させた防御力を誇る鎧である一方、八十キロを超える重量を持つ。まさに、肉体改造を受けたサイボーグのための装備と云えよう。肌が露出している箇所は全くなく、頭部を護るヘルメットも密閉型で、バイザーの内側には視点カメラの映像が映し出されている。

人間の視界と全く同じ映像として作られたその隅で、デジタル表示の時刻が緑色に光っている。それも既に午前零時を回っており、辺り全体がひっそりと寝静まっている時間であることを示していた。鳴海探偵事務所を後にした未来は一旦オフィスに戻ってからC-SOLに赴き、AWP棟で武装を整えていた。無論、居場所を突き

止めた山波に奇襲をかけるためである。

が、装備の整備担当であるリユーに口止め料として有名パティスリーのケーキ10個分を要求され、渋々飲む羽目になっていた。

戦闘時に彼からのサポートを得るのは流石に無理だったが、専用装備の無許可使用と弾薬の拝借には目を瞑ってくれるのだから、それだけでもありがたい。

ただしオタクであることを公言して憚らない彼は、

「ほんとなら、私だって是非サポートしたいですよ。得体の知れない怪人と戦うなんて、一生ありえないと思ってたんですからね。まさに、リアル特撮じゃありませんか」

などと溜め息混じりに言っていたのだから、パワードスーツの厳格な運用規則がなければ、こっそり参戦する気満々だったのだろう。未来はリユーの子どももっぱさに呆れたものの、とにかく単身であってもフル武装でドーパントに挑めるのは心強かった。

自分には、初の実戦で生身に拳銃と手榴弾のみという装備で十人からのテロリストの集団に挑み、辛くも殲滅したという戦歴がある。その時のことを思えば、決して難しい戦いではないはずだった。

未来はかの時に感じた緊張感を思い出し、曇った夜空を見上げた。ヘルメットを外していればまだ冷たい夜風が頬を撫でていくのだろうが、硬質な金属に覆われた身には、何一つ行き過ぎた刺激は感じられない。あるのはただ、パワードスーツで休みなく稼働する機械類の低い駆動音と、自分の呼吸音だけだ。

彼女が今いる場所は広大なC-SOL敷地の片隅にあるAWP棟の陰で、先に携帯電話の地図で確認した場所も同じ敷地内にある。目的地までのルートには深夜でも交代勤務で常に誰かがいる部署や、赤外線式の防犯装置がセットされたエリアも点在することがわかっていて。なるべく建物の裏側を行くべきだろう。

未来がスーツのセンサー類と自らの感覚器の最後の点検のため、ぐるりと周囲に視線を一巡させた時である。感度を上げていた聴覚に、誰かが小さく息を吐いた空気の摩擦音が捉えられた。

敷地を見回る警備員はまだ暫く来ない筈だし、別棟にあるコンビニエンスストアへ買い出しに来た職員は回り道になるこの場所を通らない。不審者の可能性が高いと瞬時に判断した未来が動く。

抱えていたアサルトライフルのグリップを握り、トリガーに指を滑り込ませ、音源に当たる木立ちへと黒光りする銃口を素早く向けた。

「誰だ？姿を見せる。三秒以内に従わなければ撃つ」

威圧感がある低い声が、鋭い警告として発せられる。マイクを通して飛んだ音声が空气中を間違いなく伝わり、間を置かず何者かが木の陰から現した。

「……翔太郎」

見覚えのある背格好と中折れ帽を被ったスタイルですぐさまその正体を見抜いた未来が、驚いてその名を口にする。

「よくその位置から俺がいるってわかったな。流石だぜ」

「サイボーグを舐めないでよ。相手の心音を聞き取ることぐらい、朝飯前なんだから」

暗い場所で息をひそめていたところをあっさりと発見された翔太郎はもう隠れようとせず、まるで昼の街中で偶然顔を合わせた時のように自然な口調だった。ドーパントを吹き飛ばす威力を持つアサルトライフルの銃口を向けられても、普段と変わった感じはない。

逆に堂々とした彼の話しぶりに、未来は冷たく言い放った。

「どうやってここに潜り込んだの？それに、何で私がここにいて知ってるわけ」

「話す前に、顔を見せてくれよ。相手の表情が全く見えねえのは落ち着かねえんだ」

未来は先より警戒した色を声に持たせたつもりであったが、翔太郎の要求は更にその斜め上を行っている。銃口はひとまず下ろしたものの、呆れて思わず笑ってしまうかと思うほどだった。

が、完全武装したサイボーグの前で、変身していない翔太郎は脅威でも何でもないことは確かだ。

未来が黙ってヘルメットの顎の下にあるセンサーに指先を触れさせた。

小さく金属が擦れ合う音が上がってバイザーが開き、彼女の眉から目の少し下あたりまで隙間ができる。その狭い隙間から特徴ある大きな瞳が見えたことで、科学の鎧に包まれた人物が自分の知っている女性であることを再確認できたのだろう。翔太郎はまだ肩に入れすぎていたらしい力を抜くと、空中に手を差し出した。

「こいつらにまた働いてもらったんだ。あんたが武装の準備を始めてるみたいだったから、急いでこっちに来た。武装警備員の目をこいつらで誤魔化すのは苦労したぜ。何せ、下手すりゃズドン！だからな」

彼が伸ばした手の先に、今しがたまで働いていた小さな「使い魔」たちがどこからともなく舞い降りてくる。ギジメモリを挿すことで現代の最新技術を駆使した機械でも追いつけないほどの性能を発揮するメモリガジェットたち――バットショットとスタッグフォンであつた。

未来のマイクを通した声が、にわかに高くなる。

「じゃあ、私がスーツに着替えるのも覗いてたってこと？このHENTAI！」

「ば……ば、バカ言うな！見てるわけないだろ！」

全く考えもしない理由でありえない行為のことをでっち上げられ、未来から軽く蔑みの視線を向けられた翔太郎は、頬を朱にして否定した。女の言葉を真に受けてしまう辺りはこの手のことに慣れていない証拠で、却って翔太郎らしいと言える。

どもりながらまだ反論を続けようとした翔太郎に先んじて、未来は続けた。

「まあそれでも、あんたの頭を記憶喪失になるぐらいにひっぱたけばいいってただだからね。もし私の邪魔をするつもりで、ここまで来たって言うんなら」

「おいおい、物騒な冗談はよせよ」

「生憎だけど本気なの。そこをどいて」

未来の短い一言からは、それまで込められていた暖かみが見事に削ぎ落とされていた。

アサルトライフルの銃口を再度上げて腰撃ちの体勢になった彼女は、トリガーからは指を外した状態で狙いを翔太郎に定めている。

「無事にここまで来たことは誉めてあげる。けど、無駄死にしたくなければとつとと帰ることだね。私、容赦するつもりはないから。

例え、相手が……翔太郎。あんたであっても」

外部マイクを通した淡々とした口調とは逆に、未来の僅かに細められた眼からは殺気が感じられない。視線を向けられた翔太郎がそう感じているのだから、恐らく誰が見ても彼女が争いを望んでいるわけではないと読み取れるだろう。

翔太郎の眼には、彼女が誰も無駄に殺さないことを祈る脆さと儚さを抱えた少女のように映っていた。

悲しみも憎しみも、怒りも全て自分一人で受け止める。だから私のやることに口出ししないでくれ。

そう訴えてくるのが、肌で感じられるほどだった。

未来が全く瞳の表情を偽れないのだから、こちらも率直に伝えるべきであろう。

自らの出方を決めた翔太郎は、ほんの小さな息をついてから言った。

「……違うと言ったら？」

「え？」

「俺にあんたの邪魔をするつもりはねえ。ただ、あんたを救いたいたいだけだ」

翔太郎の一言が想定外だったと見える未来が構えるアサルトライフルが微かに揺れ、次に聞こえた「救う」という単語に顕著な反応を見せた。彼の先とは異なる、茶化した様子が全くない態度に未来の声が上ずる。

「救う？私を？何言って……」

「あんたは健太を守るために、山波博士を殺すことも厭わない。そしてそうになったら、博士を殺した罪を一人で抱えるつもりでいる」自嘲して思わず構えを崩した未来の声に、翔太郎が強引に自らのそれを重ねる。

そしてその内容に凶星を突かれたらしく、彼女は銃の照準のみならず視線をも半熟探偵から外した。

「……そんなことは当然でしょ。生き残った奴が死んだ奴の全てを背負わなかったら、どうやって報いるって言うの？罪を背負う覚悟がない奴に、そもそも戦う資格なんてないんだよ」

開いたバイザーから僅かに窺える未来の生身の部分には、今この時まで、そしてこれからも戦い続けねばならない者の悲壮さが浮かんでいる。

誰かを殺したら、その報いとして奪った全てを罪として背負う。

戦う者の覚悟と苦さが滲み出ている言葉だ。

他人の生命を何とも思っていないのなら、そんな考えに至る筈はない。未来の瞳が戦うことに苦悩して沈んだ色に見えるのは、他者の感情を理解し、共感する優しさを備えているからに他ならないのだ。

やはり彼女は「人を殺すための道具」などではないと、翔太郎は確信した。

「……男の人生の八割は決断。あとの二割はオマケみたいなものだ」翔太郎が無意識に帽子の縁で指を滑らせ、出し抜けにこぼした台詞を耳にし、未来は素っ頓狂な声を上げた。

「は？」

「俺の師匠が遺してくれた言葉だ。俺は決めたんだ。あんたを守るってな」

半分呆れているらしい未来の目から視線を外さずに、翔太郎は続けた。

「あんたは健太の父親を殺した罪を背負えば、多分一生自分のことを許せなくなるだろう。そんな結果にならないように、俺が全力で

あんたを助ける」

武装を一部解除している今の未来が素の状態であるのと同じように、帽子の鰐を上げた半熟探偵もまた素直に胸の内を見せていること。それは、彼の偽りのない真剣そのものの表情にそっくり表れていた。

ここまで無防備な姿を見せつけられるなど、未来にとっては全くの想定外であり、不可解でもあった。今現在は互いの気持ちを理解したとは言っても、それが受け入れられるかどうかは不透明なのだ。なのに何故、翔太郎はただの他人でしかない女のこと、そこまですでかわるのか。

未来の口を突いて出たのは、そんな内面の揺れが心からはみ出たものであった。

「けど、あんたは一人じゃ仮面ライダーに変身できないんでしょ？なのに、私を助けるって……」

「心配すんな。俺のこのメモリには、状況を逆転できる暗示があるんだからな」

にやりと笑った翔太郎が、ベストの内側から黒いガイアメモリを取り出して見せる。彼が指先に挟んで見せたのは、ジョーカーのメモリだった。

「ジョーカー……切り札ってこと？」

「ああ。だから気遣いは無用だ。だが、ちょっとは頼ってくれるってんなら歓迎するぜ。麗しき女性を放っておくんなぜ、ハードボイルドの流儀に反するからな」

未来が戸惑いつつメモリが示す意味を確認めると、翔太郎は彼女の目を得意気に見返してくる。

しかし装甲車をも撃ち抜くアサルトライフルを構え、マシンガンの連射にも耐えうるパワードスーツに守られた未来からすれば、翔太郎はどう考えても非力で頼りない一般市民だ。それなのに自分のことを頼れと言い切る翔太郎の、自信過剰を通り越した不敵さの源は一体何なのだろう。

それにこの男は目の前の女に殺されるかも知れないという恐れを、何故微塵も抱かないのか。

生来人を疑えない根っからのお人好しなのか、ただ単に何も考えていないだけなのか？

いずれにしても、底抜けに考えなしの言動に溜め息をつきたくなくなってしまうのが正直なところだが、それでも翔太郎が見せる純粋な気遣いは、心地よく未来の心に響いていた。ここまで裏表がない感情に触れるのは、随分と久しぶりな気がする。

ふと込み上げてきた笑いという表情に酷く不似合いな気がして、未来は自然に重いアサルトライフルを下ろしていた。

「……たたくもう、あんたほどのバカは初めてお目にかかったよ」
マイクを通した呟きに、翔太郎にも馴染みがある明るさが戻ってきている。

未来の目元からも緊張が抜けてきたのが見て判断できたのか、翔太郎も息をついてメモリをベストの内側に滑り込ませた。

互いに自然な動きが出たことがきっかけとなり、更に空気から重みが抜ける。

今日これまで叩けなかった軽口を取り返すかのように、未来は言葉へ正直な気持ちに乗せた。

「まあ、バカはバカでも気持ちがいいバカだけだね。そういうバカ、私は好きだよ」

「バカ、バカって何度も言うな！それに好きって……ん？……ちょ、お前って、おい！」

未来が悪い意味でなく「バカ」と連呼したことに、翔太郎がむつと眉を吊り上げる。が、彼女が結びに使った単語に気づき、全く意味のない言葉を無理やり繋げようとして慌てふためいた。

「アホ、勘違いすんなっつ。そういう意味で言ったんじゃないんだって」

「……即答しやがった……って、お、おい、こっちに向けるなよ」
「そんなにびびんなくてもいいよ、ロックしてあんだから」

一方、さらりと答えた未来の態度には動揺の欠片もない。自分の中にあつた重い感情すら吹っ切れたのか、彼女が改めて抱え直したアサルトライフルに翔太郎が脅威を感じる有り様だ。

そしてもう顔を見せねばならない必要はないと判断したのだろう、ヘルメットのバイザーを今一度下ろし、完全な戦闘準備態勢へと戻っていく。

「あなたと付き合う男は苦勞するぜ、きつと」

溜め息とともに首を振りながらも、翔太郎は声に安堵が混ざるのを隠し切れなかった。

とにかく、未来が一人で全てを抱え込むという状況は回避できたのだから、少なくとも最悪の結果となる可能性は下げられた筈である。これから先は自分がどう動くか次第というところも大きいが、それならばどうにでもできるという期待の方が大きかった。

何しろ、自分は「ジョーカー」という切り札を持っているのだから――

「何か言つた？ぐずぐずしてると置いてくよ！」

すっかり普段の調子に戻つた未来の声が、考えに耽り一人にやついている翔太郎の耳にはやけに遠く聞こえた。我に返つて彼が辺りを見回すと、十数メートルは先でもう蒼い鎧姿が夜の闇に紛れようとしている。

「あ、待てよ！」

翔太郎が帽子を押さえ、慌てて未来の背を追ひ走り出す。

彼女が素直に自分を出した途端に翔太郎のペースが乱されることとなつたが、それも未来が心を許していることの現れと見るべきであろう。翔太郎のまつすぐに熱い心が、冷酷とも取られがちな未来のかたくなさを氷解させたのである。

一時的なコンビとなつた二人は、深夜の巨大実験施設を飲み込んでいる深い闇の中へと足を進めていった。

夢の中で誰かに名前を呼ばれて、健太は目を覚ましていた。

小さな身体を包んでいる暖かい毛布は、いつもと違う匂いがする。今まで眠っていたベッドは児童養護施設ではなく、別の街にある小さな事務所にあるのである。そのことを思い出すまで、夢つつつの健太は数分を要していた。

一度寝返りを打ってからぼんやりと目を開け、重い瞼をこする。すると、髪をポニーテールにまとめた女性がベッドに突っ伏してかすかな寝息を立てているのがわかった。電気はついておらず部屋の中はしんと静まり返っているが、窓から射し込む街の明かりが辛うじて家具の輪郭が分かる程度にしてくれていた。

健太は傍らで眠り込んでいる亜樹子を起こさないよう、そつと起き上がった。時間ははっきりとわからないが、多分まだ夜中なのだろう。一体誰が名前を呼んだのだろうと、幼子是不思議に思いながら辺りを見回した。

しかし、出入口近くの壁際にあるソファでスーツ姿の堀内が横になっているのがわかっただけで、他には誰もいない。

『健太』

すると今度は耳元で小さく、だがはつきりと自分の名が聞こえた。低い、大人の男性の声である。

健太は細い身体をびくつと震わせ、慌てて声がした方を振り返った。

実は健太は夜中のトイレも一人で行けない怖がりな男の子であったが、彼が悲鳴の一つも上げなかったのは、名を呼ぶ声が聞き覚えのあるそれだったからに他ならない。

だが、彼が暗がりの中で捉えたのは、空中を小さな羽音を立ててホバリングするごく小さな機械仕掛けの鳥であった。

「……おとうさん？」

『そうだよ、健太。待たせたね。静かにこっちにおいで』

ハチドリをかたどった銀色の機械が、父親の声で健太に囁いてきた。聞き間違える筈のない、昼間にも耳にした声である。健太は毛布とシーツの間から這うようにして抜け出し、ベッドから下りて古い運動靴に足を突っ込んだ。

まるでいつもの施設で、見回りの職員の目を盗んで脱出する時のような気分だった。

勿論、臆病な健太に脱走の経験などなかったが、多分今と同じように心臓がどきどきして、見つかりはしないかという緊張感に溢れているのだろう。

普段はそんなことはとてもできないが、今は父が側にいてくれるのだ。何でもできる、という希望が幼い彼に大胆な行動力を与えてくれていた。

ハチドリ型のメモリガジェットは健太の周りを絶えず飛び回り、出入口のドアへと先導していく。健太はその後忍び足で続き、ソファで眠っている堀内の側を慎重にすり抜けてドアの鍵を外した。開けたドアの隙間から吹き込んでくる夜気の冷たさに一瞬だけ怯んだが、健太は狭い空間に身体を素早く滑り込ませるとすぐに後ろ手でドアを閉めた。

関門を突破した安心感から、小さな口からふうっ、と大きな溜め息が出る。

しかし、ハチドリ型ガジェットは急かすように先へと飛んでいった。街の明かりで暗闇に浮かぶ小さな鳥のシルエットを、健太は慌てて目で追いかけた。事務所の外に伸びる廊下から屋外へ出るドアは既に開け放たれており、宙を飛ぶガジェットは薄い街明かりの中へとゆっくり滑っていく。

その後について健太が外へ出ると、かもめビリヤード場のすぐ脇にベージュの古めかしい車が停まっており、後部座席のドアががちゃりと音を立てて勝手に開いたのがわかった。

『さあ、この車と一緒に乗るんだ』

ハチドリガジェットがささずその中へと飛び込み、布張りのシートの上から父の声で呼びかけてくる。言われるままに薄暗い室内灯が照らす埃っぽい車へ首を突っ込もうとして、健太はふと思い止まった。

「ぼく、おにちゃんと一緒に行きたい」

『一人で来ないと駄目だ。健太、お父さんに会いたくないのか？』

しかし渋る健太を咎めるように、父の声に棘が混ざった。いつも暖かだった父の言葉が幼い胸を鋭く刺し、嫌な痛みを覚えさせる。

「……いうことを聞けば、おとうさんにあえるんだよね？」

『お前は何も心配するな。お父さんのことを信じていればいい』

今度はまだ不安そうな息子を静かに諭す姿を垣間見せる口調で、ハチドリガジェットの父は促した。低く落ち着いた声を聞くと、目を細めて優しく微笑む父の顔が浮かんでくるようだった。

「うん」

すっかり安心した健太は笑顔でこっくりと頷き、角ばった車の中へと潜り込んでいく。

運転席に誰も乗っていない古い車が走り去っていったのに、風都の住民の誰一人として、未だ懸命に取るべき道を探るフィリップと照井さえ気づくことはなかった。

未来と翔太郎は、ひっそりと静まり返った真夜中の巨大実験施設敷地内を音も立てずに進んでいた。

土地勘がある未来が先に行き、暗視スコープをつけた警備員や防犯センサーをかわしてから翔太郎を呼び寄せていたが、翔太郎は闇に溶ける彼女の鎧姿を見失わないようにするだけでやっとだ。

考えてみれば未来は隠密行動と破壊仕事を主任務とするために作られているのだから、闇夜で行動するのはまさにうってつけだ。彼女の纏うパワードスーツは基本的に光を反射せず、暗所になじむように設計されている。翔太郎はいちいちデッセンサーを覗いて未来の動きを確認してから移動しなければならなかった。

幸いなことに足元は芝生なので、暗さのせいで時折木の根につまづくことはあっても、足音は殆どしない。また、敷地内の実験施設では終日空調や換気扇が稼働しているところも多く、大型室外機のやかましさを多少の物音はかき消されてしまうのも有難かった。

故に未来と翔太郎は小声で話をしながら目的地を目指すことができていた。

「やっぱりあんたも俺と大体同じ手で、山波博士の居場所を突き止めたのか」

「そう。あのドーパントが逃げる直前に、小型の発信器をくっつけたのだ。場所を確認して驚いたけど、考えてみれば博士はもともとこの関係者だったんだからね。使われなくなった施設にだって簡単に忍び込める筈だもん」

翔太郎の問いへ、先に立っている未来が頷く。彼女は二人で身を潜めている壁の向こう側にヘルメットの頭を覗かせ、周囲を警戒していた。

完全武装した未来と共にC・SOL敷地内で移動し始めて、そろそろ一五分程度だろうか。山波の潜伏先を知っている未来の案内で街灯の影の中を突っ切り、警備員の鋭い視線を避け、特に警備が厳重な武器開発研棟裏の赤外線センサーを誤魔化して進むうちに、いつしか彼女の足も動かなくなっていた。

今いる場所がどこなのかを察した翔太郎が、低い姿勢を保った黒っぽい鎧姿の肩越しに先を見やる。

「で、目的地がここってわけか？」

再びデンデンセンサーを覗いて闇の向こうを確かめている翔太郎に、未来は低い声で説明していく。

「旧AWP棟。何年か前に火事になって、耐火性の問題がはつきりしてから使用禁止になったんだって。ただ、設備なんかはそっくり残ってるから、電気さえ何とかできれば使えるってことなんだけど。ここは警備員もそんなに奥深くまでは見回らないし、隠れるにはうってつけの場所なんだよ。私だって、仲間に聞くまでこんな場

所があつたなんて知らなかつたんだから」

彼女はやや長い言葉でも淀みなく繋ぎながら、両手は忙しく動いていた。今まで抱えていた大型のアサルトライフルは背中のジュラルミン製バックパックの側面に取りつけられており、代わりに拳銃が片手に握られている。

彼女が普段ジャケットに忍ばせているグロックに比べると一・五倍の大きさはあるのではないかと思えるほど、異様に巨大な拳銃だ。「そいつは？」

「デザートイーグル、別名ハンド・キャノン。自動拳銃の中では世界でもトップクラスの威力がある、私の相棒なの。建物の狭い場所では、こつちをメインにするから」

普段と全く違う銃に興味を覚えた翔太郎に、未来はサイレンサーを取りつけた黒光りするデザートイーグルを示して見せた。硬質な金属に包まれた指先が滑らかな動きで外したマガジンを装填し、弾丸を一発分多く込めた銃身を軽く握る。

華奢な女には決して似合わない武器から視線を外すと、翔太郎はもう一度目的の旧AWP棟なる建物を見上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2747t/>

仮面ライダーW 追われるS

2011年10月18日21時53分発行